蟻地獄～積　緋露雪作品集

積　緋露雪著

『蟻地獄～積　緋露雪作品集　Ⅰ』

収録作品

ざわめき……2
蟻地獄……48
障子……58
嗤（わら）ふ吾……60
蘖（ひこばえ）……88
睨まれし……107

ざわめき

積　緋露雪

――君にはあのざわめきが聞こえないのかい？
――えつ、何の事だい？
――時空間が絶えず呻吟しながら《他》の《何か》への変容を渇仰してゐるあのざわめく音が、君には聞こえないのかい？
――ふむ。聞こえなくはないが……その前に時空間が渇仰する《他》とはそもそも何の事だね？
――へつ、《永劫》に決まつてらあ！
――えつ、《永劫》が時空間にとつての《他》？

――さうさ。《永劫》の相の下で時空間はやつと自らを弾劾し果(おほ)せられるのさ。さうする事で時空間はのつぴきならぬところ、つまり、《金輪際》に追ひやられて最終的には《他》に変化(へんげ)出来る。
――へつ、それつて《特異点》の事じやないのかね？
――……すると……君は《永劫》は《特異点》の中の一つの相に過ぎぬと看做してゐるのか……。しかしだ……。
――しかしだ、《特異点》は《存在》が隠し持つてゐる。つまり、時空間と雖も《存在》に左右される宿命を負つてゐる。即ち、時空間は《物体》への変化を求めてゐるに過ぎぬ！　違ふかね？
――否！　《存在》は《物体》の専売特許じやないぜ。時空間もまた「吾とは何ぞや」と自らが自らに重なる不愉快極まりない苦痛をぢつと噛み締めながら自身に我慢してゐるに違ひない。
――では君にとつて《特異点》はどんなものとして形象されてゐるんだい？
――奈落さ。
――ふむ。それで？
――此の世にある《物体》として《存在》してしまつたものはそれが何であらうとも《地獄》の苦痛を味はひ尽くさねばならぬ。
――ふつ、それは時空間とて同じではないのかね？
――さうさ……。時空間も《存在》する以上、《地獄の奈落》を味はひ尽くさねばならぬ。
――その奈落の底、つまり《金輪際》が君の描く《特異点》の形象か？

――《底》といつても、つまり《金輪際》とは限らないぜ。もしかすると、へつへつへつ、《天上界》が《特異点》の在処かもしれないぜ。

――ちえつ、だからどうしたと言ふんだ？　それはある種の詭弁に過ぎぬのじやないかね？

――……自由落下……。俺が《特異点》に対して思ひ描いてゐる形象の一つに、《落下》してゐながら《飛翔》してゐるとしか《認識》出来ない《自由落下》の、天地左右の無意味な状態を《特異点》の一つの形象と看做してゐる……。

――しかし……、《自由落下》では《主体》はあくまで《主体》のままで、《永劫》たる《他》などに変化する事はないんぢやないかな？

――ふつ、《意識》自体が《自由落下》してゐると考へるとどうかね？

――へつ、それも《永劫》の《自由落下》かな？

――ふつふつふつ、さうさ……。《意識》自体の《永劫》の《自由落下》……。どの道……《特異点》の相の下では《意識》……若しくは《思念》以外……その存在根拠が全て怪しいからな。

と、こんな無意味で虚しい事をうつらうつらと瞑目しながら《異形の吾》と自問自答してしまふ彼は、辺りの灯りが消えて深夜の闇に全的に没し、何やら不気味な奇声にも似た音ならざる時空間の《呻く》感じを無闇矢鱈に感じてしまふ、それでゐてぢつと黙したまま何も語らぬ時空間に結果として完全に包囲された状態でしかあり得ぬ己自身に対して、唯唯自嘲するのみしか術がなかつた口惜しさを噛み締めてゐた。この時空間のぴんと張り詰めたかの如き緊迫した感じは、彼の幼少時から続く不思議な感覚――それは彼にとつてはどうしても言葉では言ひ表せないある名状し難い感覚――で、彼にとつて時空間は絶えず音ならざる音を発する奇怪な《ざわめき》に満ちたある《存在》する《もの》、若しくは《実体》ある《もの》として認識されるのであつた。

――くくくあきききいんんん――。

それは彼の脳が勝手にでつち上げた代物かもしれぬが、その時、時空間の《ざわめき》は例へばそんな風に彼には音ならざる《ざわめき》として聞こえてしまふのであつた。そんな時彼は

――ふつふつ……。

と何時も自嘲しながら自身に対して薄ら笑ひを浮かべてはその彼特有であらう時空間の音ならざる《ざわめき》をやり過ごすのであつたが、しかし、さうは言つても彼には彼方此方で時空間が《悲鳴》を上げてゐるとしか感じられないのもまた事実であつた。それは彼にとつては時空間が《場》としてすら《己》を強ひられる事への《悲鳴》としてしか感じられなかつたのである。それ故か彼にとつては《己》は全肯定するか全否定するかのどちらかでしかなく、しかし、彼方此方で時空間が《悲鳴》を上げてゐるとしか感じられない彼にとつては当然、全肯定するには未だ達観する域には達する筈もなく、只管（ひたすら）《己》を全否定する事ばかりへと邁進せざるを得ないのであつた。

……

――へつ、己が嫌ひか？

――ふつふつ、直截的にそれを俺に聞くか……。まあ良い。多分、俺は俺を好いてゐるが故にこの己が大嫌ひに相違ない……。

――へつ、その言ひ種さ、お前の煮え切らないのは。

――ふつふつ、どうぞご勝手に。しかし、さう言ふお前はお前が嫌ひか？

――はつはつはつはつはつ、嫌ひに決まつてらうが、この馬鹿者が！

――……しかし……この《己》にすら嫌はれる《己》とは一体何なのだらうか？

――《己》を《己》としてしか思念出来ぬ哀しい存在物さ。

――それにはこの音ならざる《悲鳴》を上げてゐる時空間も当然含まれるね？

――勿論だぜ。

――きいきいきいんんんん――。

と、その時、突然時空間の音ならざる《悲鳴》がHowling(ハウリング)を起こしたかのやうに彼の鼓膜を劈(つんざ)き、彼の聴覚機能が一瞬麻痺した如くに時空間の《断末魔》にも似た音ならざる大轟音が彼の周囲を蔽つたのであつた……。

――今の聞ゐただらう？

――ああ。

――何処かで因果律が成立してゐた時空間が《特異点》の未知なる世界へと壊滅し変化した音ならざる時空間の《断末魔》に俺には思へたが、お前はどう聞こえた？

――へつ、《断末魔》だと？　はつはつはつ。俺には《己》が《己》を呑み込んで平然としてゐるその《己》が《げつぷ》をしたやうに聞こえたがね――。

――時空間の《げつぷ》？

――否、《己》のだ！

――へつ、だつて時空間もまた時空間の事を《己》と《意識》してゐる筈だらう？　つまりそれは《時空間》が《時空間》を呑み込んで平然として出た《時空間》の《げつぷ》の事ぢやないのか？

――さう受け取りたかつたならばさう受け取ればいいさ。どうぞご勝手に、へつ。

――……ところで《己》が《己》を呑み込むとはどう言ふ事だね？

――その言葉そのままの通りだよ。此の世で《己》を《己》と自覚した《もの》は何としても《己》を呑み込まなければならぬ宿命にある――。

――仮令《己》が《己》を呑み込むとしてもだ、その《己》を呑み込んだ《己》は、それでも《己》としての統一体を保てるのかね？

――へつ、無理さ！

――無理？　それじやあ《己》を呑み込んだ《己》はどうなるのだ？
――……《己》は……《己》に呪はれ……絶えずその苦痛に呻吟する外ない《己》であり続ける責苦を味はひ尽くすのさ。
――へつ、《己》とは地獄の綽名なのか？
――さうだ――。
――さうだだと？　《己》が地獄の綽名だといふのか？
――じやあ、お前は《己》を何だと思つてゐたのだ？　へつ、つまり、お前は《己》を何と名指すのだ？
――そもそもだ、《己》が《己》であつてはいけないないのか？
――いや、そんな事はないがね、しかし、《己》は《己》と名指される事を最も嫌悪する《存在》ぢやないかね？
――ちえつ。
――だから、《存在》する《もの》全てはこの地獄でざわめき呻吟せざるを得ないのさ。
――えつ、地獄での呻吟だと？　先程このざわめきは《己》が《己》を呑み込んだ《げつぷ》と言つた筈だが、それがこのざわめきの正体ではないのかい？
――その《げつぷ》が四方八方至る所で起こつてゐるとしたならば、お前は何とする？
――何とするも何もなからう。無駄な抵抗に過ぎぬ事は火を見るよりも明らかだがね……、唯、耳を塞ぐしかない。まあ、それはさてをき、これは愚問に違ひないが、そもそも《己》は《己》を呑み込まなければ一時も《存在》出来ぬ《存在》なのかね？
――さうさ。《己》は《己》になる為にも《己》を絶えず呑み込み続ける外ないのさ。
――それは詭弁ではないのか？
――詭弁？
――さうさ。《己》は《己》なんぞ呑み込まなくても《己》として既に《存在》してゐる……違ふかね？
――つまり、お前は《存在》すれば即《己》といふ《意識》が《自然》に芽生えると考へてゐるといふ事か……。
――さうだ。
――ふつ、よくそんな能天気な考へに縋れるね。ところで、お前はお前である事が《悦楽》なのかい？
――《悦楽》？　ははあ、成程、自同律の事だな。
――さう、自同律の事さ。詰まる所、お前は自同律を《悦楽》をもつて自認出来るかね？
――ふつ、自同律が不快とばかりは決められないんぢやないかね？　自同律が《悦楽》であつてもいい筈だ。
――じやあ、この耳障りこの上ないざわめきを何とする？
――もしかすると地獄たる《己》といふ《存在》共が「吾、見つけたり。Eurika！」と快哉を上げてゐるのかもしれないぜ。
――ふはつはつはつ。冗談も大概にしろよ。

――冗談？　《己》が《己》である事がそんなにをかしな事なのかい？
――《己》が《己》である事の哀しさをお前は知らないといふのか。《己》が《己》である事の底無しの哀しさを。
――馬鹿が――。知らない訳がなからうが。詰まる所お前は「俺」なのだからな、へつ。
――ならば尚更この耳障りこの上ないざわめきを何とする？
――ふむ。ひと言で言へば、このざわめきから遁れる事は未来永劫不可能だ。つまり、お前が此の世に存在する限り、そして、お前が彼の世へ行つてもこのざわめきから遁れられないのさ。
――へつ、だからこのざわめきを何とする？
――ちえつ、お手上げと言つてゐるだらう。率直に言つて、この《存在》が《存在》してしまふ哀しさによるこの耳障り極まりないざわめきに対しては何にも出来やしないといふ事さ。
――それぢや、このざわめきを受け入れろと？
――ふん、現にお前はお前である事を受け入れてゐるぢやないか！　仮令《存在》の《深淵》を覗き込んでゐようがな。
――くいんんんんん～～。
――ふつ、また何処ぞの《己》が《己》に対してHowlingを起こしてゐやがる。何処かで何ものかが《存在》の《げつぷ》をしたぜ、ちえつ。
――ふむ。……いや……もしかするとこれは《げつぷ》じやなくて《存在》の《溜息》ぢやないのかね？　《存在》が《存在》してしまふ事の哀しき《溜息》……。
――へつへつ、その両方さ。
――ちえつ、随分、都合がいいんだな。それぢや何でもありじやないか？
――《存在》を相手にしてゐるんだから何でもありは当たり前だろ。
――当たり前？
――さう、当たり前だ。ところで一つ尋ねるが、これまで全宇宙史を通して《自存》した《存在》は出現したかい？
――藪から棒に何だね、まあ良い。それは《自律》じやなくて《自存》か？
――さう、《自存》だ。つまり、この宇宙と全く無関係に《自存》した《存在》は全宇宙史を通して現はれた事があるかね？
――ふむ……無いに違ひないが……しかし……この宇宙は実のところそんな《存在》が出現する事を秘かに渇望してゐるんじやないのかな……。
――それがこの宇宙の剿滅を誘はうとも？
――さうだ。この宇宙がそもそも剿滅を望んでゐる。
――何故さう思ふ？
――何となくそんな気がするだけさ。

有機物の死骸たるヘドロが分厚く堆積した溝川（どぶかは）の彼方此方で、鬱勃と湧く腐敗Gas（ガ

ス)のその嘔吐を誘ふ何とも遣り切れないその臭ひにじつと我慢する《存在》にも似たこの時空間を埋め尽くす《ざわめき》の中に、《存在》する事を余儀なくせざるを得ない彼にとつて、しかしながら、それはまた堪へ難き苦痛を彼に齎すのみの地獄の責苦にしか思へぬのであつたが、それは詰まる所、《存在》の因業により発せられる《断末魔》が《ざわめき》となつて彼を全的に襲ひ続けると彼には思はれるのであつた。

……

……

――《存在》は自らの剿滅を進んで自ら望んでゐるのだらうか？

――《存在》の最高の《愉悦》が破滅だとしたならばお前は何とする？

――ふむ……多分……徹底的に破滅に抗ふに違ひない。

――仮令それが《他》の出現を阻んでゐるとしてもかい？

――ああ。ひと度《存在》してしまつたならば仕方がないんぢやないか。

――仕方がないだと？　お前はさうやつて《存在》に服従するつもりなのかい？

――《存在》が自ら《存在》する事を受け入れる事が《存在》の服従だとしても、俺は進んでそれを受け入れるぜ。仮令それが地獄の責苦であつてもな。

――それは、つまり、《死》が怖いからかね？

――へつ、《死》を《存在》自らが決めちやならないぜ、《死》が怖からうが待ち遠しいからうがな。《存在》は徹底的に《存在》する事の宿業を味はひ尽くさなければならぬ義務がある。《存在》が《存在》に呻吟せずに滅んで生れ出た《他》の《存在》などお前は認証出来るかい？　何せこの宇宙が自ら《存在》に呻吟して《他》の宇宙の出現を渇望してゐるのだからな。

――つまり、《存在》が呻吟し尽くさずして何ら新たな《存在》は出現しないと？

――ふつ、違ふかね？

――くいんんんんんん～。

また何処かで《吾》が《吾》を呑み込む際に発せられる《げつぷ》か《溜息》か、将又(はたまた)《嗚咽》かが howling(ハウリング)を起こして彼の耳を劈くのであつた。それは《存在》が尚も存続しなければならぬ哀しみに違ひなかつた。《他》の《死肉》を喰らふばかりか、この《吾》すらも呑み込まざるを得ぬ《吾》といふ《存在》の悲哀に森羅万象が共鳴し、一瞬 Howling(ハウリング)を起こす事で、それはこの宇宙の宇宙自身に我慢がならぬ憤怒をも表はしてゐるのかもしれなかつたのである。その《ざわめき》は死んだ《もの》達と未だ出現ならざる《もの》達と何とか呼応しようと懇願する、出現してしまつた《もの》達の虚しい遠吠えに彼には思へて仕方がなかつたのであつた。

実際、彼自身、昼夜を問はず《吾》を追ひ続け、やつとの事で捕まへた《吾》をごくりとひと呑みする事で《吾》は《吾》である事を辛うじて受け入れる、そんな何とも遣

り切れぬ虚しい日々を送つてゐたのであつた。

……

……

――《存在》は全て《吾》である事に懊悩してゐるのであらうか？

――全てかどうかは解からぬが、少なくとも《吾》が《吾》である事に懊悩する《存在》は《存在》する。

――ふつ、そいつ等も吾等と同様に《吾》といふ《存在内部》に潜んでゐる《特異点》といふ名の《深淵》へもんどりうつて次次と飛び込んでゐるのだらう……。さうする事で辛うじて《吾》は《吾》である事を堪へられる。ちえつ、「不合理故に吾信ず」か――。

――付かぬ事を聞くが、お前は、今、自由か？

――何を藪から棒に。

――つまり、お前は《特異点》に飛び込んだ事で、不思議な事ではあるが《自在なる吾》、言ひ換へると内的自由の中にゐる自身を感じないのかい？

――それは天地左右からの解放といふ事かね？

――へつ、つまり、重力からの仮初の解放だよ。

――重力からの仮初の解放？　へつ、ところがだ、《吾》は《特異点》に飛び込まうが重力からは決して解放されない！

――お前は、今、自身が落下してゐると明瞭に認識してゐるのかね？

――……。

――何とも名状し難い浮遊感に包まれてゐるのぢやないかね？

――へつ、その通りだ。

――それは重力に仮初にも身を、否、意識を任せた結果の内的な浮遊感だらう？

――ちえつ、それは、つまり、《地上の楽園》を断念し《奈落の地獄》を受け入れた事による《至福》といふ事かね？

――へつ、何を馬鹿な事を言ふ。それは《存在》が《存在》してしまふ事の皮肉以外の何ものでもないさ。

――皮肉ね。そもそも《存在》とは皮肉な《もの》ぢやないのかね？

――さうさ。《存在》はその出自からして皮肉そのものだ。何せ、自ら進んで《特異点》といふ名の因果律が木つ端微塵に壊れた《奈落》へ飛び込むのだからな。

――やはり《意識》が《過去》も《未来》も自在に行き交へてしまふのは、《存在》がその内部に、へつ、その漆黒の闇を閉ぢ込めた《存在》の内部に因果律が壊れた《特異点》を隠し持つてゐるからなのか？

――そしてその《特異点》といふ名の《奈落》は《存在》を蠱惑して已まない。

――へつ、だから《特異点》に飛び込んだ《意識》は《至福》だと？

――だつて《特異点》といふ《奈落》へ飛び込めば、《意識》は《吾》を追ふ事に熱中出

来るんだぜ。
――さうして捕らへた《吾》をごくりと呑み込み《げつぷ》をするか――。へつ、詰まる所、《吾》はその呑み込んだ《吾》に食当たりを起こす。《吾》は《吾》を《吾》として認めやしない。つまり、《吾》を呑み込んだ《吾》は《免疫》が働き《吾》に拒絶反応を起こす。
――それはどうしてか？
――元元《吾》とは迷妄に過ぎないのさ、ちえつ。
――それでも《吾》は《吾》として《存在》するぜ。
――本当に《吾》は《吾》として《存在》してゐるとお前は看做してゐるのかね？
――ちえつ、何でもを見通しなんだな。さうさ。お前の見立て通りさ。この《吾》は一時も《吾》であつた試しがない。
――それでも《吾》は《吾》として《存在》させられる。
――くきいんんんんんん～～。
一時も休む事なくぴんと張り詰めた彼の周りの時空間で再び彼の耳を劈くその時空間の断末魔の如き《ざわめき》が起きたのであつた。それは羊水の中から追ひ出され、臍の緒を切られて此の世で最初に肺呼吸する事を余儀なくさせられた赤子の泣き声にも似て、何処かの時空間が此の世に《存在》させられ、此の世といふその時空間にとつては未知に違ひない世界で、膨脹する事を宿命付けられた時空間の呻き声に彼には聞こえてしまふのであつた。「時空間が膨脹するのはさぞかし苦痛に違ひない」と、彼は自ら嘲笑しながら思ふのであつた。
――なあ、時空間が膨脹するのは何故だらうか？
――時空間といふ《吾》と名付けられた己に己が重なり損なつてゐるからだらう？
――己が己に重なり損なふといふ事は、この時空間もやはり自同律の呪縛からは遁れられぬといふ事に外ならないといふ事だらうが、では何故に時空間は膨脹する道を選んだのだらうか？
――自己増殖したい為だらう？
――自己増殖？　何故時空間は自己増殖しなければならないといふのか？
――ふつ、つまり、時空間は此の世を時空間で占有したいのだらう。
――此の世を占有する？　何故、時空間は此の世を占有しなければならないのか？
――「《吾》此処にあるらむ！」と叫びたいのさ。
――あるらむ？
――へつ、さうさ、あるらむだ。
――つまり、時空間もやはり己が己である確信は持てないと？
――ああ、さうさ。此の世自体が此の世である確信が持てぬ故に《特異点》が《存在》し得るのさ。逆に言へば《特異点》が《存在》する可能性が少しでもあるその世界は、世界自体が己を己として確信が持てぬといふ事だ。
――己が己である確信が持てぬ故にこの時空間は己を求めて何処までも自己増殖しなが

ら膨脹すると？

――時空間が自己増殖するその切羽詰まつた理由は何だと思ふ？

――妄想が持ち切れぬのだらう。己が己に対して抱くその妄想が。

――妄想の自己増殖と来たか――。

――実際、己が己に抱く妄想は止めやうがなく、己が己に対する妄想は自然と自己増殖せずにはゐられぬものさ。深海生物のその奇怪な姿形こそが己が己に対して抱く妄想の自己増殖が行き着ゐた一つの厳然とした事実とは思はぬかね？

――ふつふつ、深海生物ね……。まあ、よい。それよりも一つ付かぬ事を聞くが、お前はこの宇宙以外に《他》の宇宙が《存在》すると考へるかね？

――つまり、《他》の宇宙が《存在》すればこの宇宙の膨脹はあり得ぬと？

――へつ、《他》の宇宙が仮に《存在》してもこの宇宙の《餌》でしかなかつたならば？

――宇宙の《餌》？　それは一体全体何の事だね？

――字義通り只管（ひたすら）この宇宙の《餌》になるべくして誕生した宇宙の事さ。

――生き物を例にして生きて《存在》する《もの》は大概口から肛門まで管上の《他》たる穴凹が内部に存在すると看做せば、その問題の《他》の宇宙をこの宇宙が喰らふといふ事は、即ち、この宇宙内に《他》の宇宙の穴凹がその口をばつくりと開けてゐるといふ事ぢやないかね？

――ふつふつ、それはまたどうして？

――つまり、喰らふといふ行為そのものに《他》を呑み込み、《他》をその内部に《存在》する事を許容する外部と通じた《他》の穴凹が、この《存在》にその口を開けてゐなければならぬのが道理だからさ。

――だから、お前はこの宇宙以外の《他》の宇宙が《存在》する可能性があると考へるのかね？

――当然だらう。

――当然？

――《他》の宇宙、ちえつ、それはこの宇宙の《餌》かもしれぬが、《他》の宇宙無くしてはこの宇宙が《吾》といふ事を認識する屈辱を味はひはしないぢやないか！

――やはり、《吾》が《吾》を認識する事は屈辱かね？

――ああ。屈辱でなくしてどうする？

――ふつふつ、やはり屈辱なのか、この不快な感覚は――。まあ、それはともかく、お前はこの宇宙以外の《他》の宇宙が《存在》する可能性は認める訳だね？

――多分だか、必ず《他》の宇宙は《存在》する筈さ。

――それはまたどうしてさう言ひ切れるのかね？

――それは、この宇宙に《吾》であるといふ事を屈辱を持つて噛み締めながらもどうしても《存在》しちまふ《もの》共が厳然と《存在》するからさ。

――《吾》が《存在》するには必ず《他》が《存在》すると？

――ああ。《他》無くして《吾》無しだ。
――すると、この宇宙が生きてゐるならばこの宇宙には必ず《他》に開かれた穴凹が《存在》する筈だが？
――へつ、この《吾》といふ《存在》自体がこの宇宙に開ゐた穴凹ぢやないかね？
――それは《特異点》の問題だらう？
――さうさ。《存在》は必ず《特異点》を隠し持たなければ、此の世に《存在》するといふ《存在》そのものにある不合理を、論理的に説明するのは不可能なのさ。
――さうすると、《他》の宇宙は反物質で出来た反＝宇宙なんかではちつともなく、《吾》と同様に厳然と実在する《他》といふ事だね？
――例へば、巨大 Black hole(ブラツクホール)は何なのかね？
――ふつ、Black hole が《他》と繋がつた此の世に開ゐた、若しくはこの宇宙に開ゐた穴凹であると？
――でなくてどうする？
――さうすると、銀河の中心には必ず《他》が《存在》すると？
――ああ、さう考へた方が自然だらう？
――自然？
――何故なら颱風の目の如くその中心に《他》が厳然と《存在》する事で颱風の如く渦は渦を巻けると看做せるならば、例へば銀河も大概渦を巻いてゐるのだからその中心に《他》が《存在》するのは自然だらう？
――ふつ、つまり、渦の中心には《他》に開かれた穴凹が《存在》しなければ不自然だと？
――而もその《他》の穴凹は、《吾》に《垂直》に《存在》する。
――さうすると、銀河の中心では絶えず《吾》に《垂直》に《存在》する《他》の宇宙に呑み込まれるべく《吾》たる宇宙が《存在》し、さうして初めてこの宇宙が己に対する止めどない妄想を自己増殖させつつ膨脹する事が可能だとお前は考へてゐるのかね？否、その逆かな。つまり、この宇宙が絶えず己に対する《吾》といふ観念を自己増殖させて膨脹するから、その中心に例へば巨大 Black hole を内在させてゐる……。さうだとするとこの耳を劈くこの宇宙の《ざわめき》は己が己を呑み込む《げつぷ》ではなく、《他》が《吾》を呑み込む、若しくは《吾》が《他》を呑み込む《げつぷ》ぢやないのかね？
――ふつふつふつ、ご名答と言ひたいところだが、未だ《他》の宇宙が確実に此の世に《存在》する観測結果が何一つない以上、この不愉快極まりない《ざわめき》は己が無理矢理にでも己を呑み込まなければならぬその己たる《吾》＝宇宙が放つ《げつぷ》と看做した方が今のところは無難だらう？
――無難？　へつ、己に嘘を吐くのは已めた方がいいぜ。
――嘘？　どうして嘘だと？
――へつ、お前は、実際のところ、この宇宙の《存在形式》以外の《存在形式》が必ず

なくてはならぬと端から考へてゐるからさ。

――へつへつへつ、図星だね。

　此の世に《存在》するあらゆる《もの》の《存在形式》は、此の宇宙の摂理に従属してゐると看做しなしてしまひ、そして、それをして此の宇宙たる《吾》が《存在》する《存在形式》を、例へば「《吾存在》の法則」と名付ければ、必ずそれに呼応した「《他存在》の法則」が《存在》すると考へた方が《自然》だと思ひながら、その《自然》といふ言葉に《自然》と自嘲の嗤ひをその顔に浮かべてしまふ彼は、此の《吾》＝《自然》以外の《他》＝《自然》もまた《存在》するに違ひないと一人合点しては、

――ふつ、馬鹿めが！

と、即座に彼を罵る彼の《異形の吾》の半畳にも

――ふつふつふつ。

と、皮肉たっぷりに己に対してか《異形の吾》に対してか解からぬが、その顔に薄笑ひを浮かべては、

――しかし、《自然》は《吾》＝《自然》以外の《他》＝《自然》の出現を待ち望む故に、《吾存在》を呑み込む《吾存在》がその《吾》に拒絶反応を起こしてはこの耳障りな断末魔の如き《ざわめき》が《吾》の彼方此方にぽつかりと開ゐた《他》たる穴凹から発してゐるに違ひないのだ。

　と、これまた一人合点する事で、彼は彼の《存在》に辛うじて我慢出来るそんな切羽詰まつたぎりぎりの《存在》の瀬戸際で弥次郎兵衛の如くあつちにゆらり、こつちにゆらりと揺れてゐる己の《存在形式》を悲哀を持つて、しかし、心行くまで楽しんでゐるのであつた。

……

……

――なあ、「《他存在》の法則」に従属する《他》＝宇宙における《存在》もまた奇怪千万な《光》へと還元出来るのだらうか？

――つまり、それつて《光》の《存在》が此の宇宙たる《吾》＝宇宙と《他》＝宇宙を辛うじて繋ぐ接着剤と看做せるか、といふ事かね？　仮にさうだとすればそれはまた重力だとも、さもなくば時間だとも考へられるね？

――ああ、何でも構はぬが、《吾》が《存在》すれば、《他》が《存在》するのが必然ならばだ、此の宇宙が《存在》する以上、此の宇宙とは全く摂理が違ふ、つまり、「《他存在》の法則」に従属する《他》＝宇宙は何としても《存在》してしまふのは、《もの》の道理だらう？

――ああ。

――そして、《吾》と《他》は何かしらの関係を持つのもまた《もの》の道理だらう？

――ああ、さうさ。此の世における《他》の《存在》がそもそも「《他存在》の法則」を

暗示させるし、《他》が《存在》すれば《吾》と何かしらの関係を《他》も《吾》も持たざるを得ぬのが此の宇宙での道理だが、さて、しかし、仮令《他》＝宇宙が《存在》してもだ、此の《吾》＝宇宙と関係を持つかどうかは、とどのつまりは「《他存在》の法則」次第ぢやないかね？

――それは《吾》と《他》が関係を持つのは徹頭徹尾、此の《吾》＝宇宙での「《吾存在》の法則」による此の世の出来事は、《他》＝宇宙での「《他存在》の法則」に変換出来なければならず、つまり、換言すれば、《吾》＝宇宙と《他》＝宇宙の関係は関数で表わされねばならず、更にそれは最終的には光といふ奇怪千万な《存在形式》に還元されてしまはなければならぬといふ事だね？

――ああ、さうさ。

――ならばだ、《吾》が「《吾存在》の法則」のみに終始すると《吾》＝宇宙は未来永劫《他》＝宇宙の《存在》を知らずにゐる可能性もあるといふ事だね？

――さうさ。むしろその可能性の方が大きいのぢやないかな。実際、此の世でも《吾》が未来永劫に亙つて見知らぬ《他》は厳然と数多《存在》するぢやないか。

――それはその通りに違ひないが、しかし、《吾》と未来永劫出会ふ事なく、一見《吾》とは無関係に思へるその《他》の《存在》、換言すれば《存在》の因果律無くしては《吾》は決して此の世に出現出来ないとすれば、《吾》は必ず、それが如何なる《もの》にせよ、その《もの》たる《他》と何らかの関係を持つてしまふと考へられぬかね？

――へつ、つまり、此の宇宙も数多《存在》するであらう宇宙の一つに過ぎず、換言すれば、数多の宇宙が《存在》する Multiverse たる「大宇宙」のほんの一粒の砂粒程度の塵芥にも等しい局所の《存在》に過ぎぬと？

――へつへつへつ、その「大宇宙」もまた数多《存在》するつてか――。

――つまり、《吾》と《他》とは共に自己増殖せずにはゐられぬ Fractal(フラクタル)な関係性にあると？

――多分だが、さうに違ひない。しかし、「《吾存在》の法則」と「《他存在》の法則」は関数の関係にはあるが、全く別の《もの》と想定した方が《自然》だぜ。

――何故かね？

――ふつ、唯、そんな気がするだけさ。

――そんな気がするだけ？

――さうさ。例へば私と《他人》は全く同じ種たる人間でありながら、《吾》にとつては超越した《存在》としてその《他人》を看做す外に、《吾》は一時も《他人》を承認出来ぬではないか！　而もだ、私が未来永劫見知らぬ未知の《他人》は数多《存在》するといふのも此の世の有様として厳然とした事実だぜ。

――逆に尋ねるが、《吾》が仮に《他》と出会つた場合、それは Starburst(スターバースト)の如く《吾》にも《他》にもどちらにも数多の何かが生成され、ちえつ、それは爆発的に誕生すると言つた方がいいのかな、まあ、いづれにせよ、《吾》と《他》と出会ひ、つまりは《吾》≠宇宙と《他》≠宇宙の衝突は、数多の《吾》たる何かと、数多の《他》

たる何かを誕生させてしまふとすると、それは寧ろ男女の性交に近しい何かだと思ふのだが、君はどう思ふ？

——それは銀河同士の衝突を思つての君の妄想だらうが、しかし、此の世が《存在》するのであれば、彼の世もまた《存在》せねば、《存在》は爆発的になんぞ誕生はしなかつたに違ひないと思ふが、つまり、彼方此方で「くくくきききいんんんん〜〜」などといふ時空間の《ざわめき》は起こる筈はない。

——へつ、《吾》＝宇宙が《吾》を呑み込んだげつぷだらう、その《ざわめき》は？

——さうさ。《吾》＝宇宙が《他＝吾》若しくは《反＝吾》、つまり、《吾ならざる吾》を呑み込まざるを得ぬ悲哀に満ちた溜息にも似たげつぷさ。

——くくくきききいんんんん。

と、再び彼の耳を劈く断末魔の如き不快で耳障りな時空間の《ざわめき》が彼を全的に呑み込んだのであつた。そして、彼は一瞬息を詰まらせ、思はず喘ぎ声を

——あつは。

と漏らしてしまひ、《吾》ながら可笑しくて仕様がなかつたのであつた。

——ぷふい。

……

……

——何がをかしい？

——いや何ね、《吾》と《他》の来し方行く末を思ふと、どうも俺にはをかしくて仕様がないのさ。

——膨脹する此の《吾》＝宇宙が《他》を餌にし、また、その《他》を消化する消化器官といふ《他》へ通じる穴凹を持たざるを得ぬ宿業にあるならばだ、そして、此の《吾》が数多の《他》に囲まれて《存在》してゐるに違ひないとすると、此の《吾》といふ《存在》のその不思議は、へつ、《吾》といふ《存在》もまた《他》に喰はれる宿命にあるをかしさは、最早嗤ふしかないぢやないか。

——あつは、さうだ、《吾》が《他》に喰はれる！　さうやつて《吾》と《他》は輪廻する。

——つまり、《吾》が《他》を喰らへば、《他》は《吾》に消化され、《物自体》が露になるかもしれぬといふ事だらう？

——《吾》もまた然りだ。しかし、それは《物自体》でなく、《存在》の原質さ。

——《存在》の原質？

——さう。ばらばらに分解された《存在》の原質には勿論自意識なる《もの》がある筈だが、そのばらばらの《存在》の原質が何かの統一体へと多細胞生物的な若しくは有機的な《存在》へと進化すると、その総体をもつてして「俺は俺だ！」との叫び声、否、羊水にたゆたつてゐた胎児が産道を通り、つまり、《他》へ通づる穴凹を通つて生まれ出

た赤子が、臍の緒を切られ最初に発するその泣き声こそが、「俺は俺だ！」と、朧に自覚させられる契機になるのさ。

――つまり、それは、此の時空間の彼方此方で発せられる耳を劈く《ざわめき》こそが「俺は俺だ！」と朧に自覚させられるその契機になつてしまふといふ事か？

――だから、げつぷなのさ。《吾》はげつぷを発する事で朧に《吾》でしかないといふ宿業を自覚し、ちえつ、《吾》は《吾》である事を受容するのさ。

――受容するからこそ《吾》がげつぷを発する、否、発する事が可能ならばだ、《吾》が《吾》にぴたりと重なる自同律は、《吾》における泡沫の夢に過ぎぬぢやないかね？　つまり、《吾》は《吾》でなく、そして、《他》は《他》でない。

――さう。全《存在》が己の事を自己同一させる事を拒否するのが此の世の摂理だとすると、へつ、《存在》とはそもそもからして悲哀を背負つた此の世の皮肉、つまり、それは特異点の《存在》を暗示して已まない何かの《もの》に違ひない筈だ――。

――《存在》そのものが、そもそも矛盾してゐるぢやないか！

――だから《存在》は特異点を暗示して已まないのさ。

――へつ、矛盾＝特異点？　それは余りにも安易過ぎやしないかね？

――特異点を見出してしまつた時点で、既に、特異点は此の世に《存在》し、その特異点の面（をもて）として《存在》が《存在》してゐるとすると？

――逆に尋ねるが、さうすると、無と無限の境は何処にある？

――これまた、逆に尋ねるが、それが詰まるところ主体の頭蓋内の闇たる五蘊場に明滅する表象にすら為り切れぬ泡沫の夢達だとすると？

――ぶはつ。

――をかしければ嗤ふがいいさ。しかし、《存在》は、既に、ちえつ、「先験的」に矛盾した《存在》を問ふてしまふ《存在》でしかないといふ Tautology（トートロジー）を含有してゐる以上、《存在》は《存在》する事で既に特異点を暗示しちまふのさ。

――さうすると、かう考へて良いのかね？　つまり、《存在》は無と無限の裂け目を跨ぎ果（をほ）せると？

――現にお前は《存在》してゐるだらう？

――くきいんんんん――。

と、再び彼は耳を劈く不快な《ざわめき》に包囲されるのであつた。

……

……

――しかし、《存在》は己の《存在》に露程にも確信が持てぬときてる。その証左がこの不愉快極まりない《ざわめき》さ。

――ふつふつふつ。《存在》が己の《存在》に確信が持てぬのは当然と言へば当然だらう。何せ《存在》は無と無限の裂け目を跨ぎ果す特異点の仮初の面なんだから。

――やはり、《存在》は仮初かね？

――仮初でなけりや、何《もの》も《吾》である事に我慢が出来ぬではないか！　《存在》は《存在》において、《一》＝《一》を見事に成し遂げ、此の世ならざる得も言はれぬ恍惚の境地に達するとでも幽かな幽かな幽かな幻想でも抱いてゐたのかね？

――それぢや、お前がげつぷと言ふこの不愉快極まりない《ざわめき》は何なのかね？この《ざわめき》こそ《存在》が《存在》しちまふ事の苦悶の叫び声ではないのかね？

――仮にさうだとしてお前に何が出来る？

――やはり、苦悶の叫び声なんだな……。

――さう。《存在》するにはそれなりの覚悟が必要なのさ。だが、今もつて何《もの》も《吾》が《吾》である事に充足した《存在》として、此の全宇宙史を通じて《存在》なる《もの》が出現した事はない故に、へつ、《吾》が《吾》でしかあり得ぬ地獄での阿鼻叫喚が《ざわめき》となつて此の世に満ちるのさ。しかし、その《吾》といふ名の地獄での阿鼻叫喚は苦悶の末の阿鼻叫喚であつた事はこれまで一度もあつたためしがなく、つまり、地獄の阿鼻叫喚と呼ぶ《もの》の正体は、《吾》が《吾》である事に耽溺した末の《吾》に溺れ行く時の阿鼻叫喚、つまり、性交時の女の喘ぎ声にも似た恍惚の歓声に違ひないのさ。

――歓声？

――さう。喜びに満ちた《存在》の歓声さ。

――ちえつ、これはまた異な事を言ふ。この不愉快極まりない《ざわめき》が喜びに満ちた歓声だと？

――性交時の女の喘ぎ声にも似た《吾》が《吾》の快楽に溺れた歓声だから、へつ、尚更、《吾》はこの《ざわめき》が堪らないのさ。惚れた女の恍惚の顔と喘ぎ声は、男を興奮させるが、しかし、その興奮は、また、気色悪さで吐き気を催す感覚と紙一重の違ひでしかなく、つまり、酩酊するのも度が過ぎれば嘔吐を催すといふ事に等しく、女と交合してゐる男は、さて、どれ程恍惚の中に耽溺してゐる《存在》か、否、交合においてのみ死すべき宿命の《存在》たる《吾》といふ名の《地獄》が極楽浄土となつて拓ける――のか？

――つまり、約めて言へば、この《ざわめき》は恍惚に満ちた《他》の《ざわめき》だと？

――さうさ。

――すると、《吾》にとつて《他》の恍惚が不愉快極まりないのは、《吾》が《吾》に耽溺するその気色悪さ故にその因があると？

――当然だらう。特異点では別に《一》＝《一》が成り立たうが、成り立たなからうが、どうでもよい事だからな。

――へつ、そりやさうだらう。だが、《一》の《もの》として仮初にも《存在》せざるを

得ぬ《吾》なるあらゆる《もの》は、此の世で《一》＝《一》となる確率が限りなく零に近いにも拘はらず、《吾》は現世において《吾》＝《吾》を欣求せずにはいられぬ故に、ちえつ、《吾》は《吾》に我慢がならず、その挙句に《吾》は《吾》を忌み嫌ふ結果を招くのではないか？

――逆に尋ねるが、此の《吾》なる《存在》は、此の世に徹頭徹尾《吾》を実在する《もの》として認識したいのだらうか？

――はて、お前が言ふその実在とはそもそも何の事かね？

――ふむ。実在か……。つまり、実在とはそもそも仮初の《存在》に過ぎぬと思ふのかい？

――当然だらう。

――当然？

――所詮、《存在》は、ちえつ、詰まる所、確率へと集約されてしまふしかない《もの》だからね。

――やはり、《一》＝《一》は泡沫の夢……か。

――さうさ。《一》すらも、へつ、《一》が複素数ならば、複素数としての仮面を被つた《一》の面は、ｌｎ８×ｉといふ虚部の仮面をも被つた《存在》として此の世に現はれなければをかしいんだぜ。

――へつ、さうだとすると？

――しかし、……、虚数単位をｉとすると、ｌｎ８×ｉは、さて、虚数と言へるのかね？

――８×ｉが虚数かどうかに如何程の意味があるのかね？　しかし、残念ながらｌｎ８×ｉもまた虚数な筈だぜ。

――つまり、ｌｎ８×ｉが虚数だとすると、実在は、即ち、《存在》は必ず複素数として此の世に《存在》する事を強ひられる以上、その《存在》は必ず不確定でなければならぬ事態になるが、へつ、その不確定、つまり、曖昧模糊とした《吾》として、この《吾》なる《存在》は堪へられるのかね？

――だから、《吾》が《吾》を呑み込む時にげつぷが、若しくは恍惚の喘ぎ声がどうしても出ちまふのさ。

――くきいんんんん――。

　再び、彼の耳を劈く不快極まりない《ざわめき》が何処とも知れぬ何処かからか聞こえて来たのであつた。

――すると、《一》は一時も《一》として確定される事はないといふ事だね？

――ああ、さうさ。

――しかし、ある局面では《一》は《一》であらねばならぬのもまた事実だ。違ふかね？

――さあ、それは解からぬが、しかし、《存在》しちまつた《もの》はそれが何であれ、此の世に恰も実在するが如くに《存在》する術、ちえつ、つまり《インチキ》を賦与されてゐるのは間違ひない。

――ちえつ、所詮、実在と《存在》は未来永劫に亙つて一致する愉悦の時はあり得ぬの

か――。

――それでも、《吾》も《他》も、つまり、此の世の森羅万象は《存在》する。さて、この難問をお前は何とするのかね？

――後は野となれ山となれってか――。つまり、《他》によつて観測の対象になり下がつてしまふ《吾》のみが、此の世の或る時点で確定した《吾》として実在若しくは《存在》するかの如き《インチキ》の末にしか《吾》が《吾》だといふ根拠が、そもそも此の世には《存在》しない、ちえつ、忌忌しい事だがね。

――だから、《存在》は皆《ざわめく》のさ。

――つまり、《一》者である事を《他》の観測によつて強要される《吾》は、《一》でありながら、其処には《零》といふ《存在》の在り方すら暗示するのだが、《一》者である事を強要される《他》における《吾》は、しかし、《吾》自身が《吾》を確定しようとすると、どうしても《吾》は－∞から＋∞の間を大揺れに揺れる或る振動体としてしか把握出来ぬ、換言すれば、此の世に《存在》するとは絶えず±∞へと発散する《渾沌》に《存在》は曝されてゐる、儚い《存在》としてしか、ちえつ、実在出来ぬとすると、へつ、《存在》とはそもそも哀しい《もの》だね。

――くきいんんんん――。

――だからどうしたと言ふのかね？　へつ、哀しい《もの》だからと言つて、その哀しさを拭う為に直ちにお前はその哀しい《もの》として《存在》する事を已められるかね？

――へつ、已められる訳がなからうが――。

――土台、《吾》とは何処まで行つても《吾》によつて仮想若しくは仮象された《吾》以上にも以下にもなれぬ、しかし、《他》が厳然と《存在》する故に、《吾》は《他》によつて観察された《吾》である事を自然の摂理として受け入れる外ない矛盾！　嗚呼。

――それ故、男は女を、女は男を、換言すれば、陰は陽を、陽は陰を求めざるを得ぬといふ事かね？

――さう。男女の交合が悦楽の中に溺れるが如き《もの》なのは、《吾》が《吾》であつて、而も、《吾》である事からほんの一寸でも解放されたかの如き錯覚を、《吾》は男女の交合のえも言へぬ悦楽の中に見出す愚行を、へつ、何時迄経つても已められぬのだ。哀しい哉、この《存在》といふ《もの》は――。

――へつ、男女の交合の時の愉悦？　さて、そんな《もの》が、実際のところ、《吾》にも《他》にもあるのかね？

――多分、ほんの一時はある筈さ。それも阿片の如き《もの》としてな。また、チベット仏教では男女の交合は否定されるどころか、全的に肯定されてゐて、男女間の交合は悟りの境地の入り口でもある。

――つまり、男女の交合時、《吾》と《他》は限りなく《一》者へと漸近的に近付きながら、《吾》と《他》のその《一》が交はる、つまり、《一》ではない崇高な何かへと限りなく漸近すると？

――へつ、此の世に《一》を脱するかの如き仮象に溺れる愉悦が無ければ、《存在》は已

の《存在》するといふ屈辱には堪へ切れぬ《もの》なのかもしれぬな。
——だから、《吾》は《吾》を呑み込む時、不快なげつぷを出さざるを得ぬのさ。
——はて、一つ尋ねるが、男女の交合の時、その《存在》は不快なげつぷを出すのかね？
——喘ぎはするが、げつぷはせぬといふのが大方の見方だらう。だがな……。
——しかし、仮に男女の交合時が此の世の一番の自同律の不快を体現してゐると定義出来たならばお前はどうする？
——ふつふつ。さうさ。男女の交合時が此の世の一番の自同律の不快の体現だ。
——つまり、男女の交合時、男女も共に存在し交合に耽るのだが、詰まる所、男女の交合は、交合時にその男女は己の《吾》といふ底知れぬ陥穽に自由落下するのだが、結局のところ、《他》が自由落下する《吾》を掬ひ取つてくれるといふ、ちえつ、何たる愚劣！その愉悦に、つまり、一対一として、《吾》が此の世では、やはり、徹頭徹尾、《吾》といふ独りの《もの》でしかない事を否が応でも味ははなければならぬ。その不快を、《吾》は忘却するが如く男女の交合に、己の快楽を求め、交合に無我夢中になつて励むのが常であるが、それつて、詰まる所、自同律からの逃避でしかないのぢやないかね？
——つまり、男女の交合とは、仮初にも《吾》と《他》との《重ね合はせ》といふ、此の世でない彼の世への入り口にも似た《存在》に等しく与へられし錯覚といふ事か——。
——くきいんんんん——。
——でなければ、此の世を蔽ひ尽くすこの不快極まりない《ざわめき》を何とする？
——それでは一つ尋ねるが、男の生殖器を受け入れた女が交合時悲鳴にも似た快楽に耽る喘ぎ声を口にするのもまた自同律の不快故にと思ふかね？
——さうさ。男の生殖器すら呑み込む女たる雌は、男たる雄には到底計り知れぬ自同律の不快の深さにある筈さ。
——筈さ？　ちえつ、すると、お前にも男女の交合の何たるかは未だ解かりかねるといふ事ぢやないかい？
——当然だらう。現時点で《吾》は《死》してゐないのだから、当然、正覚する筈も無く、全てにおいて断言出来ぬ、《一》ならざる《存在》なのだからな。
——しかし、生物は《性》と引き換へにか、《死》と引き換へにかは解からぬが、何故《死》すべき《存在》を《性》と引き換へに選択したんだらう？
——それは簡単だらう。つまり、《死》と引き換へに《性》を選び、《死》すべき《存在》を選ばざるを得なかつたのさ。それ以前に、《存在》とは《死》と隣り合はせとしてしか此の世に《存在》する事を許されぬのではないかね？
——くきいんんんん——。
——それはまた何故？
——約めて言へば種の存続の為さ。
——ちえつ、つまり、種が存続するには個たる《存在》は《死》すべき《もの》として此の世に《存在》する事を許された哀れな《存在》でしかないのさ。
——だが、その哀れな《存在》で構はぬではないか。

――ああ。不死なる《存在》が仮に《存在》したとしてもそれはまた自同律の不快を未来永劫に亙つて味はひ尽くす悲哀！

――それを「《吾》、然り！」と受け入れてこその《存在》ぢやないのかね？

――ふつ、「《吾》、然り！」か……。しかし、《吾》は気分屋だぜ。

――だから「《吾》、然り！」なのさ。

――つまり、《存在》は、即ち森羅万象は、全て「《吾》、然り！」と呪文を唱へてやつと生き延びるか――。

――例へば《存在》が《吾》を未来へと運ぶ、若しくはRelayする《もの》だとしたならば？

――ふつ、つまり、ＤＮＡが《存在》を、否、《私》なる自意識を未来へ運ぶ乗り物と看做す、へつ、一つの「見識」ある考へ方を持ち出して、仮初の《合理》を得ると言ふ、つまり、現代の迷信にもなり兼ねない《科学》的なる《もの》を持ち出す馬鹿馬鹿しい話をしたいのかい？

――馬鹿な話？　何故に馬鹿な話と断定できるのかね？

――《科学》は絶えず時代遅れの概念になつちまふからさ。

――例へばここで「クオリア」といふ《もの》を持ち出して、人間の感覚、または、統覚について何かを語る事がすでに時代遅れと言ふのかね？

――さうさ。《科学》的なる思考は、若しくは概念は絶えず《更新》されるべく《存在》してゐるからさ。

――つまり、《存在》を意識する《吾》もまた「クオリア」だとして、その《吾》といふ《もの》が、仮初にも《科学》を受け入れるならば、《吾》なる《もの》、その《吾》といふ「クオリア」もまた絶えず《更新》されてゐると？

――違ふかね？

――さうすると、《吾》は《吾》によつて絶えず乗り越えられるといふ思考は、下らぬ自己満足でしかないといふ事か……。

――さうさ。「クオリア」を《吾》が《吾》に対する表象と同義語と看做すならばだ、《吾》なる《もの》はそれが何であれ「《吾》、然り！」と全的に自己肯定して此の世界を闊歩するのが一番さ。

――絶えずこの世界を《肯定》せよか――。

――然しながら、それが出来ぬのが《存在》のもどかしさではないかね？

――くきいんんんん――。

――ちえつ、厭な《ざわめき》だぜ――。

――ここで謎謎だ。「絶えず虐められながら、また、その《存在》をこれでもかこれでもかと否定し続けられつつも、その《存在》は《存在》する事を痩せ我慢してでも《存在》する事を強ひられる《もの》とは」何だと思ふ？

――ちえつ、下らぬ。

――さう、下らぬ《もの》からお前はこれまで一度も遁れられた事はないのだぜ。そら、

何だ？
――くつ、答へは簡単「《吾》」だ！
――ご名答！
――だから何だといふのかね？
――つまり、此の世の森羅万象は、ひと度《存在》しちまふと、最早それから遁れられぬ宿命にある。
――だから？
――だから、《吾》もまた《科学》と同様に絶えず乗り越えられる《存在》なのさ。
――くきいんんんん――。
――それは逃げ口上ぢやないかね？
――逃げ口上？　何処がかね？
――つまり、《吾》も《科学》も「先験的」に乗り越えられねばならぬ《もの》と規定してゐる処が、そもそもその《吾》が《吾》と名指してゐる《もの》からの遁走ぢやないのかね？
――ふつふつふつ。それは《吾》の幻想でしかない！
――つまり、「ごつこ」遊びと同じといふ事かね？
――さう。《吾》は絶えず「《吾》ごつこ」をする様に仕組まれてゐるのさ。
――しかし、現実においても《吾》が《存在》する以上、「ごつこ」では済まないのと違ふかね？
――さうさ。しかし、現実においても《吾》の事を自ら名指して「《吾》ごつこ」を無理矢理《吾》と見立ててゐる勘違ひした《存在》のなんと多い事か、ちえつ！
――ちよつ、待て！　《吾》は絶えず《更新》され其処から遁走する事を仕組まれた《存在》ならば、絶えず「《吾》ごつこ」、つまり、仮象の《吾》をのつぴきなぬ故にでつち上げざるを得ずにその仮象の《吾》を以てして《吾》は《吾》から絶えず遁走する術として「先験的」に仕向けられてゐるのぢやないかね？
――ふつ、さうさ。その通りだ。
――つかぬ事を訊くが、《吾》とはそもそもからして《更新》される《もの》として如何にして規定出来るのかね？　つまり、《更新》される《吾》こそ見果てぬ夢の類でしかないのぢやないかね？
――つまり、《更新》される《吾》とは《吾》に関する進歩主義的な、ちえつ、何と言つたらいいのか、つまり、《吾》とは絶えず《更新》してゐる《もの》と看做す事で自己陶酔に溺れる。
――それで？
――つまり、《吾》は《更新》されるのぢやなく、唯、《変容》してゐる、否、《変容》する《吾》を夢見てゐるに過ぎぬのぢやないかね？
――だとして、何かご不満でも？
――いや、何、《吾》とは、哀しき哉、《吾》に忌避され、また、《吾》自身に追ひ詰めら

れる堂堂巡りを未来永劫に亙つて繰り返されるのみの、夢幻空花なる幻でしかないのぢやないかね？

――だからどうしたと言ふのか！　そもそも《吾》なる《もの》が《吾》を問ふ事自体、数学の再帰関数のやうなもので、《吾》の基底の値が決定されれば、その《吾》といふ再帰関数はたちどころに解けてしまふ代物ぢやないのかね？

――へつ、《吾》の基底の値が《存在》するか如くに絶滅せずに『汝自身を知れ！』と何時の時代でも問ひ続けて来た一種族が人間ぢやないのかね？

――くきいんんんん――。

と、またしても深い極まりない耳障りな《ざわめき》が彼の耳を劈くのであつた。暫く彼は黙してその不快な《ざわめき》が消えるのを待つて、そして、かう自身の《異形の吾》に吐き捨てるやうに言つたのであつた。

――ちえつ、厭な耳鳴りだぜ。

――ふつふつふつ。これは此の世の森羅万象がひそひそ話をして、そして、吾等の対話の行く末に聞き耳を欹ててゐるクオリアがこの耳障りな《ざわめき》の正体かもしれないぜ。

――何を今更。お前は、この《ざわめき》は《吾》が《吾》を呑み込んだ時の《げつぷ》だと先に言つた筈だかね？

――だから尚更この《ざわめき》は、此の世に《存在》すべく強要された《存在》共達の、『《吾》は何処？』『《吾》は何？』といふ恰も迷子の幼児が泣き喚く様に似た切実な問ひでもあるのさ。

――何を言つてゐるのかね？　一体全体お前は何を言つてゐるのかね？　俺にはお前の言つてゐる事が全く理解出来ぬのだがね？

――つまり、《吾》は《吾》を呑み込む事で《吾》を《更新》させ、或ひは《吾》と《吾》との差異が《げつぷ》となつて発せられる事で生じる《吾》の《変容》にぢつと我慢し、この不快極まりない《吾》が《吾》である事の事実を、或る時は忌避し、或る時は追ひ詰めて、絶えず《吾》は《吾》といふ鬼を探す鬼ごつこに夢中な幼児の如く、つまり、《存在》の幼子でしかないのさ。

――《存在》の幼子とは一体全体何の事かね？

――つまり、《存在》はそれが何であれ《吾》といふ《もの》を探す青臭い《存在》といふ意味さ。

――つまり、《吾》は何時まで経つても成熟しないといふ事かね？

――否。《吾》は何度も成熟、否、爛熟したが、その《吾》はさうなると死臭を漂はせ、己の内部から腐乱して行くのさ。そして、その爛熟した《吾》は其処で死滅するのさ。つまり、成熟、若しくは爛熟した《吾》は、その《吾》が《存在》したとしても既に絶滅する外ない代物で、一方で、何とも青臭い思惟形式を持つた《吾》のみが『《吾》然り！』と言へずにその種を存続させ、後裔に《吾》探索を託すのさ。それ故に、青臭い《存在》のみが此の世に生き残つてゐる。

――ふむ。すると、《吾》が《吾》である事を『《吾》然り！』と歓声を上げて、その歓びを知つてしまつた《吾》は既に成熟してゐる故に、其処で種は残せず、その成熟した種は知らぬ内に内部腐乱を起こしていて息絶えるといふ事か――。

――くきいんんんん――。

――種が存続するには、その種はまだ《変容》出来る余地のある青臭い《存在》でなければならないのさ、此の世の摂理は、へつ。

――つまり、青臭い未成年のやうな《存在》は、《変容》出来る伸び代がある故に、また、青臭い《存在》は寂滅するのに未練たらたらで入滅する故に、青臭い《存在》は、種を残せたのだか、《吾》が何なのか大悟してしまつた正覚者のやうな《存在》は、種を残す事すら、その必然性から既に脱落してゐる故に、只管、《吾》の腐乱をそのまま止める事なくぢつと黙して味はひ尽くす境地に至つてゐるといふのが、此の世の摂理かね？　それつて、つまり、大悟した正覚者とは理性の奴隷の事ではないのかね？

――さて、理性的なる大人物は、正覚者と言へるのか、といふ問題が其処には横たはつてゐるのだが、私の私見を言へば、理性的な大人物とは《神》との契約の末に《神》の下僕に為り得た《存在》でしかなく、《神》無しの正覚者とは、その根本がそもそも違つてゐるやうな気がする。つまり、理性といふ《もの》が既に《神》の《存在》を所与の《もの》としてゐるのさ。

――くきいんんんん――。

――ちえつ、また何処かで《吾》が《吾》を呑み込んで不快な《げつぷ》を放つたぜ。

――此の世に《存在》が《存在》する以上、この不快な自同律の齟齬を来たした《げつぷ》はなくならないぜ。

――つまり、此の世は《存在》の《げつぷ》、それを換言すれば、《存在》の呻吟に満ち満ちてゐる、ちえつ、不快極まりない不協和音に満ちてゐるといふ事か。

――絶えず、《存在》は《吾》に為りたくて仕様がないのだが、その《吾》は絶えず、《存在》から零れ落ちてゐるといふ、未来永劫に続く《吾》を追ふ「鬼ごつこ」をするだけで、その一生、つまり、《存在》が《存在》であり続ける閉ぢた時空間で、《吾》なる事を此の世の森羅万象は、ぢつとその不快を噛み締めてゐるのさ。

――ならば、大悟した正覚者はこの不快な《ざわめき》を何とする？

――別に何ともしない。正覚者は、この不快な《ざわめき》すらに此の世の法を見、そして、菩薩となつて、その慈悲に満ちた心で衆生を《吾》の安寧の地へと導くのさ。

――つまり、菩薩は此の世の森羅万象の懊悩を独りで背負ふ、逆Pyramidの階級社会のその底に安住の地を見出した、例へばドストエフスキイの大審問官に等しい《存在》かね。

――否。菩薩は、この自然、否、諸行無常なる世界を全的に肯定出来てしまつた哀しき《存在》なのさ。

――菩薩が、哀しい？　これは異な事を言ふ。菩薩は愉悦に満ちた《存在》ではないのか？

――否。懊悩の陥穽の底無しの深淵に自ら飛び込んで、それまで懊悩の相であつた《もの》が、或る刹那、突然、相転移を起こし、愉悦、つまり、懊悩即愉悦の秘法を手にした選民の事をお前は大審問官と言つたのだらうが、菩薩が深い懊悩にあるのは火を見るよりも明らかだ。千里眼といふ言葉があるだらう。つまり、菩薩といふ《もの》は何でもその《存在》の《存在》する所以をその千里眼で見通す事が出来る《もの》が菩薩であり、正覚者なのだ。

――見通すだけ？　たつたそれだけの事が菩薩の菩薩たる所以？　ちえつ、馬鹿らしい。

――それでは尋ねるが、お前は、此の世の何を見通せるのか？　《吾》すらも見通せぬ《もの》が、果たせる哉、何を見通せる？

――つまり、菩薩は《吾》に明るい《存在》といふ事かね？

――否。それぢや、己が《死》すべき宿命にある事を認識する「現存在」に過ぎぬ。

――ならば、そもそも菩薩とは何なのかね？

――此の宇宙が存続する限り、その精神がその時代、その時代の「現存在」、或るひは、森羅万象でも構はぬが、その《存在》によつて精神が Relay される《念》力を持つた《存在》こそが菩薩さ。

――《念》力？　Occult(をカルト)か、へつ。

――ならば、此の宇宙史は何故に存続し続けるのか？　つまり、何故に歴史が《存在》するのだ。過去の遺産を受け継がずば、歴史なんぞはそもそも《存在》しないだらう？

彼は、只管、己の内部に棲まふ《もの》共の他愛のないひそひそ話をそれが為すがままに任せて、ぢつと耳を欹(そばだ)てて聞いてゐたのであつたが、その彼は、時折、気色が悪い薄笑ひを口辺に浮かべて、更に自己の内部の未開の地に棲まふ《もの》を弄(まさぐ)るやうに己の頭蓋内にぬつと仮象の手を伸ばして、その頭蓋内の闇に今もひつそりと身を潜め蹲つたままの未知の己を引き摺り出す事にのみ耽溺してゐるのであつた……。

――歴史とは、《存在》の未練たらたらの《念》によつて Relay された《もの》によつて、漸く成り立つてゐる羸弱極まりない《もの》に過ぎぬといふのかね？

――《存在》が嘗て此の世に《存在》したんだぜ。その《存在》の《念》がそんな脆い《もの》の筈がなからうが。《念》程、此の世で強力な《もの》はないぜ。

――そして、菩薩かね？　ふつ、ちやんちやらをかしい！

――しかし、或る国では死んだ《もの》は大概神的な何かへ昇華するのを何とする？

――しかし、《存在》が死したからと言つて、その《存在》は永劫に完結しない何かなのもまた確かだぜ。

――お前は、《げつぷ》と言ふが、それは《げつぷ》などではさらさらなく、《存在》の呻吟ぢやないかね？

――馬鹿が！　声にすら出来ぬ《もの》が五万と重ね合はさつてゐるからこそ《げつぷ》でしか表現出来ぬのが解からんのか。だから、お前にとつても、否、誰にとつても不快

極まりない耳障りな《ざわめき》なのだ。

――つまり、《存在》が永劫に完璧なる《存在》に死しても尚、為り得ぬ故の己に対する齟齬が、この耳障りな《ざわめき》の正体とでも言ふのかね？

――これは散散話して来たが、此の世の森羅万象が、己に対して絶えず、齟齬を来たしてゐる事は、此の世が或る意味健全な事の筈だがね。大悟した正覚者はその《生》を、若しくはその《存在》を内部より爛熟させたが為に種を残す事無く自滅し、腐乱し行くに任せるままに己の死を存分に味はつた《もの》以外、大悟なんぞ出来やしないぜ。多分、大悟した正覚者は、どん底の絶望にある筈の《存在》の澱みを濁り酒を呷るが如く、一滴たりとも遺さずに飲み干した《存在》に違ひなく、しかし、そんな事は森羅万象の何《もの》も未だ為した《もの》はをらぬ筈で、それが出来た《もの》が正覚者に違ひないと思ふがね。つまり、どん底の絶望なんて知らぬが仏が一番いいに越した事はなく、《生》ある《存在》にとつてそれは死臭が漂ふ内部崩壊を齎すしかない危険極まりない毒薬に近しく、その絶望にあるに違ひない《存在》の澱みは、絶えず《存在》に呑まれる事を待ち続け、そして、その毒薬の如き《存在》の絶望で出来た濁り酒を、敢へて呷り大悟する事を渇望する大馬鹿者の出現を絶えず待ち望んでゐるのが此の宇宙ぢやないかね？　この《存在》の絶望で出来た澱みは、然しながら、誰彼なく憑依する厄介者と来てゐるから、《存在》は彼方此方で呻吟するのだ。

――え？　お前は一体何を語つてゐるのかね？　さつき、菩薩は底無しの《存在》に必ず開いてゐる懊悩といふ陥穽へと自ら入水（じゅすい）する如くに投身し、その身を全て《他》に任せ切つた処で、忽然と《世界》は相転移を起こし、懊悩が即愉悦へと変化する極楽浄土が出現するのぢやなかつたつけ。

――それはその通りだが、ならば一つ尋ねるが、お前は菩薩かね？

――うむ。どう見ても違ふな。

――当然さ。その《存在》が菩薩かどうかを決めるのは徹頭徹尾《他》だからね。だから、死に行く《存在》は凄まじき《念》を此の世に未練たらたらに遺して、歴史を絶えず作り続けてゐるのさ。此の《念》は馬鹿には出来ない恐るべき力が秘められた《もの》で、《念》が宿つてゐてその宿主が死んでも此の《念》なる《もの》は死す事はなく、次の宿主を探してそれを見つけたならば、直ちにその《存在》に死すまで憑りついて、己の《存在》を呻吟させて已まないのだ。その結果、《吾》を呑み込む《吾》は、その《吾》に対して其処に《吾》とは決して相容れる事のない齟齬を来たした《吾》を呑み込まなければならず、《吾》たる《存在》は絶えず《げつぷ》を吐き出すのさ。その《げつぷ》が不快な《ざわめき》となつて此の世に遍在し、未来永劫に亙つて《吾》に為れず仕舞ひの怨嗟が絶えず此の世に満ち満ちてゐるからこそ、《吾》は何とか生きて行けるのさ。

――つまり、お前が《念》と言つてゐるのは精神の Relay の事かな？

――或ひはさう看做してもいいのかもしれぬが、しかし、一冊の本に宿る《念》の強靭さは、誰もが味はつてゐるので解かると思ふがね。

――しかし、お前の言ふ《念》は、例へば《生者》に憑依する霊の如き《もの》に思へて仕様がない。

――さうさ。幽霊さ。否、亡霊か。此の世に《死》した《もの》の《存在》を無視する事は一切出来ぬ相談だ。然しながら、《生者》は常に《死者》の思ひを裏切り続けながら日常を生きてゐる場合が殆どだらう。誰も何かをする時に《死者》や未だ生まれ出ぬ《未来人》に思ひを馳せ、それを念頭に置いて何かを行ふ事は皆無だらう。しかし、或る種の《存在》には霊が憑依し、また、未だ生まれ出ぬ《未来人》に思ひを馳せて《吾》を問はずにはゐられぬ《生者》が少ないが確実に《存在》する筈さ。

――だが、霊なのかどうかは知らぬが、《死者》の《念》を引き受けた《生者》がゐるとして、その《念》にもまた、生存競争が確実に《存在》する筈で、その証左に数多の《死者》、そして、未だ生まれ出ぬ《未来人》の《念》は、幾人かの限られた《存在》に象徴され行く。その《念》は、例へば書籍となつて現在に引き継がれてゐるが、それは絶えず《生者》の厳しい目に晒されて、《死者》の《念》は取捨選択されて、例へば、現在、膨大な数の本が出版されてゐるが、そのうち一体何冊が、百年後、千年後に、そのお前が言ふ《念》を残してゐるかどうか高が知れてゐるのぢやないかね？

――哀しい哉、その通りさ。現在の《生者》が全て《死者》になつた時点で、《念》として残るのは、微微たる《もの》だらう。だから、尚一層、残つた《念》は、《生者》への憑依は強烈で、《生者》を覚醒させる起爆剤になるだけの物凄い力を秘めてゐるのさ。だから、現在、読み継がれてゐる作品の《念》はそれはそれは強烈で、絶えず《生者》を鼓舞して已まないのさ。

――成程。それ故に、故人に対する根強い信仰が生まれ、そして、現在を生きる現代人は宗教のために戦争が出来るといふ訳かね？　そんな《念》なら滅んだ方がましぢやないかい？

――だが、《生者》は誰も未来を知らない。此処で《個時空》の考へ方を当て嵌めると過去は未来に簡単に反転出来るので、それ故に、故人の生き方に範を求め、そして、《吾》を見出すのさ。

――《死者》の《念》を毒とも良薬とも全く解からずに《生者》はそれを呷るしかないのか――。

――《死者》の強烈な《念》を毒にも良薬にもするのはひとへに《生者》にかかつてゐる筈だがね。

――つまり、基督や仏陀やムハンマドやヤハウエやブラフマー神やヴイシユヌ神やシヴア神などの神仏として祈りの対象になつてゐる少数の《もの》の《念》は、《生者》の心を揺さぶらずにはいられぬ程に強烈で、《生者》はそれら《死者》や《神》の言葉に帰依する事で、不合理極まりない現実を生き続けてゐるとするとだ、《死者》の《念》が取捨選択されるとはいへ、それは、或る象徴的な《死者》の《念》に収斂するが、しかし、その背後には、連綿と数多の人びとに祈り続けられてきたといふ数多の《念》が隠されてゐて、《生者》はさうして残された《死者》の言葉の重みを感じずにはゐられず、それ故

に、信仰が生じるといふ事か。ふむ。だが、この不合理極まりない《ざわめき》は一体全体どうした事なのだらうか？　もしかすると、《死者》もまた《吾》を探して、その《吾》をごくりと飲み干したいが為に、この不快な《げつぷ》を発してゐるのではないだらうか？

――仮にさうだとしてどうしたといふのかね？

――さうすると、此の世に《吾》は元来《存在》していないのぢやないか？　どう思ふ？

――ふつふつ。ぢやあ、お前は、お前の事を《吾》と思はないのかい？

――私は、己の事を半分は《吾》かもしれぬが、残りの半分は《吾》以外の何かで、それは今の処全く解からず仕舞ひで、《吾》は《吾》にとつてこれまで《吾》であつた例がないのが、実際の処だ。

――それは当然だらう。《吾》が全宇宙史を通して確率《一》として《存在》した事はないのだからな。

――それは《神》に対しても当て嵌まる事かね？

――当然だらう。此の世に《存在》しちまつた《もの》全てが、大悟しない以上、《神》もまた下唇をくつと噛んで、地団駄を踏んでゐるに違ひないのさ。ふつ、ところが、《神》と大悟が結び付く事は、全くの誤謬でしかないのさ。なにせ、仏教に《神》はゐないのだからな。

――だから、尚の事、《存在》が《神》と同等に対峙するには大悟する外ないのさ。

――つまり、正覚、若しくは大悟した《もの》は《神》的な《存在》に為り得るとお前は看做してゐるといふ事か。ふつ、馬鹿らしい。それは詰まる所、《神》といふ《有》と正覚、若しくは大悟の《無》との対決に終始し、その有様は誰もが虚しい《もの》だといふ事を予想出来る下らぬ代物だぜ。

――果たして、さうなのかね？　《有》と《無》の対峙なんて、此の宇宙が《存在》する限り絶対にあり得ぬ筈だがね。

――つまり、或る《存在》が大悟し《神》と対峙した場合、此の宇宙誕生前、若しくは此の宇宙の死滅後の何かを垣間見する事が可能に為り得るといふ事かね？

――それは例へば物質と反物質とが出合ひ、発光して消滅するやうに、此の世ならぬ位相で、ぱつと光を発するが如くに一瞬にして《有》と《無》との対峙が終はり、そして何かを生んでしまふ端緒に違ひないのさ。

――何を馬鹿な！　現に《有》と《無》は此の世に確かに《存在》し、だからと言つて《有》と《無》が出合つた処で何にも生まれやしないぜ。それはお前のみのお目出度い独断だらう？

――ああ、さうさ。しかし、此の世の《存在》、つまり、此の世の森羅万象は、《無》の様相も包有してゐるのは間違ひないだらう？

――《無》ねえ。それはむしろ《虚》ではないかね？

――《虚》か。ふむ。因みに虚数ｉ×零は零かね？

――零だ。

――つまり、それらの事から導き出される事は、《虚》対《無》といふ事象が此の世に起こり得るならば、未だ《存在》には人知を超えた事象が含まれてゐるといふ事かね。

――多分、《有》対《無》も、《無》対《虚》も、《有》対《虚》も、《存在》次第で如何様にでも変はる事象に違ひない。事象が如何様にも変はる故に《吾》は厳然と此の世に《存在》するのと違ふかね？

――つまり、《吾》の《存在》が《有》、《無》、《虚》の事象を此の世に生滅させてゐると？

――さう考へるのが自然だらう？

――ふむ。自然ね。その《自然》といふ概念が《存在》の陥穽と違ふかね？　最後の処で、《存在》は必ずと言つて言ひ程《自然》を持ち出すが、詰まる所、お前は《自然》といふ概念はあらゆる《もの》が道理に適つてゐる状態と考へての事かね？

――さあ、解からぬ。

――解からぬ？　ふつ、それぢや、お前は、何も解からずに《自然》なる言葉を持ち出したのかね？　ふつ、如何にも「現存在」たるお前らしい物言ひだな。ならば、一例として私の考へを直截的に言へば、《自然》程不合理極まりない《もの》はない！

――何故に？

――現にお前は己の《存在》に疑念を抱いてゐる。それ程不合理な事はないだらう？

――ふつ、《吾》が《吾》を取り逃がす、此の世の理……つまり、《自然》が不合理極まりないか。それはその通りに違ひないが、《存在》は森羅万象、《自然》である事を渇望してゐるが、それを成し遂げた《存在》が、例へば人間以外の動植物であるとは看做せないかね？

――否、人間以外の動植物も決して《自然》であつた事はなく、これからも《自然》である筈がない。

――何故、人間以外の動植物が《自然》でないのかね？　ならば、《自然》とは何なのかね？

――つまり、《自然》とは《存在》が《存在》でなくなる理とでも言つておくかな。これならば人間以外の動植物も《自然》とは無縁な《存在》と言ふ事になるだらう。

――《存在》が《存在》でなくなる理が《自然》ならば、それは《死》の事ではないのかね？

――ふつふつふつ、ならば《死》が《自然》と言ふ事でいいだらう？　何か不満でも？

――ならば《生》は何なのかね？

――簡単さ。《不自然》さ。

――馬鹿らしい！　《生》が《不自然》な筈はなからう。

――さて、その根拠は？

――現に私は此の世に生きてゐるからさ。

――高がそれだけの理由で《生》が《自然》な事と看做してゐるのかね？　それでは一つ尋ねるが、何故に《生》なる《存在》はいとも簡単に《死》ぬのかね？　《生》である事が、特別な事だとは思はなぬのか！　へつ、それは《生者》の傲慢といふ《もの》だ

ぜ。だからお前には此の世に充謐してゐる《ざわめき》を耳障りな《もの》としてしか聞こえやしないのさ。少し耳を澄ましてみれば解かる筈だが、《有》、《無》、《虚》のげつぷたる此の世の《ざわめき》の一つ一つに喜怒哀楽が充謐してゐる事が解かる筈だがね。それが詰まる所、《存在》の《念》といふ《もの》だらう？

——つまり、お前は《念》といふ《もの》を情動の一種と看做してゐるのかい？

——それは、《念》に憑りつかれた《もの》が決めればいい事さ。

——へつ、お前もまた、《吾》といふ《念》が憑りつゐた《存在》だらう？　ならばお前は《念》を何と看做してゐるのかね？

——《生》の起動力さ。

——ぶはつ。《生》の起動力と来たもんだ！　何を甘つちよろい事をほざいてゐるのかね？

——ならば逆に尋ねるが、お前は、この《ざわめき》、若しくは《念》を何と看做してゐるといふのかね？

——へつ、《死》の起因さ。

——はて、それは裏を返せば《生》の起動力と同じ事ぢやないのかね？　つまり、《生》とは絶えず《死》へ向かつてまつしぐらに進む《もの》だらう？

——だが、此の世は、《生者》に比べれば、《死者》と未だ出現せざる未出現の《未来者》の方が圧倒的な数で、《生者》は多勢に無勢で、《死》の、若しくは《未来》の論理によつてのみ現在を生きてゐるのぢやないかね？

——成程。《生》は《死》、若しくは《未来》の理で《存在》し、そして、呻吟し、《存在》は声為らざる《ざわめき》を発してゐるといふ事か。

——つまり、《生》が《死》、若しくは《未来》の理に律せられてゐるといふ事は、《過去》に《死》した《もの》の理に従つてゐるといふ事で、つまり、《生》は、《過去》と《未来》の「間」に《存在》する《もの》で、それが故に呻吟せずにはをれず、絶えず《吾》を呑み込む不合理を為す事で、此の世はそんな呻吟の《ざわめき》に満ち満ちてゐるのではないのかね？

——その考へ方が既に使ひ古された古く黴臭い思考法なのが気が付かぬのか。時間は決して一次元の《もの》ぢやないぜ。何度も言ふが《個時空》の考へを持ち出せば、時間もまた、否、時空間もまた8次元でしかその本当の姿形を現はしやしないぜ。

——すると、此の世の《ざわめき》もまた8次元で或る言語として立ち現はれるといふのかね？

——ああ。

——それぢや、此の世といふのは、8次元へと至る為の跳躍板、つまり、未出現の8次元の《世界》の礎へとなる単なる「過程」に過ぎぬといふ事かね？

——当然だらう？　そもそも《未来》は《過去》に、《過去》が《未来》に簡単に一変する此の世の理は、《未来》と《過去》がくんずほぐれず諸行無常を演出してゐるのさ。

——しかし、さうとはいへ、此の世に《存在》しちまつた《もの》は、《存在》したが故

にそれに対して理路整然とした理を求めずにはをれぬのぢやないかね？

――では、一つ尋ねるが、《存在》、ちえつ、それを《生》と言ひ換へれば、《生者》は《生者》の理をうんうん唸りながら捻出出来れば、《生者》はそれで満足すると思ふかい？

――否。

――ならば、《存在》は此の世の理、つまり、諸行無常に身を任せるのが一番理に適つてゐるだらう。

――さうかね？　実際の処、《存在》は諸行無常に身を任せたがつてゐると思ふかい？

――ふむ。

――《存在》が最も嫌悪してゐるのが諸行無常だらう？

――ふむ。さうさねえ。《存在》は諸行無常を嫌悪してゐる……か。つまり、それは、《存在》は常に《現在》に留め置かれてゐる事が我慢ならぬといふ事だらう？　そして、それは森羅万象、皆、同じ筈だぜ。森羅万象が全て《現在》に留め置かれる故に諸行無常の世が生じてゐるのではないかね？

――《存在》が留め置かれるからと言つて《現在》は、しかし、止まつてやしない筈たぜ。或る《存在》が言ふ《現在》は、《他》にとつては《未来》か《過去》なのは《個時空》を持ち出せば解かるだらう？　しかし、《吾》にとつては常に《吾》は《現在》に留め置かれ、そして、《吾》にとつては交換可能な外界の《未来》と《過去》から隔離されてゐる。

――否！　《存在》は成程、《現在》に留め置かれてゐるが、しかし、その内界では《未来》へも《過去》へも自在に行き来してゐるぜ。

――つまり、頭蓋内の脳といふ構造をした《五蘊場》では因果律は壊れてゐると？

――否、自在なだけさ。別に因果律は壊れちやいない。その証左に《存在》は絶えず《現在》にあるぢやないか。

――だから、《存在》は《ざわめく》のだらう？　「何故に《吾》は《現在》にあらねばならぬのか？」と。

――それさ。それ故に《吾》は《吾》をごくりと呑み込んで、《吾》が《吾》に齟齬を来たしてゐる故に、《五蘊場》に犇く《異形の吾》共が、一斉に《ざわめく》のさ。何故つて、《吾》が《吾》である事を強ひられる事程、《存在》が忌避してゐる事はないからね。とはいへ、《吾》は《吾》として《現在》に留め置かれる。其処で一つ尋ねるが、《現在》に留め置かれる宿命にある《存在》は、何故に《吾》なのかね？

――何を今更。それは今まで散散話して来ただらう。

――といふと？

――つまり、《吾》が《吾》として《現在》に留め置かれる事は、詰まる所、「単独者」、若しくは《孤》として《存在》する《吾》足る事を、《吾》の魂に刻み込む儀式なのさ。さうして、《吾》を魂に刻み込む際、それは《吾》を悶絶させる苦痛で《吾》は《ざわめく》外ないのさ。

――くきいんんんん――。

――この耳障りな《ざわめき》は《吾》が《吾》を呑み込んだ時のげつぷではなかつたのぢやないかね？
――さうさ。げつぷさ。
――それでは一つ尋ねるが、《五蘊場》は《存在》全てに賦与されてゐる《もの》なのかね？
――勿論。「現存在」では脳といふ構造をしてゐるが、意識が宿る《場》があれば、其処はもう《五蘊場》なのさ。
――すると、この耳障りな《ざわめき》と《五蘊場》との関係は如何様な《もの》なのかね？
――ふつ。つまり、《吾》が《吾》を呑み込んだならば、《五蘊場》を根城に《存在》全体に犇く《異形の吾》共、つまり、去来現（こらいげん）を自在に行き交ふ《異形の吾》共は、その呑み込まれた《吾》を喰らふ為に群がり、さうして、《吾》をすつかり喰らつた時に、《異形の吾》共は満腹の態でげつぷを彼方此方で発するのさ。そのげつぷは当然、《吾》には堪へ難い《もの》で、そのげつぷが耳障りがいい筈がないぢやないか！
――すると、《吾》とは、そもそも《異形の吾》共の餌かね？
――さうさ。お前は《吾》を一体何だと思つてゐたんだい？　まさか、《存在》を支配下に置く「理性」と「悟性」を統覚した何かだとでも夢見てゐたんぢやないだらうな？
――《吾》が《現在》の主ではなくて、《存在》は何だといふのかね？　先にお前は《存在》には《念》が宿ると言つた筈だが、その《念》こそ《吾》の正体ではないのかね？
――さうだとしたならば？
――つまり、《吾》は《吾》といふ《念》を絶えず呑み込む事で《五蘊場》に棲息する《異形の吾》共に《吾》といふ餌を与へて飼ひ馴らしてゐるといふ事か。――ふつ。その《異形の吾》共を飼い馴らしてゐる《もの》とは一体何かね？
――当然、《吾》さ。
――それぢや、全く矛盾してゐるぢやないかね？
――矛盾で結構ぢやないか。ふはつはつはつはつ。
――それぢや、主従関係が転倒してゐるぜ。つまり、《吾》は《吾》といふ《念》を呑み込む苦行を断行せざるを得ぬ故に、《吾》とその呑み込んだ《吾》といふ《念》は齟齬を来たし、それにもかかはらず、その《異形の吾》共の生贄として、否、人身御供として《吾》を捧げ、その《異形の吾》共の餌でしかない《吾》が、一方では、《異形の吾》共の主と来てゐる。一体全体お前が言ふ《吾》と《異形の吾》とは何なのかね？
――実在する化け物――かな。
――ぶはつ。《吾》が化け物かね？　《異形の吾》共が化け物かね？
――しかし、どちらも《吾》といふ《念》を喰らひ、或るひは無理矢理呑み込んでゐる。
――つまり、《念》は無尽蔵といふ事かね？　馬鹿らしい！
――《吾》が、《念》においてのみ《吾》からの出入りが自由としたならば？

――《吾》からの出入りが自由？　それは魂が憧れ出るといふ事かね？
――さう。源氏物語の世界だ。そして、《吾》といふ《念》は、一人称であり、二人称であり、三人称であり、四人称であり、五人称である、云々、としたならば？
――何を言つてゐるのか解かつてゐるのかい？　四人称、五人称など想像出来る代物ではないぢやないか。
――さうかね。時間を自在に行き交ふ、つまり、8の時間次元を自在に移動可能な《もの》を四人称、そして、《孤》＝《全体》といふ曲芸が出来ちまふのが五人称と、色色と想像出来るもんだぜ。
――何を！　時間を自在に行き交ふのは単に記憶を辿り、或るひは、『ああなりたい』といふ未来の《吾》を想像する、いづれにしても単に《吾》の夢想でしかなく、また、《孤》＝《全体》とは、現代のＩＴ社会では既に実現された仮想空間の事でしかないのぢやないかね？
――ほらほら、四人称、五人称といふ言葉を表白した途端に様様な思索が渦巻く様相を呈してきたぢやないか。
――それがどうしたといふのかね？
――初めに**Logos**あり。
――ふつ、創世記かね？　つまり、言葉が生まれると、それに派生する思索が山のやうに連なつて来るだらう？
――否。その現象が元元《存在》してゐた《もの》に言葉を与へるだけで、頭蓋内の闇でずつと眠り続けた或る《もの》がむくりとその頭を擡げ、そいつが、頭蓋内の闇で黙考を始める。つまり、《異形の吾》共の親玉が、不意と思考を始めるのだ。さうすると《吾》といふ《念》は歓喜する。
――歓喜かね？　懊悩と違ふのぢやないかね？
――どちらでも結構ぢやないか。《異形の吾》共の親玉が目覚めその頭を擡げたのだからな。そして《異形の吾》共の親玉が目覚めると、一息で《異形の吾》共を呑み込んで『ぶはつはつはつはつはつ』と高らかに哄笑する。
――つまり、対自の出現かね？
――否。《異形の吾》だ。そして、《吾》は自問自答をその《異形の吾》の親玉と始め、《吾》はその魅惑に幻惑され、その対話から一時も離れられなくなる、《吾》は最早其処から遁れる事が出来ない程に、《異形の吾》との対話を蜿蜒と繰り広げる事に為る。
――それは暇人のやる事だ。多くの《存在》にはそんな暇などないのが実情だぜ。
――ところが、一度《異形の吾》共の親玉がその頭を擡げ、《異形の吾》共を一飲みすると「げつぷ」をするのだ。
――また「げつぷ」ね。
――その「げつぷ」が《吾》の魂を揺さぶつて仕方がない。さうなると、《吾》は《異形の吾》の親玉とさしで話をせずにはをれぬのだ。
――そして、その《異形の吾》の親玉は《吾》をも呑み込むのだらう？

――ああ。《吾》も一飲みで呑み込まれる。そして、《異形の吾》の親玉は、「げつぷ」でなく、哀しい「しやつくり」を始めるのだ。
――「げつぷ」に飽き足らず今度は「しやつくり」かね？　しやつくりを始めた《異形の吾》は、若しくは《吾》は、不快でならぬだらう？
――さう。不快だ。《吾》が《吾》に抱く此の不快は、果たせる哉、《生》の起動力なんだぜ。
――《生》の起動力？　つまり、それは、《吾》といふ《存在》の根源の処に、《吾》に対する不快が必ず《存在》し、《吾》に対する不快なくしては、此の諸行無常の《世界》では生きられぬといふ事だね？　それが変容の受容なんだね？
――此の世はそんなに甘く出来ちやゐないぜ。唯、《吾》の根源に不快といふ感情が《存在》する故に、《吾》は、時時刻刻と変容する《世界》で《生》を繋いで行けるのさ。
――つまり、《吾》は《吾》の変容を甘受出来る《もの》なのだらう？
――否。その逆さ。時時刻刻と変容する諸行無常の《世界》において、《吾》のみが未だに《吾》である事のどうしやうもない不快に、《吾》は《吾》に、若しくは《異形の吾》共に我慢する為に《吾》は《吾》を呑み込み、そしてげつぷをする。そして、げつぷがこじれて、それは仕舞ひにはしやつくりとなる。
――くきいんんんん――。
――では、そのしやつくりは《吾》にとつて何なのかね？
――《吾》が《吾》である事の悪足掻きさ。そして、その《吾》の齟齬は、《吾》も《異形の吾》共も甘受するしか術がないのさ。
――何の術かね？
――存続さ。
――別段、《吾》も《異形の吾》共も存続する必然はない筈だぜ。
――しかし、《吾》も《異形の吾》も自滅出来やしない。唯、《世界》が戦争状態とか自然が凶暴な牙を剥いてゐるとかいふ極限状態の《世界》においては別だがね。そんな状況下では《吾》は只管《生》を望む。
――《世界》に《死》の確率が増すと、それに反比例するやうに《吾》は《生》を求めるこの事象を何とする？
――何、さう言ふ極限状態は《吾》の内部では日常茶飯事の事でしかないさ。つまり、さういふ極限状態の《世界》に置かれた《吾》は、絶えず、内部で執り行はれてゐる《吾》を呑み込むと言ふ荒行が、外部に現実の《もの》として表出したと《吾》は本能的に感じて、《吾》は《吾》の存続を只管欣求するのさ。つまり、極限状態の《世界》に置かれる《吾》とは内外が反転したに過ぎぬのだ。
――さうすると、《吾》とは何時も自死の崖つぷちにゐるといふ事かね？
――さうさ。そして、その崖つぷちの底を覗き込んでは軽い眩暈に見舞はれてゐる。その上、しやつくりが止まらないと来てゐるから、始末に置けんのだ。しやつくりしてゐる《吾》が崖つぷちに佇立してゐるんだぜ。何時、その崖に落ちても不思議ぢやない。

――仮に《吾》が酩酊してゐるとしたならば？
――へつ、《吾》は何時も《吾》に酩酊してゐる《存在》ぢやないかね？
――すると、《吾》の存続とは何時も綱渡り状態といふ事かね？
――当然だらう。だから、《世界》には《死》が満ちてゐるのさ。
――つまり、その崖つぷちにゐる《吾》は翼が欲しいのだらう？
――否。それぢや『フアウスト』宜しく堕天使、メフエストフエレスに為るのが関の山さ。さうぢやなく、これは何度となく言つてゐる事だか、《吾》といふ《念》がその力を発動すれば、《吾》は《吾》から自在になり得るのさ。
――そんな夢物語をどの《吾》が信ずるといふのかね？　取り敢へず、《吾》は《吾》の崖つぷちから遁れるべくその術を見つけ出して、何としても生き延びる事が何よりも先決だらう？
――だから、それが《吾》が《吾》を呑み込む苦行によつて見出される筈なのさ。
――くきいんんんん――。
――《吾》を呑み込む苦行によつて一体何が見出されるのかね？
――自然といふ《もの》に馴致した《吾》さ。
――自然ね。その自然が《吾》に牙を剥ゐたならば、《吾》は《死》する宿命にある筈だが、それでも自然に馴致する事が、《吾》を呑み込む苦行の目的かね？　へつ、ちやんちやらをかしいぜ。何故つて、「現存在」は《世界》を超える、つまり、《吾》は自然を超える何かになる事のみを渇望してゐるからさ。
――一つ訊ねるが、《吾》もまた、自然だらう？　その自然の《吾》が自然を超えるとは、その事自体矛盾してゐるぜ。ちよつ、お前の言に従へば矛盾してゐるからいいのだらうがね。
――くきいんんんん――。
　彼の頭蓋内の闇で、対話する《吾》と《異形の吾》との尽きる事がない黙話以外、
――くきいんんんん――。
　といふ、世界がぴんと張り詰めたやうな緊迫した状況の中、ぢつと自身の《存在》に我慢し続ける彼は、《吾》をして次のやうに語らせたのであつた。
――それ以前に、生物は、《水》以上の何かと言ひ切れるかね？
――ふむ。《水》ね。生物は《水》を超えられぬな。
――詰まる所、生物とは、Amino(アミノ)酸や蛋白質などが溶け込んでゐる《水》に過ぎぬとはいへ、それでも《存在》は如何なる《もの》でも《吾》を追ひ求める宿命にあるならば、その《吾》は、へつ、自然を全く越えられぬ《水》の異形でしかないのぢやないかね？
――例へば、《水》が不自然としたならば？
――《水》が不自然ね？　しかし、《水》こそ自然の象徴ではないかね？
――それは、不純物が混じつた《水》たる生物のみに通用する道理でしかないぜ。此の世には《水》以外にも数多の物質が《存在》する。

――だから何だといふのかね？　知的生命体にのみ《吾》が宿る訳ではないぜ。《吾》といふ《念》は、如何なる《存在》にも宿るんだぜ。
――しかし、己の懊悩を表白出来るのは、知的生命体以外あり得ぬと思ふがね？
――それは《存在》に対する先入見でしかないぜ。《吾》が宿つた《存在》は、それが如何なる《存在》でも《吾》である懊悩を何らかの形で表はしてゐる筈さ。《世界》をよくよく観察すれば、それがよく解かる筈だぜ。
――具体的に言ふと？
――何千年といふ時間で《もの》を見ればいづれも何らかの変容を蒙つてゐるに違ひない。つまり、如何なる《存在》も《吾》が《吾》である事が我慢ならぬのさ。
――ならば、何故に《吾》は《吾》を呑み込む苦行をするのかね？　全くそんな事をする必然性はないと思ふがね？
――例へば、《吾》を見失つた《吾》は、《吾》を《吾》と断言出来るかね？
――ふむ。例へば多重人格者の《吾》とは何かといふ事か――ふむ。
――これで解かるだらう？　《吾》が《吾》を敢へて呑み込むのは、《吾》が唯一無二の《吾》である事を持続する為に必須である事を。
――しかし、《吾》は、《吾》の発生において、否、《吾》といふ《念》が宿る時、《吾》は《吾》である事なんぞ望んではゐない筈だぜ。
――それは本当かね？　俄かには信じ難いがね？　此の世に《存在》してしまつた《もの》は、《吾》が何であるのか、如何なる《存在》かを知りたいのが自然の道理だらう？
――ふつ、自然の道理ねえ……。
――《吾》が知りたい《吾》とは、《吾》によつて純粋培養された「本当」の《吾》の事かね？
――何を明後日の方を向いてしゆべつてゐるのかね？　《吾》に純粋培養された《吾》とは一体何なのかね？　それは、詰まる所、《吾》の骸でしかない筈だぜ。
――さう。《吾》は《吾》の骸を不知不識に追ひ求めてゐる。つまり、《死》が《生者》たる《吾》に決定的に欠けてゐる《もの》だ。
――ふむ。何故に《死》なのかね？
――《死》が「本当」の《吾》だからさ。
――ぶはつ。《吾》の究極の目標が《死》かね？　《死》なんぞ時をぢつと待つていれば自然とやつて来る《もの》ぢやないかね？　つまり、《死》を別段追ひ求める必然性はありやしないぜ。
――だから尚更、《生》は《死》を追ひ求めるのさ。
――それはまた、何故にかね？
――《生》は《死》へと《死》すまで超越出来ぬからさ。
――それぢや、ない《もの》ねだりと何ら変はりはしないぜ。
――《生》とはそもそもない《もの》ねだりをする《もの》ぢやないかね？
――だから、《存在》は《吾》を求めるといふのかね？　《吾》にとつて決定的に欠けて

ゐるのが、《吾》といふ事か――ふむ。それでも《吾》は《吾》として仮面を被つてゐる《存在》だ。顔無しでは一時もいられぬのが、此の《吾》さ。それ故に、《吾》は《吾》の《念》を呑み込み、そして、げつぷをする。さうして、《吾》はそんな《吾》に打ち震へてしやつくりをする外ないのさ。それが、《吾》を《存在》の崖つぷちに追ひ詰める事であつてもだ。何故ならば、《吾》は此の諸行無常の浮世に《存在》しちまつてゐるから《吾》は《吾》として此の世に佇立する宿命にあるのさ。

――くきいんんんん――。

――つかぬ事を訊くが、《吾》はどうあつても《吾》でなければならぬのかね？

――さあ。それは解からぬ。解からぬが、《吾》は此の世に《存在》する以上、《吾》である事から遁れられぬ大いなる矛盾にあるのは間違ひない。

――つまり、《吾》とは矛盾の坩堝といふ事かね？

――当然だらう。さうだから《吾》は《吾》といふ《念》を呑み込む苦行をせねばならぬのさ。《死》すまで、《吾》でゐる為にな。

――《死》しても《吾》は《吾》ではないのかね？

――それは《死者》のみぞ知るだ。

――お前はどう思つてゐるのだ？

――私は、《死》しても《吾》は未来永劫《吾》であるに違ひないと看做してゐるが、さて、さうすると、《吾》は《吾》に堪へ得るのかが不明なのさ。

――神や仏に《死者》は変容しないといふ事だね、お前の考へでは。

――ああ。《吾》は《死》しても尚、どす黒い欲望を抱ゐた《吾》であるに違ひない。つまり、《死者》もまた、《吾》といふ《念》を呑み込んでげつぷをしてゐるのさ。でなければ、此の世で絶えず不快な耳鳴りが聞こえる筈はないのだ。

――くきいんんんん――。

――ならば、《異形の吾》とは一体全体何なのかね？

――《吾》の出来損なひ。

――《吾》の出来損なひ？　本当にさう思つてゐるのかね？　寧ろ、《吾》の理想と違ふのぢやないかね？

――《吾》の理想であつても《吾》の出来損なひには変はりはない。

――《吾》が《吾》の出来損なひであつて、《異形の吾》は《吾》の本然と違ふのぢやないかね？

――《吾》の本然もへつたくれもありやしないぜ。あるのは、此の未完の《吾》のみで、その《吾》は《吾》といふ《念》を呑み込む事で漸く《吾》なる仮面を被つてゐるに過ぎぬのさ。

――どうあつても《吾》は諸行無常の此の世に《存在》する為には仮面を被らなければならぬのかね？

――ああ。どうあつても《吾》は面がなくちやならない。何故つて、《吾》に面がなけりや、《吾》を呑み込む時、呑み込んだ気がしないからさ。

――ぶはつ、それだけの為の仮面かね？　馬鹿らしい。
――さう。《吾》の相貌とは、所詮そんな《もの》さ。《吾》が《吾》である目印でしかないのさ。
――しかし、その《吾》の相貌が《吾》の《存在》に大きな役割を果たしてゐるとしたならば？
――だから？
――つまり、《吾》において、初めに顔ありき、なのさ。
――何故に、初めに顔ありきなのかね？　《水》の不純物に過ぎぬ《吾》においては、初めに顔などありやしないぜ。初めに《一》なる受精卵があるのみだ。
――その受精卵こそが《吾》の相貌の《一》例になる。
――ふむ。受精卵こそが《吾》の相貌の《一》なる《もの》ね。それつて、詭弁ぢやないかね？
――勿論、《吾》の相貌は何でも構はぬのさ。
――何故に？
――顔とは、面とは、相貌とは、顔貌とは、それが何であれ、仮初の《もの》でしかないからさ。此の世が諸行無常のやうに、《吾》の相貌も変化して已まぬ。仮初に過ぎぬから《吾》は絶えず《吾》を呑み込んで「げつぷ」をするのさ。「げつぷ」こそ自己確認の最たる《もの》なのさ。例へば、「現存在」の受精卵は、細胞分裂をし、自己増殖する過程で、地球上に出現した全生物に変化しながら、最終的に「現存在」の赤子へと変容するが、つまり、《吾》は、此の世に赤子として誕生したときに既に全生物史を体現してゐる百面相なのさ。然しながら、百面相なるが故に《吾》を象徴する面がどうしても必要になる。其処で、《吾》は、《吾》の《念》の宿り木としての仮初の《存在》として「現存在」に宿り、《吾》の相貌を手に入れるのさ。
――へつ、それでは言つてゐる事が矛盾してゐるぜ。私は、《他》を見る時、《他》の相貌は振動していて、《一》なる《もの》としては顔が見えぬのだ。絶えず揺れ続けていて、様様な顔が《他》の相貌には現出するのだ。決して《他》の相貌が《一》に纏まる事がないぜ。
――それで？
――つまり、私において《他》の顔貌は、無数の顔の重ね合はせに過ぎぬのさ。決して《一》なる仮面としては見えぬのだ。
――それでも《吾》は《一》なる仮面を被るのさ。そして、《吾》は摂動する。摂動せずにはをれぬのだ。何故つて、《吾》が《吾》である事は、どうあつても《吾》にとつては受け容れ難い苦悶でしかないからさ。
――ならば、何故に、仮面を被るなどと言ふのかね？
――《零》の面が必要なのさ。
――は？　何を言ひ出すのかね？　《零》の面が《一》なる仮面と何の関係があるのかね？　そもそも《零》の仮面とはいつたい何の事なのかね？

――《吾》は、《一》の仮面ではなく、飽くまで《零》の仮面だからさ。
――その証左は？
――《吾》が《吾》である、といふ命題は此の世でこれまで一度も成立した事はないからさ。
――はて、それぢや、何の説明にもなつてやしないぜ。
――何、簡単な事さ。《吾》とは、千年前に《存在》してゐたかい？　また、千年後に《存在》するかい？　どちらも否だらう。つまり、《吾》は《死》すべき《もの》故に、初めに無であり、末期も無に向かふ《存在》だ。つまり、《吾》は無の仮面、それを単純に数字に当て嵌めれば《零》が仮面を付けただけの泡沫（うたかた）の《存在》でしかない。
――それは論理の飛躍と言ふ《もの》でしかない。それでは此の私とは《一》者ではないのかね？
――千年単位で見れば無でしかない。
――千年単位で「現存在」を語る事こそ詭弁でしかないぜ。
――本当にさう思ふのかね？　しかし、「現存在」の極少数でしかないが、その少数の「現存在」が生み出した、或ひは発見した作品なり法則なりは、千年は生き残る《もの》だらう？　千年経つてもびくともしない、例へば、ギリシア哲学のプラトンやアリストテレスの著作物は、今もつて、その力を失ふ事無く、現代を生きる「現存在」に対して感銘を与へ続けて已まない。
――しかし、それは、限られた人人でしかない。その他大勢の千年前、否、二千年余り前か、その古代ギリシアの時代に生きてゐた数多の人人の消息は、現代では　失はれてしまつてゐるではないか。
――では、一つ訊ねるが、古代ギリシアの人人と現代の人人と、何時の時代にか決定的な断裂があつて、古代ギリシアの人人と現代人とに何か決定的な違ひは日常においてあるかね？
――文明の利器のあるなしといふ大きな違ひがあるぢやないか。
――そんな事は瑣末な事でしかない。「現存在」が生きる事において、古代ギリシアの人人と現代人では何か決定的な、ドストエフスキイ曰く、物理的な変化はあるかい？
――寿命が決定的に違ふぜ。
――ならば、寿命が延びた現代は、古代ギリシア哲学を超えた何かを創造出来たかい？
――少なくとも現代思想は古代ギリシアに匹敵する筈だがね。
――くきいんんんん――。
――ちえつ、不快な耳鳴り、否、《吾》のげつぷであり、しやつくりだつたな。これは不愉快極まりないが、それはともかく、現代思想には千年生き延びる膂力が果たしてあるかね？
――少なくとも、思想史としては残る筈だぜ。
――そんな事は言はれる迄もなく、誰もが解つてゐる筈だが、私が訊いてゐるのは、果

たして現代思想は千年後も生き生きとその輝きを失はず、千年後の人人に影響を与へてゐると思ふかね？

——さてね。だが、多分、千年後の人人に現代思想は少なからずの影響を与へてゐる筈だとは思ふがね。

——はて、それは何故に？

——現代は、渾沌としてゐるからさ。渾沌は創造の源泉だらう？

——ふつ、渾沌は今に始まつた《もの》ぢやないぜ。百年前には既に渾沌の世は始まつてゐた筈だがね。つまり、現代は百年前に比べて、更に輪をかけて渾沌の度合ひが深まつたのみで、渾沌が何かの創造の源泉だつた事は稀にしかありやしない。

——当然だらう。歴史に名を残す《存在》は、何時の時代でも一握りの《存在》でしかないのは《もの》の道理だらう。

——つまり、現代とは玉石混淆に過ぎぬといふ事だね。どれが千年後に生き残るかは《神》のみぞ知るだね。

——多分、現代の非主流派が、千年後迄生き延びてゐる可能性が高い。

——それはまた、何故にかね？

——何時の世も傍系に甘んじて、或ひは虐げられ、その「現存在」が存命中には全く評価されなかつた《もの》が、意外にも後の世に多大な影響を与へてゐる《もの》が少なくないからさ。

——つかぬ事を訊くが、お前は現代思想に詳しいのかね？

——いいや、全く。

——それで、千年後がどうしたかうしたと語るとはちやんちやらをかしいぜ。

——現代思想は、読んでいて面白くないのだ。

——それはお前の個人的な嗜好に過ぎぬぢやないか！

——だが、思想であつても、私をわくわくさせない《もの》など千年後も生き生きしてゐるなんて考へられる筈はないだらう？

——自家撞着だぜ、お前の言つてゐる事は。つまり、《吾》が《吾》である事はないと言ひながら、思想においては《吾》の好悪で判断するこの大矛盾を何とするのかね？

——《吾》が《吾》である事はあり得ぬが、然しながら《吾》が不完全な形であつても此の世に《存在》する《吾》が、思想においてそれを《吾》の好悪で判断しても別に構はぬがね。

——それが詭弁なのさ。

——ならば訊くが、《吾》において《他》とは何なのかね？　少なくとも《他》は《吾》でないといふ事は、何事においても前提条件になつてゐるのは何故かね？

——何、簡単な事さ。《吾》は《他》であり得たかもしれぬその蓋然性に眩暈を起こすのさ。さうでありながら《吾》が《他》なしに一時も持続出来ぬ皮肉を噛み締める。それで十分だらう。この哀れな《吾》の屈辱を味はふのは。

——つまり、千年前も千年後も《吾》が存続する為には《他》を殺して喰らふといふ事

かね？

——さうさ。しかし、屠殺する仕方は、多分、近未来には人の手からロボットに変化してゐるだらうがね。つまり、《生》を殺す殺し方は、如何に人の手から遠い処で行はれるかを芸術的なまでに自動化する筈さ、此の人類といふ《もの》は。多分、Monitor 画面越しに人はあらゆる事を行うといふ事を目指すに違ひない。

——それはまた、何故にかね？

——楽だからさ。それだけの事さ。

——しかし、或る種が、楽を求めた刹那、その種は絶滅への道にまつしぐらぢやないかね？

——さう。緩慢なる絶滅への道さ。倒木更新は、生物史で起こらなければならぬのさ。人類なんぞ絶滅すべき最たる《もの》さ。

——それはまた何故に？

——約めて言へば、下らぬからさ。

——ふむ。下らぬねえ？　それではお前はお前自身の自滅を願つてゐるといふ事かね？

——さあ、それは解からぬ。唯、私は生き恥を晒して生きいてるのは確かさ。

——だからと言つて、それが《他》も同じだとは思ふのは僭越といふ《もの》だぜ。

——ならば、お前は何故に《生》にしがみ付いてゐるのかね？

——へつ、私はもしかすると既に死んでゐるかもしれぬぜ。まあ、それはそれとして、変容する《吾》の行く末を見定めたいだけさ。

——それこそ詭弁だぜ。

——さうかね？　三世恒常なる《存在》をお前は夢見ないかね？

——三世恒常、つまり、過去、現在、未来を超えた超然たる《存在》への変貌を夢見るといふ事か——ふむ。それは、《死者》が既に行つてゐる事だらう。《死者》は《生者》にとつて、三世恒常な《存在》さ。例へば、プラトンが現在に至つても尚、その思想が生き生きとしてゐるのは、ソクラテスが《存在》した事にもよるが、しかし、プラトンが書を遺したからだらう。

——つまり、文章、否、文字に《吾》は宿ると？

——さう。《吾》は文字に宿る《念》なのさ。

——くきいんんんん——。

——さて、つまり、《存在》とは、文字により、置き換はる何かといふ事かね？

——多分、さうなのさ。書く事でやうやつと《吾》がその漫然とした輪郭を多少はくつきりと浮かび上がらせる事が可能なのさ。

——さうかね？　私は、書く事によつて益益混迷の中へと突き進む《吾》を見出すがね。

——それは、お前の変容がまだ不十分だからに過ぎぬ。絶望を知つてしまへば、否応なく《吾》は《吾》を文字に認（したた）めるに違ひない。

——それは言霊信仰と同じぢやないかね？

――勿論！　言霊の《存在》を信ずればこそ、《吾》は《吾》を《念》と言つてゐるのさ。
――つまり、《念》は言語に上手く乗れるといふ事かね？
――別に言語に拘る必要はない。絵画や彫刻や音楽だつて《念》は乗るからね。
――それでもお前は言語を選んだのだらう？　それは何故だね？
――心像において色や形や音は邪魔だからさ。
――抽象絵画は？　将又、現代音楽は？
――抽象絵画にしても現代音楽にしても、今度は心像の幅が大き過ぎるのさ。
――つまり、言語が最も自在に心像を喚起するといふ事かね？
――さう。つまり、《念》の乗り物として言語においてこそ、多少の自在が保持される。
――奔放なる心像の表出は厭だと言ふ事だね？
――さう。何事も過剰はよくない。過剰であると、結局、己の好む《もの》のみを選ぶ傾向があるからね。何故つて、《吾》は過剰に対して絶えず防御反応を引き起こし、過剰を選別して、平常へと無理矢理引き摺り下ろす。その選別の時、《吾》は《吾》の好みに応じて選別してゐるのが普通なのさ。そして、過剰は《吾》を極度に疲れさせる。これがいけないのさ。例へば抽象絵画や現代音楽は、余りに過剰に私に語り掛けてくるので、観たり聴いたりする時、唯唯、疲れるだけなのさ。況して漫画は尚更私には過剰な情報量がある故に読むと途轍もなく疲れるのさ。
――それぢや、情報過多な現代ぢや生きてゆけないぜ。
――何、情報を遮断しちまへば、それで済むだらう？
――情報を選ばずに遮断するか――ふむ。しかし、それぢや、山に住む仙人と何が違ふのかね？
――別段違はなくとも構はぬではないか。
――ならば、山に籠る方がどれ程《吾》には生き易いか、今更言ふに及ばずだね、
――また、山に籠るには若過ぎると思つてゐてね。例へば仏門に入るとして得度するのにまだ若過ぎると思つてゐるのさ。
――つまり、後後は仏門に入らうと？
――さあ、それは解からぬが、唯、情報に溺れずに思索に耽る静かな生活は送りたいと願つてゐる。
――そんなもの、今やらなくて何時やるといふのかね？　時は待つて呉れやしないんだぜ。
――だから、私は情報を遮断してゐると言つた筈だぜ。
――それで何か悟れたかね？
――いや、　何も。
――ふつ、当然だな。
――さう、悟る事なんぞ端から望んでいない。
――しかし、思索には耽りたいといふ我儘は推し進めようとして我を通さうとする。この大いなる矛盾を何とする？

――別に、どうともしないぜ。矛盾をちやんと抱へ込む事が、思索の源泉になるからね。
――ふむ。しかし、自在を求める事によつて我執に囚はれるといふ袋小路は、混乱のもとだぜ。
――所詮、《吾》は混乱、へつ、渾沌としてゐる《もの》なのさ。
――それを言つちやお仕舞ひだぜ。
――さうかね？　《吾》は渾沌故に思索を望む《もの》ぢやないかね。
――その方便としての言語だね？
――さういふこつた！
――ならば、《念》を言語に盛る形式は見つかつたかい？
――いや、まだ手探り状態さ。唯、ドストエフスキイに匹敵する《もの》はものにしたいがね。
――へつ、何と高望みな事よ。ドストエフスキイと来たもんだ。ふつ、それは非常に非常に非常に難しい事だぜ。
――だから望む処なのさ。
――それは詰まる所、不可能を可能にしたいといふお前の願望だらう？
――不可能を何とか可能にするべく、《吾》は思索する筈だがね。何故つて、《吾》が此の世に《存在》しちまつた事を受け容れるその仕方は、人それぞれ違ふやうに思へるが、ところが、《吾》がこの得体の知れぬ《吾》を受け容れる「受難」は、《吾》を困惑させ、《吾》は戸惑ふばかりなのだ。
――それと　ドストエフスキイと何の関係があるといふのかね？
――ドストエフスキイの巨大作群は、私の魂を揺さぶつて飽きさせないのさ。
――だから？
――だから、《生》が面白いのさ。
――へつ、そんな事でお前は《生》を繋ぐといふのかね？　それぢや、未だ見ぬ未来人に対して合はせる顔がありやしないぜ。
――さうかね？　私は、それ故に、ドストエフスキイを超えた《もの》を認めたいと思ふのだがね。
――それが、無茶苦茶なのさ。ドストエフスキイを超えるだつて？　それは永劫に亙つて不可能だぜ。
――だから、この《吾》は《生》を繋げるのぢやないかね。超えるべき《もの》に出合ふといふ幸運は、さう簡単にはあり得ぬからね。
――否！　誰もが超えられぬ《もの》の《存在》を認識してゐるぜ。例へばお前はお前の親を超えたと思つた瞬間があるかい？　ないだらう？
――つまりだ。この《生》には、元来、超克するべき《もの》を最も身近な処に坐させるのさ。しかし、《吾》はどう足掻ゐた処で親とは死別する運命にある。これは何《もの》も避けられぬ事だ。つまり、親は超えられぬままに、《吾》の元から彼の世に出立し、《吾》は独りで、若しくは、伴侶を得、子を儲けて「自立」する事を余儀なくされる。

――それとドストエフスキイと何の関係があるといふのかね？

――つまり、人生とは不可思議で面白いといふ事さ。

――それぢや、何の説明にもなつていないぜ。例へば国旗に文字を書き込むのは、多分、日本人以外ゐないと思ふがね。つまり、日の丸に文字を書き込む日本人は、他国に比べて今も尚、言霊信仰が、さうとは自覚してゐなくとも、厳然と《存在》してゐると看做せる。その日本人であるお前は、お前の魂を揺さぶつて已まないドストエフスキイの巨大作群には、言霊が確かに《存在》するその証左を見てしまつたからぢやないのかね？

――それ故に、日本人は言霊を、この高度科学技術文明社会においても原初的な力が宿る《もの》として、無意識に感じ取つてゐるとも言へる。

――それつて何故なのかね？　何故に日本人のみ国旗たる日の丸に文字が書き込めるのか――。

――文字が神聖で冒すべからぬ《もの》として、今も古代の習俗が残つてゐるからだらう？

――つまり、国旗に文字を書き込む日本人といふ《もの》は、私が言ふ《念》といふ《もの》を不知不識のうちに信じてゐるといふ証左だね？

――《念》ずれば伝はり、成し遂げられるといふ信仰が今も根付いてゐるのさ。それ故に、私は、日本語でドストエフスキイを超える作品を書きたいのさ。

――それが無謀な神をも畏れぜぬ所業だといふのさ。

――だが、何《もの》によつてか、ドストエフスキイを乗り越えねばならぬのは人類に託された宿題な筈だ。

――しかし、それつて既に何人もの先達が挑戦してゐる筈だが、しかし、それでも尚、断然ドストエフスキイの方が輝いてゐるのが実情だらう。

――だからといつて、この無謀とも言へる挑戦に挑まなくてどうする？　「現存在」ならばどうあつてもドストエフスキイに挑戦しなければ、己に対する屈辱は尚更益すばかりで「現存在」は死に追ひやられるのみさ。また、ドストエフスキイにぶつからないでやり過ごそうなどという輩は思想なんぞ語る資格すらない。そして、恥ずかしくて「現存在」を《吾》と名指す事など生涯、否、未来永劫に亙って出来やしないんだぜ。乗り越えるべき「壁」は高くて頑丈なほどいいに決まつてゐる事は言はずもがなだらう。そして、現代においても尚、その輝きに微塵の陰りもないドストエフスキイの巨大作群には、強烈至極な《念》が宿つてゐるぢやないか。それ故に乗り越え甲斐があるのさ。

――さう思ふのであれば、さうすればいいだけのことだらう。そんな事、此処で公言するものでもないだらう。やりたければ好きにすればいい。

――何を他人事のやうに言つてゐるのかね。この問題は全人類に投げかけられている大問題なんだぜ。ドストエフスキイが全人類に投げかけた問題を解かずして、未来があると思ふかい？

――そんなことお前に言はれずとも重重承知してゐるがね。更に言へば、二十一世紀の現代において、ドストエフスキイが生きてゐた時代に持ち越しにされてゐた問題が世界

各地で噴出してゐるこの事態は、再びテロルの時代を齎したわけだが、さて、この凄惨な事態に対して「現存在」には何が出来るのか考へざるを得ず、これを避けて抛つておくと、テロリストを世界各地にばらまくだけといふ事を知つてしまつた「現存在」はどうすべきか狼狽へてゐるばかりなのである。

――だから尚更、「現存在」は日常にテロルがあると言ふ「現在」に戸惑つてゐるんぢやないかね。

彼はさう黙考の中に沈潜しながら、人間のどうしやうもない性に対して絶望する外ないのかと、深い哀しみに魂魄が圧し潰されさうになりながらも、こんな時代だから尚の事、生き延びなければならぬと覚悟するのであつた。とはいへ、テロルに及ぶ《もの》達の、その深い「人間」に対する憎悪は何に起因するのだらうと思ふのだが、それは現在世界で起きてゐるテロルの殆どは、近親憎悪に思へなくなかつたのである。しかし、近親憎悪程、此の世で厄介で残酷な事はなく、また、その闇の深さは底無しに違ひなく、それは、多分に互ひに争つてゐるどちらかが剿滅する迄続くに違ひないと思へなくもないのであつた。

――近親憎悪？　言ふに事欠いて近親憎悪だと？　つまり、現在世界を蔽つてゐる暗い暗い暗い影は、骨肉の争ひに過ぎぬと言ふのかね。お前の見方は、現在世界で起きてゐるテロルは近親憎悪以上でも以下でもないと言ふ事なのかね？　これは異な事を言ふ。仮に未だ宗教が存在してゐなかった太古の昔であつても、戦争は、哀しい哉、厳然と存在してゐた筈だがね。つまり、宗教にテロルの起因を求めるのは間違ひだぜ。多分に「人間」の死生観が変化してしまつたと看做した方が賢明だらう？

――つまり、己の死は己独りで完結させるものではないと？

――ああ。テロルとはそもそも自爆者独りで完結するものと言ふ考えは全く存在せずに、身も知らぬ《他》をなるべく多く死に巻き込むと言ふ事がその使命だらう。つまり、死は日常のあらぬ処に何時も転がつてゐるのさ。さうして此の世を蔽ふ《ざわめき》には身も知らぬテロリストに殺された無辜の人たちの怨嗟も混じり始めたのさ。だから、それは耳を劈く程に鋭く強烈な音にも変化しちまふのさ。

――つまり、テロルに巻き込まれた無辜の人たちは未だに己の死を自覚してゐないと？

――当然だらう。彼らは未来永劫己が死んだとは思ひもよらぬ筈だ。更に悪い事に、テロルで死んだものは大概異教徒か宗派が違うものに殺されてゐる。これ程残酷な事はないだらう。

――つまり、テロルに巻き込まれて死したものは、「現存在」の自由の最後の砦たる死を、無理矢理剥奪された何かへと強制的に変化させられた哀しむべき存在なのだらうか。

――大いに哀しむべきと思はれるのだが、それでも一体全体何事が起きたのかを全く知らずに死んでしまつた彼ら彼女らは、此の世を恨んで彷徨ひ続けると言ふ、何ともやるせない、しかも、恐ろしき存在へと必ず変化してゐて、死した彼女彼らは誰彼と見境なく憑依しては、更なるテロルを実行するのかもしれぬな。

――死の連鎖か……。怨恨は死の連鎖を生む化け物だ。況して己の死も知らぬものが「現

存在」の自由の最後の砦たる死を知らぬ以上、残された親類縁者においてもよからぬ恨みとしてそれは発露し、やがてはテロルを実行するのか……。

――その状況の混沌としたものが現在だ。世界は何処も彼処も恨みと鎮魂の入り交じつた暴風の中で、各人は歯を食い縛つて大地に屹立するのだ。

――つまり、此の世に屹立する事に異常な労力を必要とする、何とも生きづらい世が再び百年ぶりに到来したのだ。世界が個人で閉ぢて温温と過ごせる時代は既に過ぎ去つてゐて、世界には不意に身も知らぬテロリストが出現し、世界は阿鼻叫喚の様相を呈し、一気に爆風で開かれ、そのぞつとした有様は、誰にとつても足が竦む恐怖が支配する暗黒時代の始まりかも知れぬのだ。

――暗黒時代？　暗黒世代と言へば、中世の西洋が将に暗黒時代と形容されるが、しかし、研究が進むにつれ、以外と庶民は逞しく生き、活気があつた時代として見直されてゐる。しかし、百年前のテロルの時代は、世界の冷戦構造で一旦封印されたかに見えたが、それは、テロリズムよりも強大な恐怖で世界を蔽ふ事で、テロリストの憤懣は雲散霧消してゐただけなのかも知れなかつたのだ。さうして、その箍が外れた現代、世界各地でテロルが毎日のやうに起きてゐるが、それはしかし、限定的、かつ局所的な恐怖を醸成はするが、世界は尚も安寧の中に殆どの世界は胡座を舁いてゐる。

――だから、《吾》が《吾》を呑み込むといふ事には、既に雑音が、ノイズが絡みついてゐて、《吾》は雑音に塗れた《吾》を呑み込むのだ。さうして、相変はらず《吾》はげつぷをするのだが、そのげつぷは、もう不快極まりない音ならざる奇怪な音で《吾》はもう、苦笑ひするしかないのだ。

――それはもう、げつぷではないのぢやないかね？

――さう。もうげつぷではなく、うんうんと唸る呻吟に近しい、もしかすると苦悶の断末魔かもしれぬのだ。

――さうだね。此の世は理不尽に殺戮されたものが余りにも多くなつてしまつた。それら永劫に報はれぬ不合理のうちに殺戮されたもの達の断末魔が、《吾》が《吾》を呑み込んだときのげつぷを、かき消してしまつたといふことだ。既に慈悲深い世界に抱かれてゐた此の世の春の時代は終焉してしまつた。今は何処も阿鼻叫喚が逆巻く、怨恨ばかりが跋扈する身震ひする外ない世界に変貌してしまつた。何たることか！　怨恨は怨恨を誘ふ永劫に続く連鎖を生み出してしまふ。或る処に怨恨が生まれてしまつたならば、最早、怨恨の連鎖を断ち切る術を「現存在」は持ち合はせてゐないのだ。

――だからといつて、憤死するわけもなからう。怨恨を抱いたものが憤死するだけの覚悟は最早、現代は抱かせない論理が優先する。とはいへ、今も、憤死するだけの覚悟を持つた強者は存在し、チベットの僧は、その先陣を切り、体制に反発して憤死するのだ。しかし、憤死もまた怨恨を生むのみで、やがて、それは闘争へと発展するに違ひないのだ。チベットの僧達の憤死は、それを望んでゐる。導火線になる事を望んでゐるのだ。果てしなき闘争、それは戦争に違ひなく、それをチベットの僧は待ち望んでゐるのだ。

――既に我慢の限界か？　「現存在」は存在自体に我慢の限界を迎へてゐるのか？　だ

とすると、再び、実存主義の時代が到来するのかね？

——さあね。だが、新語造語を作らなければ此の世を語り果せる言葉を最早「現存在」は持ち合わせてゐない。だから、《吾》はげつぷしか吐けないのだ。言葉を持ち合はせてゐないからこそのげつぷは、多分、《吾》の哀歌、若しくは悲歌に違ひない。

——つまり、Swansong といふ事か。ならば、最早、此の世には哀しみしか意味を持たぬと言ふ事か。ふつ、つまり、現代は哀存主義か、将又、悲存主義の時代という事かね？

——つまり、現代では無の無化を徹底的に行つたために、此の世に存在したものは絶えず太陽光に等しき光に晒されて、《吾》の恥部を万人に晒してゐるのだ。その恥部とは《吾》の素面だがね。何故って、「現存在」ほど仮面好きもをらず、「現存在」とは仮面族の別称だらう。

——まあ、そんなところかな。だが、素面見たさに《吾》を隈無く検査と称して調べ上げたのは、これまた、「現存在」のどうしやうもない性だらう。今は、脳に Spotlight が当たてゐるが、人工知能とともに脳も解析されるのもさう遠くはないだらう。だが、その時、「現存在」は己の立ち位置をどうするのか、難しい問題に出遭ふ筈で、それに堪へ得る存在論を「現存在」は構築せねば、多分、半数以上の「現存在」は路頭に迷ふ筈だ。

——何故、路頭に迷ふと？

——拠り所がなくなるからさ。

——何の拠り所かね？

——人工知能を搭載した「肉体」を持った Android(アンドロイド)、若しくは Robot(ロボット)の登場で、意識が万人の目に晒される事になる。さうなると、存在は Android か Robot かに関して徹底的に解析した方が、格段に解りやすく、それは、Programming 言語で翻訳可能な筈で、意識が白日の下に晒されるのさ。そこで、「現存在」は解析された意識に準ずるやうにと強要され、それができないものは、社会に適応できず、Dropout する筈さ。

——果たして意識がその尻尾を出すと思ふのかい？　神と言ふ「インチキ＝崇高」をでつち上げて信仰する「現存在」のその浅薄でありながら、不可解な、そして、奥ゆかしい意識は、さて、神神しいものとして「現存在」の眼前にその姿を現はすと思ふかい？

——さてね。唯、人工知能と競合するものは数多出てくるのは、甘んじて受け容れなければならぬ。しかし、その一方で仮にも人工知能を奴隷にできた暁には、「現存在」は貴族然として思索に耽る存在として此の世に存在する事になると思ふかね？

——どのみち、人工知能と共存しなければならない世界に既に「現存在」は置かれてゐて、これから生まれてくる未来人は、先験的に人工知能が存在する世界に出現させられる。だからといって、「現存在」は己を卑下する必要はないのだが、しかし、何においても人工知能の方が優秀という事態に出遭ってしまふと、己が特権階級に属すると言ふ観念を抱けるのかどうかは不明だがね。それ以前に、赤子は人工知能をどう理解するのだらうか。

——何、心配いらないぜ。物心が付いて Android とか Robot とかの言葉を知れば、既に

其処には或る観念が付随してゐて、やがてAndroidもRobotも「現存在」と違ふ存在である事はぼんやりと区別する筈さ。

——ぼんやりとかね？

——さう、ぼんやりとだ。哀しい哉、青春の苦悶を経験しなければ、AndroidもRobotも赤子にとってはぼんやりとした観念しか持てぬのだ。存在の魔に囚はれた時に始めて、自同律と他とAndroidとRobotの存在様式の在り方が違ふといふ事を身を以て知らされる。

——それは知らされると？

——さう、知らされるのだ。自意識が肥大化する思春期を過ごし、やがて《吾》を持ち切れぬ事にはたと気付いた《吾》のみが、「存在とは何ぞや！」と無言の世界に対して問ひを発する。しかし、《吾》はどうしやうもない屈辱感に苛まれながら、無言の世界に対して名指し始めるのだ。その段になると《吾》は、やうやつと《吾》が特別な存在でない事を、つまり、その他のものとして同等の単に名があるのみの存在でしかない事を心底思ひ知らされるのだ。

——其処には絶望しかないんだらう？

——さう、絶望があるのみ。だから《吾》は哲学に、文学に、信仰に、或ひは科学に縋る。さうやつて《吾》は《吾》を誤魔化すのだ。

——だが、《吾》はそんな中途半端な状態に堪へ切れず、《吾》を虐めながら弄くり回すのだ。

——へつ、それでも何にも答へは見つからないぜ。

——そんな事は百も承知さ。承知しながら、《吾》を酷使せずにはをれぬ。さうして《吾》は《吾》を破壊し、廃人になるのさ。廃人になりさへすれば、後は絶望も、苦悩も、何にもありやしない。

——しかし、廃人なるまで、《吾》を虐め抜いた《吾》を知らぬぜ。

——当然さ、廃人になる前に、殆どの《吾》は自死を選んでゐる筈さ。

彼はふうつと一息吐くと、何処か顔が引き攣つた嗤ひをその顔に浮かべ、眼窩に爛爛と輝く眼で、虚空をぢつと眺めたのであった。彼には、果たして虚空に何が見えてゐたのだらうか。多分、それは、観念がある異形の姿を纏つて虚空に出現し、共食ひをしてゐる悍ましい光景だつたのかもしれなかった。

——それではお前は何なのかね？

——廃人さ。

——自ら廃人と言ふのは、廃人でない証拠だぜ。

——しかし、《吾》はとつくの昔に廃人になつてしまつたのだ。何故つて、《吾》は到頭《吾》を持ち切れなかつたのだ。だから、今は、言葉にならないげつぷを吐くのみのしがない存在に成り下がつちまつたのさ。最早、世界に対して、この無言の世界に対してぐうの音も出ぬ《吾》は、只管《吾》を
呑み込む事でやうやつと《吾》は《吾》である事を自覚させてゐるのさ。

——其処には自同律の不快は存在するのかい？

——いや、もうないね。感覚が全て麻痺してしまひ、快不快を感ずる感覚など全て失つちまつたのだ。

——何故、其処まで、自己を追ひ込んだのかね？

——さうせずば、俺は此の世で生き残れなかったのさ。何としても生き残るべく、唯生き残る事にのみを廃人になりながらも縋つたのだ。でも、死んだ方がどれだけ楽か！ しかし、この楽がいけない。楽こそ滅亡の端緒なのだ。楽したいが為に死を選んでも、それは終始自己満足に成り下がり、誰も、その死したものの観念などに思ひを寄せぬ、残酷な世界の一面が見えてゐたからね。

——それだけ語れるのであればお前が廃人な筈はないぜ。

——どうもご勝手に。しかし、俺は最早此の世界に対して無抵抗な輩の一人にしかなり得ぬのだ。哀しい哉、思春期に抱いたこの世界に対峙する《吾》の存在と言ふ大仰な夢は露と消えたのだ。

——それが廃人、へっ、それがお前の行き着いた結論かね。

——だから俺はげつぷをしているのさ。この何とも不快なげつぷをね。

——舌の乾かぬうちに不快と言ったな。まだ、快不快の感覚は残つてゐるんぢやないかね？

——いや、もう快不快の感覚は残つてゐない。げつぷを不快とか感じるのは感覚ではなく、俺の観念の記憶に過ぎぬのさ。遠い昔の記憶にげつぷは不快だ、といふ記憶が残つてゐて、その残滓がげつぷは不快だと思はせてゐるに過ぎぬ。

——へつ、嗤はせるな！ お前の何がお前をして《吾》を潰滅するに任せたと言ふのだ。お前は、哀しい哉、まだ、此の世に存在する。お前は潰滅はしてゐないのだ。

——唯、俺は死者の代弁者にはなり得るかも知れぬとは思つてゐるがね。

——それは思ひ上がりに過ぎぬぜ。お前は、生者であるが死者ではない。

——しかし、耳を劈く死者どもの断末魔ははつきりと聞こえるのだ。そして、死者の多くは、自らの死を受容してゐないんだぜ。をかしいだらう。死者は大概己の死を知らぬ生者として此の世を跋扈してゐるんだぜ。ほら、其処に自らの死を知らぬ死者の霊が漂つてゐるぢやないか。へつ。

こんなひそひそ話が世界のあちこちで毎時行はれてゐる……。それがぎわめきとなつて俺の耳を劈くのだ。

（完）

蟻地獄

それは近所の神社の境内で罐蹴りか、或ひはかくれんぼをしてゐた最中に不意に高床の社の床下に隠れやうとした刹那に見つけてしまつた筈である。それが薄羽蜉蝣(うすばかげろふ)の幼虫である蟻地獄と名付けられたものの在処であつたことは、家に帰つて昆虫図鑑で調べるまでは解からなかつた筈なのに、幼少の私はその擂鉢(すりばち)状をしたその形状を一瞥しただけで一辺に惚れ込んだ、つまり首つたけになつたのは間違ひないことであつた筈である。其処には、丁度雨が降りかかるか降りかからぬかの際どい境界の辺りに密集して、擂鉢状の小さな小さな小さな穴凹が天に向かつて口を開けて並んでゐたのであつた。さて、さうなつたなら罐蹴りかかくれんぼかは判然としないが、どちらにせよ、そんなものはそつちのけで未知なる蟻地獄を調べることに夢中になつたのは当然の成り行きであつた筈である。それは、多分、こんな風に事が運んだ筈である。先づ、擂鉢状の蟻地獄をちよこつと壊してみるのである。さうして、そのままちよこつと壊れた蟻地獄をじつと凝視したままでゐながら己でははつきりとは解からぬが何かが現はれるのを仄かに期待してゐる自分に酔ふ如くにそのまま凝視してゐると、案の定、其処は未知なる生き物の棲み処で小さな小さな小さな擂鉢状の穴凹の底の乾いた土がもそつと動いたかと思ふと、直ぐ様餌が蟻地獄に落ちたと勘違ひしてか、蟻地獄の主たる薄羽蜉蝣の幼虫が頭部で土を跳ね上げる姿を幽かに見せて、暫くするとそのちよこつと壊れた蟻地獄を巧みにまた擂鉢状に修復する有様を目の当たりにした筈である。幼少の私は、思ひもよらずか、或ひは大いなる期待を抱いてかは如何でもよいことではあるが、しかし、その擂鉢状の乾いた土の中から未知なる生き物が出現したのであつたから歓喜したのは言ふまでもない。さうなつたからには修復されたばかりの擂鉢状をした蟻地獄をまたちよこつと壊さずにはゐられなかつた筈である。今度はその小さな小さな小さな擂鉢状をした乾いた土の穴凹に棲む未知なる生き物たる蟻地獄を捕まへる為である。幼少の私は、特に昆虫に関しては毛虫やダニや蚤やゴキブリに至るまで素手で捕まへなくては気が済まない性質であつたから、未知なる生き物を捕まへようとしたのは間違ひのないことであつた。期待に反せず蟻地獄のその小さな小さな小さな乾いた土の穴凹の底がもそつと動いた刹那、私はがばつと土を掴み取り、その擂鉢状の穴凹に棲んでゐる主を乾いた土の中から掬ひ上げたのであつた……。

それは朽木に巣食ふ白蟻をちよつとばかり膨らませたやうな、或ひは鋏虫(はさみむし)の一種のやうな、或ひはダニの一種のやうな、或ひは蜻蛉(とんぼ)の幼虫であるやごに姿形が似てゐることから蜻蛉の一種の幼虫のやうな、将(はた)又(また)私が知らない鍬形(くわがた)虫(むし)の新種のやうな、兎に角奇妙でゐて底知れぬ魅力に富んだ姿形をしたその生き物が乾いた土の中から蟻やダンゴ虫等の虫の死骸と共に現はれたのである。

――何だこれは？

未知の生き物との遭遇は何時も胸躍る瞬間である。唯、幼少の私はその毛虫の如き、或ひは、天道虫(てんとうむし)の幼虫のやうな、将又蜻蛉の幼虫たるやごにも似たその姿形を見た刹那、蛾の仲間か、或ひは蜻蛉か、或ひは天道虫や甲虫(かぶとむし)や鍬形虫と同じやうに、何かの昆虫の幼虫であることは直感的に見抜いた筈である。

――何だこれは？

掌中に残つた土に姿を隠さうと本能的にもそもそと後じさりするその未知の虫の未知の幼虫をまじまじと凝視しながら何度も私は心の中で驚嘆の声を上げた筈である。

――何だこれは？

と。次に私は、多分、恐る恐るその小さな未知の生物を触つたに違ひない。そしてそれは思ひの外ちよこつとばかり柔らかいので再び

――何だこれは？

と驚嘆の声を心中で上げた筈である。さうして私はその未知の生き物を眺めに眺めた末に元の乾いた土の上にその未知なる生物を置き、将又まじまじとその未知なる生き物の所作を観察した筈である。その未知なる生き物はあれよと言ふ間に土の中に潜り、小一時間程そのまま眺め続けてゐるとその生き物が平面の平らな乾いた土を擂鉢状に鋏状になつた頭部で跳ね上げながら巧みに作り上げる様を飽くことなく眺め続けた筈である。それにしても幼児とは残酷極まりない生き物である。知らぬといへ、蟻地獄の餌である蟻等の地を這ふ昆虫がその小さな小さな小さな擂鉢状の乾いた土の穴凹に落ちることは蟻地獄にとつて正に僥倖に違ひなく、蟻地獄とは何時も餓死と隣り合はせに生きる生き物であつたので、蟻地獄の巣が少しでも壊れると温存しておかなければならぬ体力を消耗してまで蟻地獄は土を跳ね上げて餌を穴凹の底に落としにかかる労役に違ひない体力を消耗することを敢へてするにも拘はらず、幼少の私は、やつと出来上がつたばかりの擂鉢状のその小さな小さな小さな蟻地獄の巣を再びちよこつと壊しては、再度餌が蟻地獄に落ちたと勘違ひしてその乾いた土の穴凹の底で土を跳ね上げては虚しき労役をした挙句に再び擂鉢状に乾いた土を巧みに作り上げるといふ、幼少の私にはこれ程蠱惑的なものはないと言つたその蟻地獄の一挙手一投足の有様をみては、再びその蟻地獄をちよこつと壊すことを何度となく繰り返しながら、何とも名状し難い喜びを噛み締めてゐた筈である。

最初に土を掬ひ上げた時の蟻等の昆虫の死骸が蟻地獄の餌であることはその日満足の態で家に帰つて昆虫図鑑で調べるまでは解からなかつたに違ひない幼少の私は、その時、その周辺に密集してゐた蟻地獄の巣を次から次へと壊しては蟻地獄にその擂鉢状の乾いた土で出来た巣を修復させるといふ《地獄の責め苦》を、知らぬといへ蟻地獄に使役させることに夢中になつてゐたのであつた……。幼少の私にとつては蟻地獄が土を跳ね上げる様が力強く恰好よかつたに相違なく、私はその後も何度も何度も擂鉢状の蟻地獄の巣を壊しては蟻地獄が頭部で乾いた土を跳ね上げる様を見てはきやつきやつと心中で歓喜しながら蟻地獄に対して地獄の労役をさせ続けたのであつた……。

家に帰つても未だ興奮冷めやらぬ筈であつたであらう私は、家に帰り着くや否や直ぐ

に昆虫図鑑を取り出して今さつき出遭つたばかりの未知なる生き物が何であるのかを調べ始め、さうして、遂にあの未知なる生き物が何と蟻地獄と名付けられてゐるのを昆虫図鑑の中に見つけた刹那、「あつ」と胸奥の何処かで叫び声を上げたに違ひないのである。

――蟻地獄――。

私の大好きな昆虫の一つであつた蟻の而も地獄！　何といふ名前であらうか。多分、幼少の私は何度も何度も蟻地獄といふ名を胸奥で反芻してゐた筈である。

――蟻地獄――。

その名は様々な想念を掻き立てるに十分な名のであつた。蟻地獄といふ名は今考えても何やら此の世ならぬ妖怪の名のやうな奇怪な名なのであつた。名は体を表わすと言へばそれまでなのであるが、それにしても蟻の地獄とは何としたことであらうか。幼児の私はその名すらも知らなかつた《虚無》若しくは《虚空》といふ言葉が持つ《魔力》と同じやうなものを、それとは名状し難いとはいへ、直感的に、または感覚的に蟻地獄と名付けられたその生き物に感じ取つてしまつた筈である。幼少とはいへ、私は茫洋とだが直感的には掴み得る蟻地獄といふ名に秘められた此の世にぽつかりと空いたあの《深淵》の形象をそれとは微塵も知らずに蟻地獄という言葉に見出してしまつた筈であつた……。

――蟻地獄――。

それは此の世と彼の世を繋ぐ呪文の如く突如として私の眼前に現われたのであつた。

――蟻地獄――。

幼児の私は既に地獄とは何か知つてゐた筈である。さうでなければこれ程までに蟻地獄に執着する筈はなかつたに違ひないのである。それは例へば親が深夜の寝室で性交してゐる情景を目にしたかの如く、何やら見てはいけないものを見てしまつた含羞をも併せ持つた言葉として幼児の私に刻印されたのであつた。

――蟻地獄――。

それは此の世では秘められたままでなければならぬ宿命を持つた存在として幼児の私には感じ取られたのかもしれなかつた。それ程までに《蟻地獄》といふ言葉は何とも不思議な《魔力》を持つた言葉なのである。その後何年も経なければ知りやうもなかつた《深淵》といふ言葉が、蟻地獄のそれと気付いたのはパスカルの「パンセ」を読んだ時であつたが、幼児の私は、《深淵》といふ言葉を知る遥か以前に《深淵》に対するある種くつきりとした《形象》を、蟻地獄を知つたことで既知のものとして言葉以前に直感的なる《概念》――それを《概念》と呼んでよいのかどうかは解からぬが――、しかし、《概念》若しくは《表象》若しくは《形象》等としか表現できないものとして私の脳裡の奥底にその居場所を与へられることになつたのであつた。

――蟻地獄――。

蟻やダンゴ虫等、地を這ふ生き物を餌としてゐた蟻地獄の生態を知るにつけ、成程、蟻地獄を捕まへるべく蟻地獄の巣ごと手で掴み取つた時に、蟻やダンゴ虫の死骸も一緒に掌の上にあつたのも合点のいくことであつた。それにしても蟻地獄の生態は奇妙なも

のであつた。何故蜘蛛の如く罠を仕掛けてじつと餌があの小さな小さな小さな擂鉢状の罠に落ちるのを待ち続ける生き方を選んだのか、幼児の私は知る由もなかつたが、しかし、その生き方にある種の《断念》の姿を、もつと態よく言へば《他力本願》の姿を見たのかもしれなかつた。

《自力》で餌を追ふことを《断念》し、只管(ひたすら)あんなちつぽけな擂鉢状の穴凹に蟻等が落ちて来るのを待つ《他力》に自らの生死を全的に任せてしまつたその蟻地獄の生き方に、餓死することも覚悟した上での《他力本願》の一つの成就した姿を、幼児の私は親鸞を知る遥か以前に知つてしまつたのかもしれず、その蟻地獄の、一方である種潔い生き方は、尚更、蟻地獄を興味深き《正覚》した生き物として、しかし、当の私本人はそれとは露知らずに脳裡に焼き付けることになつたのかもしれなかつた。

――蟻地獄――。

蟻地獄にとつて餓死は普通にある当たり前のことであることが解かると、私にとつて蟻地獄はそれだけで既に餓鬼道を生きる愛おしい生き物に成り果せたのであつた。

――蟻地獄――。

この愛しき生き物の生き方は幼少の私にとつて特別な衝撃を与へ、その衝撃の影響の大きさはずつと私の脳裡に留まり続けたまま、後年はつきりと言葉で知ることになつた《他力本願》を此の世で実践して見せる《正覚者》として、また、蟻地獄は他の生き物と比べて別格の生き物として、私に記憶されることになつたのであつた……。

その日から私の闇に包まれた漆黒の頭蓋内にも、今もその陥穽たる罠に引つ掛かり落つこちる、さながら蟻と化した《異形の吾》をじつと待つ蟻地獄が巣食つてゐるのである。その蟻地獄はその姿を決して私の頭蓋内に現はすことはないのであつたが、隙あらば《吾》自体を喰らふべく、その畏怖すべき気配ばかりを強烈に漂はせながら闇黒の私の頭蓋内に身を潜ませてゐたのであつた。

ところで、その日、すつかり蟻地獄の虜になつてしまつた幼少の私は、興奮が収まらぬまま布団に潜り込み、電燈が消された闇の子供部屋の中、じつと闇を見据ゑてその日の出来事の一部始終を反芻してゐた筈である。而して幼少の私の頭蓋内の闇には唯一つの疑問が蝋燭の炎の如く灯つてゐたに違ひないのである。

――何故蟻地獄は餓死を覚悟した上であんな小さな小さな小さな擂鉢状の罠に自身の生存の全てを委ねてしまつたのであらうか？

幼少の私にとつてその疑問は疑問として無理からぬのであつたが、しかし、その答えは意外と簡単なのである。蟻地獄が蟻を追つて蟻を捕獲する道を選んだとすると、それは蟻地獄にとつては最も確実至極な自殺行為に外ならないといふことなのである。蟻程恐ろしい昆虫は此の世に存在しないのである。蟻にかかれば此の世の森羅万象が蟻の餌になつてしまふ程に蟻の団体としての力は凄まじいのである。

蟻の巣の出入り口を一日眺めてみれば、蟻が生きとし生けるもの何でも餌にして、自身一匹では到底歯が立たぬ相手も数の力で圧倒し餌にしてしまふその凶暴振りに感嘆する筈である。その蟻を主食として選んだ業として蟻地獄はその身を地中に潜ませ、単体

としての蟻を捕まへる外に蟻を餌とするのは不可能なのである。その餌を追ふことを《断念》し、此の世の《最強》の生き物たる蟻を餌にしてしまふその図太さの上に餓死をも厭はぬ餓鬼道をその存在の場にした蟻地獄のその徹底した《他力本願》ぶりは、私に一つの《正覚者》の具現した例証を齎すのであつたが、しかし、その此の世の《最強》の《正覚者》が此の世に隠微にしか存在しないその有様は、何か《存在》そのものの在り方、若しくは《物自体》の有様を暗示してゐるやうに思へなくもなかつたのである。爾来、私の頭蓋内の闇には前述したやうに私自体を喰らはうとその身を闇に潜めてゐる蟻地獄が巣食ふことになつたのであつた。

それにしても蟻地獄が餓鬼道に生きるのは蟻を餌にしたことに対する因業にしか思へぬのは何故なのであらうか？　そして、蟻の存在が蟻地獄を此の世に出現させた因に外ならないやうな気がしてならないのは何故なのであらうか？　つまり、此の世の摂理とは、それを因果応報と呼ぶとすると、《存在》には必ず《存在》を餌にする蟻地獄の如き《地獄》がその陥穽の大口をばつくりと開けて秘かに《存在》が堕ちるのを待ち構へてゐるに違ひないのである。

《存在》が一寸でもよろめいた瞬間、《存在》は蟻地獄の如き底無しのその奈落へ堕ちて、《神》に喰はれるか、或ひは《鬼》に喰はれるか、或ひは《魔王》に喰はれるか、将又(はたまた)永劫にその奈落に堕ち続けるかするに違ひないのである。それをパスカルは《深淵》と呼んだが、此の世に《存在》してしまつたものは何であれ《吾》を強烈な自己愛の裏返しで憎悪し、《吾》以外の《何か》へ変容することを絶えず強要されながら、しかも、《存在》の周辺には底無しの《深淵》が犇めいてゐる《娑婆》を生きる外ないのである。其処で

――それでは何故《存在》が《存在》するのか？

といふ愚問を発してみるのであるが、返つて来るのは無言ばかりである。そしてこの無言なる《もの》が曲者なのである。ドストエフスキイは、この無言なる《もの》が全てを許してゐると仮定して《主体》なる《存在》のその悍(おぞ)ましさを巨大作群に結実させてゐるが、さて、その無言なる《もの》を例へば《神》と名指してみると、《存在》はその因果応報の円環から遁れる術をドストエフスキイ以上に人類に提示した人間がゐるかと問ふてみるのであるが、答へは未だに「否」としか答へられない憾みばかりが残るのである。それ故に先の愚問に対する答へは自身で発するしかないのであるが、私の場合、今もつて何も答へられず、唯、私の頭蓋内の闇の中に《吾》を、つまり、《異形の吾》を喰らふ蟻地獄を潜ませるのがやつとなのである。

高気圧の縁を高気圧からの、若しくは自己以外の外部の風に流されるままにしか動く外ない颱風は、一方で颱風内部では猛烈な風雨が渦巻く颱風のその動きは、しかし、如何見ても颱風が自律的に動いてゐるとしか見られない私の心模様を映す形で《無言》の《神》に対峙する《吾》は、自己内部の猛烈な風雨に比べると羸弱(るいじゃく)でしかない外部のその風に流されてゐるに過ぎない颱風が恰も自律的に動いてゐるやうに見えてしまふ如く、《神》から《自由》を与へられてゐる錯覚の中に、換言すれば、《神》から

吹く心地良き風には無知を装ひその風を風ではなく敢へて《自由》と名付けては嬉々として、その《自由》を満喫するべく更なる《自由》を求めることで返つて颱風の如く外部から吹き寄せる微風に過ぎぬ《自由》に呪縛されてゐるにも拘はらず、さうとは全く気付かなかつた《吾》自身が単なる外部の心地良き微風に過ぎぬ《自由》に流されてゐるだけといふ錯誤の中に憩つてゐる大馬鹿者に過ぎないことに不意に気付いてしまふと、《吾》といふ生き物は狼狽(うろた)へるのである。その狼狽へ方は数の力を借りると此の世で最強な《存在》にも拘はらず、しかし、蟻地獄に落ちると羸弱な《単独者》に為り果てて、正に一匹の羸弱な蟻に変化してしまふ如き《存在》なのであつた。

経験則に照らすと《自由》を謳歌するには蟻地獄に落ちた《単独者》たる一匹の羸弱な蟻になる覚悟が《何か》によつて強要される。それは台風の進路を予測するのに隣り合ふ高気圧のことを全く考慮せずに台風の進路を予測するといふ、換言すれば暗中の中を灯り無しに突つ走る《愚行》と同じことなのかもしれないのである。つまり、颱風が自律的に自身の意思で動いてゐると看做す《暗愚》とそれは同じで、しかし、さうとはいへ、それでも尚颱風が自己たる《吾》の意思に従つてあくまで自律的に動いてゐると看做して只管(ひたすら)自己弁護する哀れな《吾》を主張するはいいが、しかし、その実、後に残るのは只管自身内部で空転し猛烈な風雨が逆巻く己の有様だけに対峙する世界＝内に閉ぢてしまつた阿呆な《存在》の姿である。そしてそんな颱風の《自意識》は絶えずこんな愚問を己に発してゐる筈である。

――はて？　この渦に呑み込まれる《吾》とは、一体何なのであらうか？

と。例へば仮に颱風にも自身を客観視して已まない《異形の吾》若しくは《対自》といふ自我が芽生えてゐるならば、その《異形の吾》は、自身が最早自身が渦巻くその渦から決して出られない、恰も蟻地獄に落ちた蟻の如き自身を苦笑する外ないのである。此処で止揚などといふインチキを用ひるのは禁物である。未だ嘗て《吾》から出られた《吾》は此の世に《存在》することを許されてゐない筈だからである。さうならば、颱風もまた己からは死んでも遁れられない《異形の吾》といふ何とも悩ましい自我を抱へ込まざるを得ないのである。

――出口無し――。

これが《異形の吾》が自身に発せられる唯一の言葉に違ひない。それは当然至極なことである。《吾》といふ《存在》は、それが何であれ、《吾》といふ《存在》から決して出られない故に、《吾》が《吾》である保証、若しくは存在根拠を辛うじて維持してゐられるのである。仮令《吾》が《他》に変化出来る魔法を《吾》が手にしたところで、結局のところ、《他》に変化せし《吾》は《吾》でしかないのである。

《吾》とは、《吾》が《吾》であることを自覚させられ、また、その出自の如何に拘はらず、《吾》は蟻地獄に落ちた一匹の蟻の如く《吾》といふ《場》から最早永劫に出られぬことを決定させられた《存在》なのかもしれない。そんな《吾》はその《存在》の、若しくは意識活動の大半を《異形の吾》の憤懣を宥(なだ)めすかすことに費やされることになるのである。その因の一部は「他人の庭はよく見える」といふ喩へ通り《他》と己を

比較することからも生じるが、しかし、さうとはいへ、己といふ《存在》が自身の《存在》に満足することはあり得ず、仮に自身に満足してゐる《吾》が《存在》するとすれば、それは《吾》の怠慢でしかない。《吾》と名指された《存在》は絶えず内外から自身の《存在》を喪失するかもしれぬ恐怖に苛まれながらも《吾》を此の世に屹立させて、だがその《存在》の仕方は《吾》といふ《存在》の自棄のやんばちでしかないが、しかし、何としても自身の《存在》を崩壊の危機から救ふべく《吾》は此の世に対して、若しくは《神》に対して

――《吾》、此処に在り！

と叫ばずにはゐられないのである。だが、一方で

――その《吾》に何の意味がある？

と、更にぼそつと胸奥で呟く《吾》がまた《存在》するのである。スピノザ風に言へば、そのぼそつと呟いた《吾》がまた《吾》の胸奥の奥の奥に《存在》する、そして、《吾》にぼそつと呟く胸奥の奥の奥の奥の別の《吾》といふ関係が《無限》に続く、云々。それ故その《吾》とはabsurb、つまり、不合理である、と、其処で《無限》といふ《もの》へと思考の飛躍に駆られたくなる衝動もなくはないが、しかし、幾ら

――その《吾》に何の意味がある？

と、胸奥でぼそつと呟く《吾》が《存在》しようとも、《吾》は《吾》からは逃げ出せないのである。そしてまた、

――だからそれが如何したといふのか？

と、自身を嘲笑ふ《吾》もまた己には《存在》し、絶えず己を嘲笑してゐるのである。そな《吾》を嘲笑する《吾》自身を敢へて規定するならば、一人称でもあり、二人称でもあり、三人称でもあり得るし、更に言へば、《四人称》と名付けたくなる《脱自》すらをも何なく飛び越えてしまふ《存在様式》を持つ《吾》が《単独者》として《存在》してしまふ宿命にあるのかもしれない……。

そして、その《四人称》の《吾》とは颱風の如く自身の内部では猛烈な風雨が逆巻く自身の渦に呑み込まれた何とも摩訶不思議な《存在》の仕方をする《吾》であり、此の世で最強の《もの》のなれの果てたる蟻地獄に落ちた一匹の羸弱な《単独者》たる蟻の如き《もの》として私には表象若しくは形象されるのであつた。

さて、四人称の《吾》とはそもそも一体何であらうか。答へは単純明快である。此の世を五次元多様体と想定すれば、四人称の《吾》が登場せずにはゐられないである。更に言へば、頭蓋内の闇を五次元の五蘊場と想定すれば、四人称の《異形の吾》はこの五次元の《吾》に巣食ひ、頭蓋内を六次元の五蘊場と想定すれば五人称の《異形の吾》がこの六次元の《吾》に巣食はざるを得ないである。そして、その四人称の、そして、五人称の《異形の吾》こそ擂鉢状の蟻地獄の形状をした穴凹としてのみ《吾》には絶えず形象されてしまふのである。今現在《主体》が四次元時空間に事実《存在》してゐるとすれば、その《主体》は例へばBlack hole(ブラックホール)を形象するのにやはり擂鉢状をした底無しの穴凹を形象せずにはゐられぬこととそれは同一のからくりに違ひないの

である。つまり、吾等の思考法は、詰まる所、世界内の《主体》のそれでしかなく《主体》以外の思考法が想像だに出来ない《主体》の思考の限界若しくは宿命と呼ぶべき、《主体》のど壺にすつぽりと嵌まつて其処から永劫に脱することなき《主体》といふ《単一》な思考法のことなのである。それ故《主体》即ち《吾》にとつて《他》は絶えず宇宙の涯をも想像させる超越者としてしか出現しないのである。否、《他》は超越者としか出現の仕様が無いのである。そして、《他》は依然として謎のまま《主体》の面前に姿を現はすが、《主体》たる《吾》は、実のところ、《吾》の反映としか理解出来ない《他》に特異点を見出してしまふ筈である。否、《主体》たる《吾》は《他》に特異点を見出さなければならぬのである。それは詰まる所、《他》を鏡とする外ない《主体》たる《吾》にとつてその《吾》は如何あつても無限を憧れざるを得ない故にその内部に特異点を隠し持ち、その《吾》にある特異点こそ何を隠さう蟻地獄状の穴凹としてぽつかりと大口を開けた《もの》として絶えず《主体》は形象することになるのである。パスカルはそれを「深淵」(英訳 Abyss)と言挙げしたが、《主体》が《存在》するには絶えずその深淵と対峙することが課されてゐるのである。そしてそれは口を開いた穴凹として形象せざるを得ず、万が一にもその穴凹の口を塞いでしまふと、《主体》は《実存》といふ《閉ぢた存在》でしかない《存在》の罠にまんまと引つ掛かつてしまふのである。

《主体》は宇宙史の全史を通して穴凹が塞がりこの宇宙から自存した《存在》として出現した例は今のところ無い筈である。眼窩にある目ん玉の瞳孔を通して外界を見、鼻孔を通して呼吸をし、口を通して食物を喰らひ、肛門を通して排便をし、生殖器を通して性行為をする等々、《主体》は必ず外界に開かれた《もの》として此の世に現はれるのである。つまり、《主体》はこれまで一度も穴凹が塞がれた《単独者》であつたことはなく、《主体》自らが穴凹だらけといふばかりでなく、外界たる世界もまた《客体》即ち《他》といふ特異点の穴凹だらけの《もの》として《主体》には現はれてゐる筈なのである。そして《主体》にとつては内外を問はず深淵たるその穴凹に自由落下する方が《楽(らく)》なのもまた確かなのであるが……。

……

さて、翌日、小学校から帰つた私は一目散に例の神社へと向かつたのであつた。其処で幼少の私は先づ何故蟻地獄が高床の神社のその床下の乾いた土の、それも丁度雨が降り掛かるか掛からぬかの境界に密集してゐるのかを確かめた筈である。そして、私は、蟻地獄が密集してゐるその方向の数メートル先に桜の古木が立つてゐるのを認めたのであつた。幼少の私は多分、何の迷ひもなくその桜の古木に歩み寄り、そして蟻の巣を探した筈である。案の定、その桜の古木の根元には黒蟻の巣の出入り口があり、絶えず何匹もの黒蟻がその出入り口を出たり入つたりしてゐるのを見つけたのであつた。

――やはり、さうか。

蟻地獄が雨が降り掛かるか掛からぬかの境界辺りに密集してゐたのは自然の摂理――これは一面では残酷極まりない――としての生存競争故の結果に過ぎなかつたのであつ

た。そして、幼少の私は其処で黒蟻を一匹捕まへて蟻地獄が密集してゐる処に戻つたのである。次にざつと蟻地獄の群集を見渡し、その中で一番穴凹が小さな蟻地獄に捕まへて来た黒蟻を抛り込んだのである。

――そら、お食べ。

擂鉢状の穴凹の底からちらりと姿を現はした蟻地獄は、果たせる哉、昨日目にした蟻地獄とは比べものにならぬ程、小さな小さな小さな姿を現はしたのである。その小さな蟻地獄は高床下の最奥に位置してゐたに違ひなく、私は、その小さな蟻地獄が黒蟻を挾み捕まへて地中に引き摺り込む様をじつと凝視してゐた筈である。

――そら、お食べ。

後年、梶井基次郎の「桜の樹の下には」に薄羽蜉蝣(うすばかげろふ)の死骸が水溜りの上に石油を流したやうに何万匹もその屍体を浮かべてゐるといふやうな記述に出会つてからといふもの、桜を思へば蟻地獄も必ず思ふといふ思考の癖が私に付いてしまつたのは言ふ迄もないことであつた……。

(完)

障子

それは勿論晴れてゐることが前提であったが、彼は決まって満月の夜更けには室内の全ての灯りを消して、暫く障子越しに満月の月影をぼんやりと眺めてゐるのを常としてゐたのであった。彼にはその月影と物の気配とが織り成す仄かに明るい絶妙の闇に包まれる夜更けの時間が何とも名状し難い時空間を演出し、それは何処か此の世でない彼の世のやうな感覚を齎すので、彼はその時空間が堪らなく好きなのであった。そのまま彼は、その月影が演出する時空間にたゆたひながら、此の世の極楽を味はふやうにして、

――月影に溺れる……。

と、自らその非日常的な時空間に惑溺するのであった。この何時尽きるともしれぬ時間が彼が愛して已まないもので、その時のみが、此の世から脱落してしまひ、何処かの此の世にぽっかりと開いてゐるであらう時空の穴に落っこちて、彼自身がその穴を自由落下するやうな不思議な感覚に彼は包まれるのが堪らなく好きなのであった。

その日も彼は何時ものやうに障子越しに満月の月影を眺めてゐたのである。そして、それは、彼が深深と肚の底から深呼吸をした刹那のことであった。何かが障子の向かうで揺らめいたのである。それは風などの所為ではなく、何か自律的に動く物の気配が頻りに感じられて仕方なかったのである。

――何かの物の怪か。

しかし、それはたまゆらのことで何かの奇妙な気配は直ぐに月影の闇に消えたのであった。

――確かに何かが《ゐた》！

そこで彼は徐に立ち上がり障子をさっと開けてみると、果たせる哉、闇の奇妙な球体がゆらりと室内に入り込んで来たのであった。

――闇の球体？　何なのだらうか？

彼には驚愕するのにも今現在起こってゐる事態が直ぐには呑み込めなかったので、唯、眼前にゆらりと浮かぶ半径五十センチメートル程の闇の球体を眺める外に取る術がなかったのであった。そして、

――何だ、これは？

と思った刹那、その闇の球体は彼目掛けて飛び掛かって来たのであった。

――ううっ。

と、彼は一瞬呼吸困難に陥ったとはいひ条、しかし、彼は闇に抱かれてゐるといふ何とも名状し難き悦楽の境地に羽化登仙してゐたのであった。その闇の球体は先づ彼の顔目掛けて襲ひ掛かったのであったが、その闇の球体が凶暴性を見せたのはそれっきりで、その後は闇の球体はゆっくりと拡がり彼の全身を包み込んだのであった。

――ちぇっ、また《無限》へ誘(いざな)ひやがる……。

とは思ひつつも、その実彼はそれが嬉しくて堪らなかったのであった。当然、彼は闇に包まれてゐた所為で何も見えなかったが、しかし、彼はそこでゆっくりと障子を閉め、その場に胡坐をかいて座ったのであった。

――母胎の中の胎児はきっとこんな感じの闇を味はひ尽くさねばならぬに違ひない……。それは闇を媒介として存在が存在することを弾劾しなければならぬ、それでゐてこの上なく心地よい《楽園》にありながら、しかし、存在が弾劾された末に何時《落下》するのか解からぬ危険を孕んだ、例へば《浄土》と《地獄》が行き来出来てしまふのを障子のみで仕切っただけの危ふい月影の中の和室の如き《場》こそ、《無》と《無限》の往復が成し遂げられ、存在が存在に不意に疑念を抱く一瞬の《存在の揺らめき》が現出する《場》に違ひないのだ！

また、何時ものやうにたまゆらの悦楽の時間が過ぎてしまった……。彼が闇の球体に包まれてゐると感じたのは彼が自ら演出した《幻影》に過ぎず、それは彼が一度ゆっくりと瞬きしただけに過ぎなかったのである。

障子の向かうは相変はらず満月の月影の静寂に包まれた《世界》を障子に映してゐたのであった……。

さて、さうして満月の世の思はぬ悦楽を味はふ事になった彼は、果たせる哉、そのまま明かりをともさずに、今さっき起こった事の意味を頭蓋内の闇を手で弄るやうにして手探りするのであったが、それは彼にはどうあっても骨白に思へて仕方ないのであった。

と、そんな時である。不思議な存在の気配を感じるのは。

たまゆらのことである。不思議な気配が何者かに変化し、それを彼は奴とを呼んで、しばらく奴がするままにしてゐたのであった。

彼は奴のその存在をほんの僅か感じただけであったが、確かに奴は彼の背後にゐたのは間違ひないことであった。奴は彼の視界の境に何度か現はれては消えることを繰り返した後、彼の虚を突く形で不意に彼の面前に奴は現はれたのであった。それが奴の《他》に対する時の礼を尽くした作法なのであらう。

彼も奴の礼に応へる形で頷く事はせずにただ黙して奴を凝視し続け、唯奴のその仄かな存在感をじっくりと噛み締めるのであった。それが奴に対する彼の最高のもてなし方だったのである。さう思へたのは奴が彼の正面に忽然と現はれたことで全てが語り尽くされてゐた。つまり、奴は彼との対面を冀ひ、その時が来るのを、多分、何時までも待ってゐたに違ひないのであった。

しかし、奴の存在について彼が何の疑念も抱かずに奴の存在を認めてゐることを吾ながら訝しく思ふでもないが、しかし、彼が奴の存在を認めなかったならば一体誰が奴の存在を認めてやるのか甚だ疑問である。奴は確かに此の世に存在してゐる何かなのであった。多分、奴は《邪鬼》として何処にゐても忌み嫌はれ、未だ存在に至らざる何ものかであったのは間違ひないことであった。そんな奴であったからこそ彼は奴の出現を許したのであった。だが、実際奴が出現してみると彼にはある疑念が湧いたのであった。それは奴が彼を喰らふといふ疑念である。最初、たまゆら彼が出現した時点では彼の腹

は決まってゐなかったのである。つまり、奴が彼を喰らっても彼は別に構はないのかどうかといふ覚悟が彼には出来てゐなかったのであった。しかし、

——別に奴に喰はれてもいいじゃないか！

これが彼の結論であった。

——奴が彼を喰らって仮初にも奴の面を俺が被らうが別にいいじゃないか！

多分、これが彼に出来る唯一の自己変容の形、若しくは彼の流儀であったのかもしれぬ……。

——ほら、奴が姿を消したぞ！　さて、俺を喰らふか？　ふっ、それはそれで構はぬ。

さて、俺の肚は決まった。それ、俺を喰らへ！

と、彼は月影の闇の中で不意に哄笑をするのであった。さうして、再び、障子をさっと開け放ち、満月を凝視するのであった。

——あっ、奴が来た！

嗤(わら)ふ吾

何がそんなに可笑しかったのかてんで合点のいかぬ事であったが、私は眠りながら

《吾》を嗤ってゐた自身を覚醒する意識と共に確信した刹那、ぎょっとしたのであった。
ーー嗤ってゐる！
その時私は夢を見てをらず、唯、《吾》といふ言葉を嗤ってゐたのであった。
ーー《吾》だと、わっはっはっはっ。
頭蓋内の闇を、唯、《吾》といふ言葉が文字と音節とに離合集散を繰り返しながら旋回してゐたのであった。
ーー《吾》といふ言葉に嗤ってゐやがる。
眠りながら嗤ふ吾を見出したのはその時が多分初めてではないかと思ふのであったが、しかし、《吾》といふ言葉が闇しか形象してゐないこの状態をどう受け止めて良いのか皆目解からず、私は暫く呆然としてゐる外なかったのであった。それでも暫く経ってから、ーー俺は夢を見てゐなかったのじゃなくて、《吾》が表象する《闇の夢》を見て嗤ってゐたのだ！
との思ひに至ると、何故か私は、私が眠りながら嗤ってゐたその状況を不思議と納得する私自身を其処に発見し、そして、これまた不思議ではあるが自分に何の疑問も呈さず納得するばかりのその私自身を自然に受け入れてゐたのであった。
ーー《闇》の《吾》……否、《吾》が《闇》なのだ！
私はたまにではあるが《闇の夢》を見る事がある。それを夢と呼んで良いのかは解からぬが、《闇の夢》を見てゐる私は夢を見てゐる事をぼんやりと自覚してをり、その《闇の夢》を見てゐる私は、只管（ひたすら）、闇が何かに化けるのを、若しくは何かが闇から出現するのをじっと待つ、そんな奇妙な夢なのであった。
多分、その日の嗤ってゐた《吾》を見出した《闇の夢》は、《闇》から一向に《吾》が出現しない様がをかしくて仕様がなかったのであらうとは推測できる事ではあった。
それは何とも無様な《吾》の姿に違ひなかったのである。夢とはいへ、闇の中から出現した《吾》が《闇》でしかないといふ事は嗤ひ話でしかなかったのである。しかし、《闇》から出現する《吾》がまた《闇》でしかないといふ事は言ひ得て妙で、而も、私にとってはある種の恐慌状態でもあったのだーー。
ーー《闇》＝《吾》！
私にとって《吾》は未だ私ならざる《闇》のまま、未出現の形象すら出来ない曖昧模糊とした、否、私は《闇》そのものでしかなかったのである。
しかし、これは一方で容易ならざる緊急事態に外ならず、《吾》が《闇》でしかないこの無様な《吾》を私は嗤へない、否、嗤ふどころか、わなわなと震へるばかりであった筈である。それにも拘らず《吾》は《闇の吾》を見て嗤ってゐたのである。そもそも《闇の吾》を嗤へる私とは何ものであらうか？　不図そんな疑念が湧く事もなくはなかったが、それ以上に予測はしてゐたとは言ひ条、《吾》が《闇》である事に唯唯驚く外なかったのであった。
ーー《闇》から何も出現しない！　何故だ！

夢見中の私はさう《闇の夢》に向かって叫ぶべきであった筈である。しかし、実際はさうはせずに只管《闇の夢》を見てゐる《吾》を嗤ってゐたのであった。

ーー何故嗤へたのであらうか？

もしかすると私は《闇の吾》に《無限》を見出したのかもしれなかったのだ。否、多分、私は《闇の吾》を嗤ひながら、《無限》なる《もの》と戯れ遊んでゐたのであらう。いやそれも否、私は唯《闇》なる《吾》に翻弄される《吾》を嗤ってゐたのであらう。それは《闇》といふ《無限》を前にあたふたと何も出来ずに唯呆然とする外術のないこの矮小な《吾》の無様さを嗤はずにはゐられなかった筈である……。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

《闇》以外何も表象しない《吾》を見て、その《闇の吾》を《吾》と名指ししてしまふ事のをかしさが其処にはあった筈である。そもそも《吾》を《吾》と名指し出来てしまふ私なる存在こそのをかしさが其処には潜んでゐたが、しかし、《吾》を《吾》としか名指し出来ない事もまた一つの厳然たる事実であって、その厳然とした事実を私は未だに受け入れる事が出来ずにゐる証左として、私は《闇の吾》の夢を何度となく見てゐるのかもしれなかったのである。

それにしても《闇》しか表象しない《吾》を夢で見ながら嗤ってゐる事は、私にとってはむしろある種の痛快至極な事でもあったのである。

ーー《闇》＝《吾》！

さて、闇の《吾》とは一体何であるのか改めて考へてみると、それは誠に奇妙な《吾》としか形容できない全くの無様な《吾》なのである。例へば私が私の事を《吾》と名指してゐる以上、それは何かしらの表象上の《面（おもて）》を持った何かに違ひないのであるが、しかし、私の意識の深層のところ、つまり、無意識のところでは《吾》は《面》のない闇でしかないといふ事なのかもしれなかったのである。問題はその事をこの私が持ち堪へられるかといふ事なのかもしれなかったが、《闇の吾》の夢を見て嗤ってゐる処を見ると、《吾》が闇でしかない事を私は一応納得し、而も《闇の吾》を楽しんでゐるのは間違ひのない事であった。

其処で一つの疑念が湧いて来るのである。

ーー夢の中での《吾》とは一体何であるのか？

更に言へばそもそも夢は私の頭蓋内の闇で自己完結してゐるものなのであらうか、それとも夢見の私は外界にも開かれた、つまり、この宇宙の一部として《他》と繋がった《吾》として夢といふ世界を表象してゐるのであらうか。仮に夢が私を容れる世界といふ器として表象されてゐるのであるならば夢もまた世界である以上、《他》たる外部と繋がった何かに違ひないと考へるのが妥当である。換言すると、夢見中の私は無意識裡に《他者》、若しくは《他》と感応し、若しくは共鳴し、更に言へば《他者》の見てゐる夢の世界を共有し、若しくは《他者》の見てゐる夢に私が出現し、もしかすると《他者》の夢を私も見てゐるのではないかといふ疑念が湧いて来るのである。つまり、夢を見て

ゐるのが私である保証は何処にも無いのである。

――これは異な事を言ふ！

といふ反論が私の胸奥に即座に湧き出るのであるが、しかし、よくよく考へてみると、夢が私のものである保証は何処にも無い、つまり、夢といふ《他》との共有の場に私が夢見事訪ねると考へられなくもないのである。

ここで知ったかぶりをしてユングの集合的無意識や元型など持ち出さないが、しかし、それにしても私が夢の事を思ふ時必ず私は「夢を《他》から間借りしてゐる」といふ感覚に捉はれるのは如何した事であらうか。この感覚は既に幼少時に感じてゐたものであるが、私が夢を見るときに何時も朧に感じてゐるのは《他》の夢に御邪魔してゐるといふ感覚なのである。この感覚は如何ともし難く、私に夢への全的な没入を何時も躊躇はせる原因なのだが、私は夢を見てゐる私を必ず朧に認識してゐて、「あ、これは夢だな」と知りつつ或る意味第三者的に私は夢を見てゐるのであった。

――ちぇっ、また夢だぜ。

かう呟く私が夢見時に必ず存在するのである。これは夢を見るものにとっては興醒め以外の何ものでもなく、現実では因果律に縛られて一次元の紐の如く束縛され捩じり巻かれてゐた時間がその紐の捩じりを解かれ、あらゆる事象が同位相に置かれたかのやうに同時多発的に出来事が発生する、或る種時間が一次元から解放された奇妙奇天烈な世界が展開する夢において、所謂《対自》の《吾》が私の頭蓋内に存在する事は、最早夢が夢である事を自ら断念する事を意味し、其処では深深と呼吸をしながら深深と夢に耽溺する深い眠りの中で無意識なる《吾》が出現する筈の夢世界は、夢ならではの変幻自在さを喪失してをり、その当然の帰結として、私の眠りは総じて浅いのが常であった。つまり、私の夢は因果律からちっとも解放されずに、それは多分に覚醒時の表象作用に似たものに違ひないのである。

さて、其処で《闇の夢》である。私は《闇の夢》を見てゐる時、稀ではあるが深い深い眠りに陥る時がある。それはこんな風なのである。何時もの様に私は夢を見てゐる私を朧に認識しながら、私は一息深深と息を吸い込むと徐に闇の中へと投身するのである。それ以降は《対自》の《吾》は抹消され、私は意識を失ったかの如く《闇の夢》の中に埋没するのであった。最早さうなると何かを表象してゐる夢ならではの正に夢を見てゐるかどうかは不明瞭となり、《闇の夢》の中では無意識なる《吾》が夢世界に巻き込まれながら、因果律の束縛から解かれた、所謂《特異点》の世界の《亜種》を疑似体験してゐる筈なのである。

夢は因果律の成立しない世界が存在する、つまり、《特異点》の世界が存在する事を何となく示唆するもので、私の場合それは《闇の夢》なのであった。例へば、《存在》は絶えず変容する事を世界に強要され、世界もまた変容する事を《物自体》に強要されてゐると仮定すると、《存在》は夢を見るように《物自体》に仕組まれてゐると看做せなくもないのである。つまり、《存在》する《もの》全ては夢を見、換言すれば《存在》はその内部に因果律が成立しない《特異点》を隠し持ってゐると仮定できなくもない、更に言

へば、《存在》は《特異点》を必ず持ってゐると看做す事が自然な事に思へなくもないのである。

ところが、私が《闇の夢》を見るのは誠に誠に稀な事なのであるが、一方で、その稀な《闇の夢》を見ながら夢で私が闇を表象してゐる事を睡眠中も朧ながら自己認識してゐる私は、秘かに心中では、

ーーぬぬ！　《闇の夢》だ！

と、快哉の声を上げてゐるのもまた一つの厳然たる事実なのであった。これは大いなる自己矛盾を自ら進んで抱へ込む事に違ひなく、これは私自身本音のところでは困った事と思ひながらも、その大いなる自己矛盾に秘かにではあるが快哉の声を上げる私は、その大いなる自己矛盾を抱へてゐる事に夢見の真っ只中では全く気付ず、ちらりとも秘かに快哉の声を上げてゐる自身が大いなる自己矛盾の真っ只中にある事を何ら不思議に思はないのであった。ところで、その大いなる自己矛盾とは何かと言へばその答へは簡単明瞭である。それは無限を誘ふであらう闇に対して、私はその闇を《吾》と名指して無限へと通じてゐるに違ひない闇を、恰も《吾》といふ有限なる《もの》として無意識に扱ってゐるのである。ところがである。此処で $f(x)=1/x$ は $x=0$ のとき発散すると定義される《特異点》を持ち出すと、有限なる《一》が恰も無限大なる《8》を抱へ込む事が可能な、或る種の倒錯した無限と言へば良いのか、その無限をどうしても誘ふ《発散》した状態の《一》たる《吾》といふ摩訶不思議としか形容の仕様がないそんな《吾》が、此の世に《存在》可能である事を、私が《闇の夢》を見る事は示唆してもゐるのである。つまり、《一》なる《吾》が《特異点》をその内部に隠し持てば、私が無限を誘ふ闇に対して《一》なる《吾》と名指ししても《発散》可能な《吾》ならば、換言すれば《8》を抱へ込む事すら可能な《吾》ならば、或る意味無限を誘ふ闇を有限なる《吾》と名指す事は至極《自然》な成り行きなのである。

多分、無意識裡にはその事を確実に感じ取ってゐたに違ひない私は、その日、《闇の夢》を見ながら、

ーー《吾》だと、わっはっはっはっ。

と嗤へたに違ひないのである。また、さうでなくては闇がずっと闇のままであったその夢を見て、嗤へる道理がないのである。

しかし、闇を《吾》と名指す事には、大いなる思考の飛躍が必要なのもまた事実である。其処には恰も有限なる《吾》が無限を跨ぎ課(おほ)したかの如き《インチキ》が隠されてゐるのである。また、その《インチキ》が無ければ、私は闇を《吾》と名指す事は不可能で、更に言へば、闇を見てそれを《吾》と名指す覚悟すら持てる筈がないのである。

この《インチキ》は、しかしながら、此の世が此の世である為には必須条件なのでもある。つまり、《特異点》といふ有限世界では矛盾である《もの》の《存在》無くして、此の世は一歩も立ち行かないのである。有限な世界に安住したい有限なる《存在》は、一見してそれが矛盾である《特異点》をでっち上げて、その《特異点》の《存在》を或

る時は腫れ物に触るが如く《近似》若しくは《漸近》といふこれまた《インチキ》を用ゐてその《災難》を何となく回避し、また或る時は、《特異点》が此の世に《存在》しないが如く有限なる《もの》が振舞ふ事を《自由》などと名付けてみるのであるが、それでも中にはこの《自由》が《特異点》の一位相に過ぎぬ事に気付く《もの》がゐて、運悪く此の世の《インチキ》に気付いてしまったその《もの》は《絶望》といふ《死に至る病》に罹っては、

ー《自由》とは、《吾》とは何だ！

と、世界に対して言挙げをし、己に対して毒づくのである。さうして《死に至る病》に罹った《もの》は更に此の世にぽっかりと大口を開けた陥穽を《特異点》と名付けて封印する事を全的に拒否するが故に、更なる《絶望》の縁へと自ら追ひ込むしかないのである。しかしながら、さうする事が唯一此の世に《存在》した《もの》の折り目正しき姿勢に外かならないのもまた確かな筈である。つまり、《存在》する《もの》は、絶えず此の世の陥穽たる《特異点》と対峙して己自身を嘲笑するのが娑婆を生きる《もの》の唯一筋が通った《存在》の姿勢に違ひないのである。

ところが、一方で、此の世に《存在》する《もの》は絶えず此の世にぽっかりと大口を開けた《特異点》を私事として《吾》の内部に抱へ込む離れ業を何ともあっけなくやり遂げてしまふ《もの》なのでもある。また、さうしなければ、《存在》は一時も《存在》たり得ぬのである。

頭蓋内一つとっても其処は闇である。私の内部は《皮袋》といふ《存在》の在り方をするが故に全て闇である。そして、その闇に《特異点》が隠されてゐても何ら不思議ではなく、否、むしろ《皮袋》内部に《特異点》を隠し持ってゐると考へた方が《合理的》で至極《自然》な事なのである。さうして、更に更に更に更に《吾》が《吾》なる《もの》を突き詰めて行くと、内部は必然的に超えてはならぬ臨界をあっさりと超えてしまふものであるが、その臨界を超えると《外部》と相通じてしまふ底無しの穴凹を《吾》は見出し、《内界》＝《外界》といふ摩訶不思議な境地に至る筈である。そして、それが娑婆の道理に違ひないのである。仮にさうでないとしたならば、私が外界たる世界を表象する事は矛盾以外の何ものでもなく、また、夢を見る事で其処に外界たる世界を表象する不思議は全く説明できないのである。

そもそも《吾》を嗤ふ《吾》は、さうとは知らずにそれは無意識の事だとは思ひたいのであるが、結局のところ、《吾》に対しての根深き侮蔑がその根底には厳然と《存在》してゐるのは確かなやうである。つまり、《吾》は倦む事を知らずに只管《吾》を嗤ひ侮蔑するやうに生まれながらに創られてしまった《存在》に過ぎぬのかもしれぬのである。更に言へば、多分に《吾》たる《もの》は絶えず《吾》を侮蔑してゐないと不安な《存在》に違ひないのである。では何故《吾》は絶えず《吾》を侮蔑してゐなければ不安な《存在》として此の世に在るのであらうか。多分、それは《主体》に対して慈悲深き神にも、将又（はたまた）、邪悪な邪鬼にも変幻するこの宇宙若しくは世界若しくは《自然》と呼ばれ

るその変幻自在なる百面相を相手に《存在》する事を余儀なくされてゐる故にであらうと思はれる。しかし、頭蓋内の闇は宇宙全体をも更には無限をも容れる器と化す事も可能な《五蘊場》なのである。するとこんな問ひが自身の胸奥で発せられるのである。

ーー宇宙における想像だに出来ぬ諸現象は果たして《吾》の頭蓋内の闇たる《五蘊場》ーー私は頭蓋内の脳といふ構造をした頭蓋内の闇を《五蘊場》と名付けてゐるーーに浮かぶ形象を遥かに超えた《もの》なのか？　つまり、この宇宙は本当に《吾》の頭蓋内の闇たる《五蘊場》に明滅する形象若しくは表象を超え出る事が可能なのであらうか？

すると、

ーーへっ、宇宙の諸現象と《皮袋》たる《一》者として《存在》する《吾》の頭蓋内の闇たる《五蘊場》に明滅する《もの》を比べる事自体無意味だぜ。

といふ自嘲が私の胸奥で発せられるのであるが、しかし、どちらも《吾》を超えるべく足掻くやうに創られてしまった事は紛れもない事実であって、更に言へば、遁れやうもないその事実は、此の世に《存在》するあらゆる《もの》たる《主体》に刃の切っ先が首に突き付けられてゐるやうに突き付けられてゐるのは間違ひないのである。そして、それは私の場合は《闇の夢》として象徴的に表はれてゐるのかもしれないのである。

そもそも「闇」を夢で見て、それを《吾》と名指して嗤ってゐる《吾》とは一体全体何なのであらうか。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

此の時、《吾》は《吾》をすっかり忘失してしまってゐるのかもしれない。否、《吾》は、あり得べき《吾》と余りに違ふ《闇の吾》を見出してしまったが故にーー一方で其処には多分に《吾》が予期してゐた筈の《闇の吾》がゐるのであるがーー己の内から湧いて来て仕様がない寂漠とした感情の尽きた処では最早嗤ふしかないどん詰まりの《吾》を見出してしまったが故に、《吾》は《闇の吾》を嗤ってゐる筈である。

さて、其処でだが、《闇の吾》以上に的確に《吾》といふ《もの》を表象する《もの》が他にあるのであらうか。

ーー分け入っても　分け入っても　深い闇。

種田山頭火の有名な「分け入っても　分け入っても　青い山」といふ一句を捩るまでもなく、《吾》とは何処まで行っても深い闇であるに違ひない。その《吾》の当然の姿である《闇の吾》が《吾》として《吾》の前に現はれたのである。当然ながら《吾》は腹を抱へて嗤った筈である。否、最早どん詰まりの《吾》は其処では嗤ふしかったのである。

尤も其処には《吾》に絶望してゐる《吾》といふ《存在》を見出す事も可能であるが、既に夢で《闇の吾》を夢見てしまふ《吾》は、《吾》にたいして何《もの》でもないと断念してゐる一方で、また、何《もの》でもあり得るといふ自在なる《吾》を、《吾》は、《闇の吾》を《吾》と名指す事で保留して置きたい欲望を其処で剥き出しにしてゐるのである。闇程《吾》を明瞭に映す鏡はないのである。つまり、私が《闇の夢》を見ながら

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と嗤ってゐるのは、何《もの》にも変化出来る《吾》を其処に見出して悦に入ってゐるのかもしれぬ、いやらしい《吾》を嘲笑してゐるに違ひないのである。そもそも《吾》とは何処まで行っても《吾》であるいやらしい《存在》なのである。

ーーしかし、《吾》は《吾》以外の何《もの》になり得るといふのか？

　といふ反論じみた嘲笑が再び私の胸奥で発せられるのであるが、《吾》の事を自発的にそれは《吾》であると嘯くしかない《吾》は、尤も一度も自発的に《吾》＝《吾》を受け入れた事はなく、何時も受動的に《吾》なる《もの》を《吾》として受け入れるのである。それは諸行無常の世界＝内に《存在》する《もの》の当然の有様で、世界＝内に《存在》する以上、つまり、絶えず《吾》を裏切り続ける形で《吾》の現前に現はれる《現実》を前にして、《吾》はあり得た筈の《吾》を絶えず断念しながら《吾》を尚も保持しつつ、此の《吾》を容赦なく裏切り続けて已まない諸行無常の世界の中で世界に順応する外ないのである。そして、その《現実》での憤懣が《闇の吾》となって私の夢に現はれるに違ひないのである。

　そもそも《吾》とは《吾》に侮蔑されるやうに定められし《存在》なのであらうか？例へば自己超克と言へば聞こえはいいが、詰まる所、その自己超克は絶えざる自己否定が暗黙の前提として含意されてゐるのであるが、《吾》として此の世に《存在》した《もの》が仮令それが何であれ此の世に《存在》しちまった以上、絶えざる自己否定は《理想の吾》へと近づくべく、つまり、《理想の吾》に漸近的にしか近づく術がない《吾》は、《理想の吾》を追ひ求めずにはゐられぬどうしやうもない欲求が、遂には《吾》の内奥で蠢く底無しの欲望と結び付いて、自己超克といふ名の下に、結局は《理想の吾》が厳然と君臨する故に《吾》が《吾》を滅ぼさずにはゐられぬまでに《吾》は《吾》を追ひ詰めずにはゐられぬ《もの》なのである。さうして自己超克を見事に成し遂げた《もの》のみ生き延びられるこの残酷極まりない自己超克といふ宿命を負ってゐる《吾》は、《吾》をこのやうにしか此の世に《存在》させない摂理を呪ふ事に成るのである。

ーー自同律の不快！

　《吾》の存続する術を手探りし己の内奥をまさぐってゐた《吾》をかう言挙げした先達に埴谷雄高がゐるが、彼もまた、此の宇宙を悪意に満ちた何かしらの《もの》としてこの宇宙の摂理を呪ってゐるのである。

ーーぷふぃ。

　その嗤ひ声にもならぬ、それでゐてどうしても息が肺から吹き出て已まないその

ーーぷふぃ。

といふ嗤ひ声を埴谷雄高の畢生の作品「死靈（しれい）」の登場人物達は不意に発するのであるが、

その

ーーぷふぃ。

といふ嗤ひ声は、既に《吾》といふ己の《存在》を呪ひ、また此の宇宙をも呪った末に

嗤ふ事を忘失してしまった《吾》が、やっと此の世に噴き出せた、つまり、辛うじて嗤ひ声となって声を発せた《吾》の無惨な姿が其処には現はれてしまってゐるのである。その埴谷雄高の、

ーーぷふぃ。

とは違って、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、《闇の夢》を見て眠りながら嗤ってゐた私は、その《闇の夢》に《吾》の無様な姿を見たと先に言ったが、私にとって闇は多分に見る者の状態によって様々に表情を変へる能面の如く作用してゐるに違ひないのである。

例へば能面のその表情の多彩さは、見者たる己の内奥と呼応してその状態を忠実に能面の面が映すからであるが、私にとってその内奥を忠実に映すのは先にも述べたやうにそれは闇なのである。私は独りそんな闇を、

ーー影鏡存在。

等と名付けて、瞼を閉ぢれば何時如何なる時でも眼前に拡がる闇と対峙しながら、果てしない自問自答の渦の中に呑み込まれ、最早其処から抜け出せぬやうになって久しいが、瞑目しながらの自問自答はひと度それに従事してしまふと已めようにも已められぬ或る種の自意識の阿片であるに違ひないのである。その瞑目し、瞼裡（まぶたり）に拡がる闇に己の内奥を映しながら自問自答の堂堂巡りを繰り返し、挙句の果てには問ひの大渦を巻く、その底無しの深淵にひと度嵌り込むと、私は、にたりと、多分他人が見ればいやらしいにたり顔をその顔に浮かべてゐるに違ひない事に最近気付いたのである。つまり、私は瞑目し瞼裡の闇と対峙してゐる時は、必ず嗤ってゐるのに最近になってやっと気付いたのである。そんな時である。眠りながら嗤ってゐる私を見出したのは。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

しかし、それにしても《闇》とは摩訶不思議で面妖なる《もの》である。何《もの》にも変容するかと思へば、眼前にはやはり瞼裡の《闇》のまま《存在》してゐて、相変はらず《闇》は《闇》以外の何《もの》でもないのである。尤も《闇》は多分に頭蓋内の《闇》、即ち《五蘊場》に鎮座する脳といふ構造をした《場》が作り出した或る種の幻影と思へなくもないのであり、それは光が干渉する《もの》なのでその結果どうしても発生してしまふ《闇》を認識するのに、つまり、光の濃淡を認識する仕方として《五蘊場》が《闇》を作り出した事は、これまた多分に《吾》たる《主体》の《存在》の有様に深く深く深く関はってゐるのは間違ひないのである。さうでなければ、私が夢で《闇の夢》なぞ見る事は不可能で、将又《闇の夢》に《吾》を見出してしまった無惨な《吾》を嗤へる《吾》が私の《五蘊場》に《存在》する事なぞ、これまた不可能なのである。そして、《異形の吾》と私が呼ぶ哲学的には「対自存在」に相当するその《異形の吾》たる《吾》は当然の帰結として《吾》に無数に《存在》する筈で、さうでなければ《吾》は独りの《吾》の統一体としての有様は不可解極まりない事態に陥り、それは例へば、独りの人

間が細胞六十兆個程で成り立ち、しかしながらその六十兆の細胞は全てが《生》ではなく、多くの細胞は自死、即ちApoptosis(アポトーシス)の位相に今現在もある事が不可解極まりない事になってしまふのである。《生》とは、詰まる所、《生》と《死》が等しく《存在》する摩訶不思議な現象の一つに違ひないなのである。

それにしても夢において闇を形象するといふ曲芸、否、《インチキ》を堂々と成し遂げてしまって

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、自嘲の嵐の中で

ーーそれは至極当然だ。

といった態度で恰も泰然自若を装ひ嘯くその《吾》は、その実、闇そのものを訝しりながらも途轍もなく偏愛して已まないのも、これまた厳然とした事実として自覚してゐる何ともふてぶてしい私は、闇を《物自体》として仮初にも仮象してゐるのかもしれなかったのである。つまり、

ーー此の世の根本は闇である。

と、何かを達観した僧侶の如く己を偽装したいが為に私は、夢でも《闇の夢》を、つまり、《闇》の虜と化した何《もの》かに変化し果(おほ)せてしまって、それは、また、恰も木の葉隠れの術の如き忍法にも似た《私》の隠れ蓑になってゐる可能性が無くもないのであった。その証左に

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、夢の中の私はその《闇の夢》たる《吾》を形象して、無意識裡に私自身から私が死ぬまで、否、私が夢を見なくなるまで永劫に隠し果したい醜悪極まりない《異形の吾》を《闇の夢》に隠してゐるのは間違ひなく、その氷山の一角として、若しくはその証左として、《夢》となって私の眼前に現はれる《闇の夢》は、大概何かに変容するのであった。そして、私はといふと、浅い眠りの中で見る《闇の夢》が何かに変容するのを何時も待ち構へてゐて、大抵は《闇の夢》は《世界》へと変容し、夢は夢見中の私の眼前にその可視可能な《世界》となって拡がるばかりの何の変哲もない《もの》へと変容を遂げるのであった。斯様に《闇の夢》は大概《世界》へと変容はするが、尤も、何かの具体物、例へば、人間や動物などの創造物たる《もの》への変容は稀であり、それは多分に《吾》によって《吾》の本質の尻尾を捕まへられるのを極度に嫌ひ何としても私に私の本質が見破られる事を避ける《インチキ》をする事で、《吾》と夢の中で対峙する事態を回避してゐるのも間違ひのない事であった。そして、その《闇の夢》に隠されてゐる《もの》の一つに《死》の形象が《存在》するのは確かで、もしかすると私は、《死》といふ《もの》が無上の恍惚状態であるかもしれぬ事を、何となく《闇の夢》が醸し出す雰囲気から無意識裡にでも感じ取ってゐたのかもしれなかったのである。其処で、

ーーへっ、《死》が無上の恍惚？

といふ半畳を《吾》が《吾》に対して入れる自己矛盾に自嘲するでもなくはないのであ

コメントの追加 [HS1]:

るが、しかし、仮に《死》が無上の恍惚状態の涯に《存在》する何かであるならば、《吾》が《吾》に問ふ自問自答といふ《吾》における「阿片」たるその問ひ掛けの源が《死》といふ無上の恍惚状態から発してゐる《存在》の欠くべからざる必須の《もの》の如く、換言すれば、《存在》が《存在》であり続けるには、何としても必要な糧が《死》の無上の恍惚状態との仮定に立てば、成程、細胞六十兆程の統一体として《生きてゐる》私の個々の細胞の多くは、しかしながら自死してゐる事態を鑑みれば、《死》の無上の恍惚状態といふ事態が不思議と納得出来てしまふのも、また、私にとっては厳然とした事実なのであった。

さて、其処で、私は、不意に腐敗Gas(ガス)で腹がぱんぱんに膨れ上がり、どろりと目玉が眼窩から零れ落ち、彼方此方で腐敗して肉体が欠落し白骨が剥き出した私の《死》の形象が脳裡を過る刹那に時々遭遇するのであるが、しかし、現代では死体は故意に遺棄されるか孤独死をしなければ腐敗するに任せる事はなく、小一時間程の焼却で火葬され、さっきまで死体であった《もの》が白き骨の残骸に劇的に変化を遂げる、否、焼却といふ激烈な化学反応によって《死体》を無機物へと無理矢理還元させる現代において、私の《死》の形象は、妄想以外の何《もの》でもないのであったが、尤も、私が徐に深々と一息吸ひ込み《闇の夢》へと投身した時の深い眠りの時に見てゐるであらう夢は、もしかすると私の腐乱した《死体》との出会ひでしかないのかもしれぬ可能性も無くはないのであった。そして、私が《闇の夢》の中に隠してゐるのが《死》の無上の恍惚状態であるならば、私は、私の《死体》が時の移ろひと共に腐乱して行く《吾》の醜悪な、しかし、《自然》な姿を凝視しながら、即自、対自、そして脱自を繰り返しながら、或る時は《吾》は《吾》と分離した《異形の吾》として、また或る時は眼前に横たはる《吾》の腐乱した《死体》と同化しては、この上なく《死》の無上の恍惚状態を心行くまで堪能し尽くす《快楽》へと《吾》は身投げをし、更にはその恍惚状態の《吾》から幽体離脱しつつも、《吾》は尚も恍惚状態のままでゐる大いなる矛盾の中で絶えず《吾》である事を強制された《存在》として、《吾》を《闇の夢》が生んだ更なる夢の奥深くに《吾》を投企してゐるのかもしれなかったのである。

死んで腐乱してゐる《吾》の死体を形象せずにはをれぬ、その《吾》のおかしな状況を鑑みると、《吾》が腐乱する死体として形象するのは、多分、《吾》が《生》の限界と、それと同時に《生》の限界を軽々と飛び越える《死》への跳躍を経て《超越》してしまふ《吾》、つまり、《生》と《死》の《存在》の在り方を《超越》する《吾》と名指せる何かへの仄かな仄かな期待が其処に込められてゐるのではないかと訝しりながらも、ーーさうか。《吾》からの《超越》かーー。

と、不思議に《超越》する《吾》といふ語感に妙に納得する《吾》を見出す一方で、

ーーはて、《吾》は《吾》に何を期待してゐるのか？

と、皮肉な嗤ひとともに《吾》を自嘲せずにはをれぬ私は、《超越》という言葉を錦の御旗に《存在》ににじり寄るれるとでも考へてゐるのか、

ーー腐乱し潰滅し往く《死体》たる《存在》のその頭蓋内の闇には、尚も、《吾》を認識

する意識ーー意識といふ言葉には違和を感じるので、それを魂と呼ぶがーーその意識若しくは魂が尚も脳の腐乱し潰滅し往く《吾》の頭蓋内の闇には確かに《存在》する筈だ！
と、考へると同時に、
ーー《生者》が《生者》の流儀で《存在》に対峙するのであれば、《死者》は《死者》の流儀で《存在》に対峙するのかもしれぬ。
と、無意識裡に、若しくは「先験的」に私は《生》と《死》に境を設けてしまふ単純な思考法若しくは死生観から遁れ出られずそれに捉はれてしまってゐる事を自覚しつつも、《生》の単純な延長線上に《死》は無いと、そして、また、私といふ生き物には、《死》は《生》が相転移し、全く新しい事象として《存在》する何かであると看做す「思考の癖」がある事を自覚しながらも、
ーー然り。
と、何の根拠もないのに不敵な嗤ひを己に対して浮かべながら、《生》から《死》へと移行するその《存在》が相転移する様に、もしかすると《存在》の未知の秘密が隠されてゐるかもしれぬと、私の頭蓋内の闇たる五蘊場に明滅する表象を浮かぶままにしながら茫洋とその《吾》の頭蓋内の闇たる五蘊場を覗き込むのであった。
……

ーーさて、《闇の夢》を見ざるを得ぬ《吾》は、其処に未だ出現せざる未知なる何かを隠し、それがほんの一寸でも姿を現はすのをじっと待ってゐるのであらうか？
と、不意に発せられた自問に、私は私が《闇の夢》を見るのはもしかすると、世界＝内＝存在たる《吾》の全否定の表はれではないかと訝しりながらも、
ーーそれは面白い。
と、独りほくそ笑んでは
ーー私が《闇の夢》を見るのは、もしかすると《吾》は勿論の事、全世界、つまり、森羅万象の《存在》を無意識裡では全否定して、夢の中だけでも《存在》が、その見果てぬ夢たるこれまでの全宇宙史を通して《存在》した事がない未知なる何かが《闇》には尚も潜んでゐるに違ひないと看做してゐるのではないか？
と、私の《闇》への過剰な期待を嗤ってみるのであるが、しかし、《闇の夢》を見ながらーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。
と嗤ってゐた私を思ふと、私は、やはり、《闇》に未知なる何かを表象させようと《闇の夢》に鞭打ち、《闇》が未知なる何かに化けるのをずっと待ち望んでゐたと考へられなくもないのであった。
ーー《吾》は、多分、これまでその《存在》を想像だにしなかった何か未知なる《もの》の出現を、Messiah(メシア)の出現の如くにあるに違ひないと《吾》は《吾》といふ《存在》にじっと我慢しながら、確かにその未知なる何かたる「Messiah」を待ち望んでゐる。
ぢゃなきゃあ、私は「《吾》だと、ぶはっはっはっはっ」などと《吾》が夢で見る《闇の夢》に対して嗤へる筈などないに違ひないではないかーー。

成程、私は、多分、《吾》のどん詰まりに私を私の自由意思で私を追ひ込み、遂に《闇の夢》を見るに至ったに違ひないのである。つまり、此の世の森羅万象を全否定したその結果として、また、その途上として私は《闇の夢》を見、その《闇》にこれまで《存在》が想像だにした事がない未知の何かを出現させる事を無理強ひしつつも、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と《闇の夢》に対して嗤ふしかない私は、私において何か未知なる《もの》の形象の残滓が残っていないかと私の頭蓋内の闇たる五蘊場を弄(まさぐ)っては何も捉へられないその無念さを心底味はひながら、

ーー何にも無いんぢゃ仕方ない……。

と、私の頭蓋内の闇たる五蘊場にその未知なる何かの形象を何としても想像する事を己に鞭打ちやうにして私は《吾》に課してゐたに違ひないのであった。

さて、私が、夢で見る《闇の夢》の深奥の深奥の深奥の深奥は、果たして、光に満ちた輝く世界なのであらうか、などと想像してはみるのであるが、《光》と《闇》といふ単純な二分法でしか《もの》を考へられぬ己を、

ーー未だ未だ甘ちゃんだな。

と、自嘲しながらも、私は、心の何処かでは《闇の夢》の深奥の深奥の深奥は、光に満ちてゐてほしいと望んでゐた事も、また、紛れもない事実なのであった。

ーーそれでは、何故、私は《吾》の内奥に潜むであらう《吾》の五蘊場に《存在》するに違ひない《闇の夢》の深奥の深奥の深奥は光に満ちてゐなければならぬのか？

と、その事を不思議に思はなくもなかったのである。そして、それを、

ーー《特異点》！

と、名指しても、

ーーさて、虚数iを零で割った場合は、それはまた$\pm\infty$、若しくは$\pm\infty\times i$に発散するのか？

と、余りにも幼稚な疑問が浮かぶのであった。さてさて、困った事に私は、無限大、若しくは無限に、∞といふ記号を用ゐるのは、今のところ《存在》がその「現存在」を宙ぶらりんのまま、何事も決する事なく、《存在》が永劫に《存在》に肉薄、若しくはにじり寄る事を止揚し、《存在》が《存在》から逃げ果す為の《インチキ》の最たる《もの》と看做す悪癖があり、

ーーそろそろ《存在》は己を語るべく、数学の世界も複素数を更に拡張した、例へばそれを《杳数(えうすう)》と名付ければ、《特異点》や虚数$i\div$零を∞と表記しない《もの》を考へ出さなければならない。

などと、考へてみるのであるが、∞は、その論理からするりと摺り抜けて、相変はらず∞として厳然と《存在》する事を已めないのであった。

ーーしかし、《無限》は何としても《超越》しなければ《存在》の新たな地平は拓けぬ！

と、己に言ひ聞かせるやうにして、私は、尚も沈思黙考に耽ざるを得ぬのであった。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっ。

それは、多分に《存在》の新たな地平を拓く、若しくは《存在》のParadigm(パラダイム)変換が何時迄経っても出来ぬ私を嗤ってゐる事に外ならないとも思へて来るのであった。

ーー《吾》が何時迄経っても《吾》でしかない事は、最早、《存在》する《もの》全ての怠慢であって、《吾》が《吾》でしかない事は、侮蔑の対象でしかないのではないのか？

と、不意に私の内部の深奥のところから浮かぶその疑問は、あながち何の根拠もない出鱈目ではなく、もしかすると、《存在》の本質、即ち《物自体》を衝いてゐるのではないか、と看做してしまへば、私が、夢で見る《闇の夢》は、もしかすると、《特異点》をも8をも虚数iを呑み込んで恬然とした《もの》、即ち《杳数》が此の世に出現する為には何としても被らなければならぬ仮面なのかもしれぬと思はずにはゐられなかったのである。

ーーふっ、《杳数》、ちぇっ、つまり、《杳体》かーー。

それを《杳体》と名付けたはいいが、それが一体全体何を意味してゐるか皆目解からぬ未知との遭遇なのは間違ひないのであったが、しかし、《杳体》は、既に此の世に出現してゐて、《存在》は、《存在》自体を語り出すには、この《杳体》なる《もの》の《存在》を定義付けなければならぬ局面に、今現在、遭遇してゐるに違ひないと思へなくもないのであった。

ーー《闇の夢》が《杳体》の仮面？

私は、今のところ、《杳体》なる《もの》の《存在》について何ら確信めいた《もの》を持ち得、若しくは《存在》の物理的な事象が、まるで現在あるところの物理的なる事象とは全く別の《もの》へと相転移したかの如くに、自棄のやんぱちで「えいっ！」と一言の下に新たな《もの》たる《異＝世界》とそれを看做して、強引に8を発散から収束へとその持つ意味を逆転させてしまふ論理的な術など一切持ってゐなかったが、しかし、最早、《存在》はそれが何であれ《存在》において8が未だ仮初の記号に過ぎず、《杳数》なる《もの》を持ってして数字の拡張を敢へて試みなければ、《存在》は《存在》を一言も語れないのではないかといふ、或る種の予感めいた《もの》は、既に私にはあって、だが、虚数、つまり、英訳するとImaginary numberたるiをごくりと呑み込んでも平気の平左でゐられる《杳数》、これを仮に英訳すると、Obscurity numberとなるのでその頭文字を取って《杳数》単位をoとすれば、そのoなる《もの》が、例へば【「杳数oの二乗」＝虚数i】などと定義するなどして此の世に何となく異形の《もの》として《存在》してゐるのではないかと示唆が出来るのみであって、残念ながら今の私の能力では《杳数》若しくは《杳体》に、確たる具体的な姿形を思ひ描き与へる事は、それこそ杳としてをり、そして、未だ《杳数》並びに《杳体》にその《存在根拠》を与へられず仕舞ひなのであった。多分、その忌忌しい結果として、私は《杳体》なる《もの》の表象として《闇の夢》を見る外ない何とも歯痒い事態に陥ってゐて、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっ。

と、思はず《吾》を《吾》が嗤ふといふ、多分、此の世が《存在》する限りにおいて永

劫に続くのであらう堂堂巡りを繰り返す外ないどん詰まりに、私は、とっくの昔に追ひ遣られてゐるのは間違ひのない事であった。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっ。《闇の夢》が《杳体》？　ぶはっはっはっ。

ーーさて、《闇》は、光をも含めた森羅万象を呑み込み得るのか？　どう思ふ？

ーーさてね。それより、何とも摑み処のない自問を私の頭蓋内の《闇》たる五蘊場にひょいっと抛り投げてみたところで、何の反響も無い事は端から解かってゐる癖に、然しながら、どうしてもさうせずにはゐられぬ《吾》は、そして、また、五蘊場に絶えず無意味な問ひを絶えず投げ続けずにはゐられぬ《吾》は、ゆっくりと瞼を閉ぢて、その瞼裡のペラペラな《闇》に《吾》なる面影を映さうと躍起である事は、何を隠さうそれは休む間も無く絶えず私に起きてゐる自問自答しながらの大いなる自嘲に過ぎぬとしたならば、へっ、《吾》もまた皮肉たっぷりの《存在》だといふ事だ。

ーーふっふっ、《吾》において仮に《闇の夢》がそれ自体において瓦解したならば、《吾》はそれでも《吾》をして《吾》を《吾》と名指せるのだらうか？

と、既に私において《闇の夢》は《吾》を《吾》たらしめてゐる礎になり果せてゐるのもまた間違ひの無い事で、しかし、さうだとするとして、私はその頭蓋内の闇たる五蘊場へと直結する瞼裡の闇に映る《異形の吾》を仮象せずば、一時たりとも《吾》が《吾》である事はあり得ぬ程に、《吾》には「先験的」に《闇》を《吾》のうちに所持せず《生存》すら断念してしまふ羸弱な《存在》である事を自殺を例に出すまでも無く自明の事として、《吾》は《吾》の《存在》の所与の《もの》として《闇》が《存在》に組み込まれてをり、つまり、《闇》無くして《吾》は《存在》してゐないに違ひない《もの》なのは、間違ひのない事であった。

さうすると、《闇の夢》は私において、それはまさしく必然の《もの》に違ひなく、《闇の夢》こそが《吾》の確信、若しくは本質なのかもしれなかったのである。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

しかし、私は夢の中で見てゐるその《闇の夢》がそもそも《闇の夢》である事から、それを或る種の幻燈と看做してゐるはずで、《闇の夢》が自在に変容するその《闇の夢》が映す《もの》に、私は嬉嬉として喜びの声も、私が《吾》を嗤ふ中で確かに上げてゐる筈なのであった。尤も私は、《闇の夢》が映し出す《もの》全てに《吾》との関係性を見出して、それ故に嬉嬉として喜んでゐるのであったが、しかし、例へば私が夢で見るその《闇の夢》が《吾》とは全く無関係な《もの》、つまり、今のところ此の世にその《存在》が知られてゐない、例へば先に言った様に《杳数》をObscurity numberと英訳してその頭文字を取って《杳数》をoとすると、その《杳数》の如き未だ発見されぬ未知なる《もの》が《存在》する事で初めて《吾》と《闇の夢》の関係が曲芸の如く導き出されるとしたならば、困った事に、私にとって《闇の夢》は《吾》を侮蔑するのに最も相応しい代物だと言へ、《吾》と《闇の夢》が例へば《杳数》の《存在》を暗示するのであれば、私といふ《存在》は、やはり、私の手に負へぬ無と無限との関係と深い関係にある何かであった事は間違ひの無い事であった。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

それは、つまり、《闇》＝《吾》といふ至極単純な等式で表はされるに違ひない筈なのに、《闇》＝《吾》と白紙の上にさう書いた刹那、その《闇》＝《吾》といふ等式は既に嘘っぽくなり、更にそれをまぢまぢと眺めてゐると、

ーーそんな馬鹿な！

と、《闇》＝《吾》は完全に否定される事になるのが落ちなのである。

さうすると、《杏数》はそれ自体「先験的」に時間と深く結びついた何かであるかも知れず、また、時間を或る連続体の如く扱ふ事自体に誤謬があり、さうすると、そもそも時間とは、渦動運動だと看做す場合、その渦動する時間はほんの一時、連続体として此の世にカルマン渦の如く《存在》するが、しかし、例へば、時間を数直線の如く扱ふ、つまり、時間が微分積分可能な《もの》として、換言すれば、時間が移ろふ《もの》としてのみ、その性質を無理矢理特化させてしまふと、その時点で時間は「先験的」に非連続的な何かへと相転移を遂げた、詰まる所、微分積分が相当の曲芸技無しには全く不可能な何かへとその様態を変幻自在に変へる化け物として、または、《存在》に襲ひ掛かって来る時間は、その《物の化》の如き本質を剥き出しにするに違ひ無いと思へるのであった。

ところで、私が時折見るその《闇の夢》とは、潜在的に、私が忌み嫌ふ《無意識》なる《もの》と何らかの関係があると看做せなくもないのだが、《闇の夢》と《無意識》とを結び付けた処で、それは Libido(リビドー)とか死への衝動へと集約されちまふだけのそんな分析可能とも言へる夢の中で、《闇》と只管対峙する《吾》のそのそこはかとなく感じてゐるに違ひない恐怖心に思ひを致せば、《闇の夢》を精神分析や心理学の文脈で語った処で、この私が納得する筈もなく、

ーーだから、それで？

と、精神分析医か心理学者かに詰問するのが落ちなのである。

仮初にも、私が、《闇の夢》に対して或る恐怖心を抱いてゐるが故に、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、私は、《闇の夢》を前にして己を侮蔑せずには一時もゐられぬ、切羽詰まった状態にある事は今更言ふまでもなく、その根底の処では、私は、

ーー《闇》も何かへと変容せずにはをれぬ。

といふ先入見があるのは確かで、また、その先入見がないとすれば、《存在》としては失格の烙印を押された何かに違ひないのである。つまり、《存在》はそれが何であれ己が《存在》する事を、而も、死すべき《もの》として此の世に《存在》する事を余儀なくさせられた《もの》であれば、《闇》が何かへと必ず変容するといふ事を「先験的」に賦与された偏見に満ちた《存在》としてしか、《存在》は此の世に《存在》する事は不可能なのである。

例へば人間を例にすれば、母親の子宮内といふ《闇》では、子宮に通じた膣より挿入された男性の生殖器から放たれた精子と卵子が受精する事で、その《闇》の子宮内には

既に未来に《存在》するであらう《存在》の萌芽が《存在》する事から、此の世に《存在》する人間は誰もが《闇》を目の当たりすれば、その《闇》には何かが生み出され、そして、それが隠されてゐるか、その《闇》自体が何《もの》かへと変容する契機を含んだ何かなのである。

さて、そこで時空間を渦の Fractal と仮定すれば、カルマン渦の発生の仕方より渦とはそもそも非連続的に、つまり、一、二、三……と数へられる何かでありながらも渦を取り巻く外界とは連続的に繋がる奇妙な特性を持つ《もの》で、また、一つの渦が、それよりも小さな小さな小さな渦が蝟集して出来上がった《もの》であるとすれば、此の時空間の究極の処では非連続的な、つまり、飛び飛びの時空間が表象される筈で、その飛び飛びにしか《存在》しない時空間はといふと、《闇》の大海に浮かぶ小島と看做せなくもないのである。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、《闇の夢》を見る私のその如何にも高慢ちきな《存在》の仕方は、実の処、私が《闇》への途轍もない恐怖の裏返しでしかないかもしれぬのである。さうでなければ、私が《闇の夢》に対して、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

などと嗤へる筈がないのだ。其処には《闇》に《吾》といふ箍(たが)を嵌める事で、辛うじて《闇の夢》に対峙出来る、情けない《吾》が私の瞼裡の薄っぺらな《闇》にか、頭蓋内の《闇》たる五蘊場にかやっとの事で何とか棲息してゐるに過ぎぬ哀しい《吾》の実像があるに違ひないのであった。

そして、《闇の夢》の《闇》とは分離してゐる《吾》の《存在》を無理矢理にでもでっち上げて信じ込まなければ、私は、眠ったまま永眠する可能性がある以上、《闇》に隠されてゐるに違ひない《死》からその私が《存在》する限り遁走し続ける外なく、《闇》が私を映す影鏡といふ《存在》の仕方をぴたりと已めた刹那に、私は《死》に埋没する外なく、もしかすると、時が止まった時空間を永劫に漂流するかもしれぬ可能性がある事に自分でも吃驚しながらも、私は、尚も、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、《闇の夢》を嗤ひ飛ばしてゐるに過ぎぬ哀れな《存在》に違ひないのだ。更に言へば、先にちょこっと匂はせた《杳数》を例へば、oと表記できるとすれば、そのoを含んだ数式は《死》をも精緻極まりなく表記出来る、或る種魔術的な何かなのかもしれず、さうすると、《死》も数学的な論理で語られる何かへと変容してしまふに違ひないのであった。

さて、其処で、私が闇に対して抱いてゐた或る種の憧憬は、しかし、詰まる所、闇に対する恐怖心に根差した感情、つまり、或る種の怖い《もの》見たさといふ、《存在》に「先験的」に賦与された本能に近しい何かに違ひなく、私が《闇の夢》を前にして、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、哄笑する私といふ《存在》は、如何にも矛盾してゐる《存在》なのだと自覚せね

ばならない筈なのであった。しかし、何故に《吾》といふ《存在》が、元来、矛盾してゐるかは、これまた詰まる所、解からぬまま でありながら、私は自嘲するやうに、

ーー私の《存在》は矛盾してゐる。

と、言明すれば、《吾》は《存在》の責め苦から遁れられ、また、《吾》といふ《存在》は許されると、あざとく考へてゐる節もあって、また、そのあざとさがなければ、此の《存在》といふ得体の知れぬ《もの》に一時たりとも対峙出来ないと断定してゐるのもこれまた、否定出来ぬ事なのであった。

それ故にであらう。私が夢で《闇の夢》を見ては、その闇が何かへと変容して姿形のあるれっきとした《存在》へと変貌するその激烈なる変容の現場に立ち会ひたい欲があり、

ーー《吾》もまた変容す。

と、呪文の如くぶつぶつと呟きながら、その実、瞼を閉ぢて、眼前に拡がる薄っぺらな闇に無限を見出す振りをする、何かしら擬態する《存在》へと、つまり、闇に対して擬態する《存在》に己が為り得る願望すら抱いてゐるのが己に対して見え見えに見え透いてゐて、その瞼を閉ぢて眼前の薄っぺらな闇を見て、無限を思ふ錯誤を心の何処かで楽しんでゐる己を不意に発見すると、

ーーふっふっふっ。

と嗤って誤魔化すのである。

ところが、此処で先に触れてゐた《杳数》といふ浅墓な考へを持ち出して新たな数字の更なる拡張する概念を持ち込むと、此の眼前の瞼裡の薄っぺらな闇もまた一気に無限へと変容可能なからくりが《存在》し得るかもしれぬと、期待半分で自嘲しつつも、ところが、私が、本気で《杳数》の《存在》を信じてゐるのを知ると、私は以外にも吃驚して、その照れ隠しも兼ねながら、私は、多分、《闇の夢》を前にして、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、嗤ひ飛ばしてゐるに違ひないのであった。

さて、此処で、これまた先に述べてゐた事、つまり、此の世の時空が根源の処で飛び飛びの非連続的な有様であるかもしれぬと考へてみると、《存在》が孤独である事のその理由が解かるかもしれぬのであるが、しかし、此の世が飛び飛びの時空間によって成り立ってゐると考へる莫迦は、つまり、デカルトの時代ですらさうであった延長といふ《もの》をもってしての世界認識の一つの在り方とは相容れず、また、此の世の時空間が飛び飛びの非連続的な《もの》として表徴出来得た暁には、私は、此の世のアポリアは全て解決するかの如く考へてゐるのも哀しい事に、また、確かなのであった。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

《闇の夢》は、さて、此の瞼を閉ぢて眼前に現出する薄っぺらな闇と同様の《もの》と看做せるのか、看做せないのかは、現時点では、私には、しかし、如何とも言ひ切れぬのであった。

さて、闇は闇であれば全て同質な《もの》であるのかどうかは、考へるまでもなく、

不可であったが、それでも尚、闇は闇としてその闇に如何なる《もの》が呑み込まれてゐても闇である事に変はりはないと、例へば新たな数字《杳数》を導入する事で証明出来てしまふと、それはとても面白いと思ふのであったが、人間は既に《場》といふ考へ方で世界認識をしてゐるので、この闇とあの闇が《場》として認識すれば、それははっきりと違った闇、否、《場》である事は一目瞭然なのであるが、しかし、頭蓋内の闇、それを私は《五蘊場》と名付けてゐるが、その《五蘊場》と瞼を閉ぢた時に眼前に拡がる闇の区別は、今の処、ついてゐないのもまた、確かなのであった。

ーー闇の同質性か……。

と、瞼を閉ぢた薄っぺらな闇に明滅する数多の表象群は、さて、私が夢で見る《闇の夢》のその闇と何処かが似てゐる処があるのかと問はれれば、それは正しく、瞼を閉ぢて眼前に出現する薄っぺらな闇と、《闇の夢》の闇は、途轍もなく似通ってゐて、多分、その闇は異母兄弟の闇と言へなくもないのであった。

私は、《闇の夢》を見ながら、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、毒づいてはゐるが、しかし、覚醒時の私もまた、

ーー俺は、ちぇっ、俺か！

と、絶えず己に対して毒づき、自虐的に己自らが先頭に立って《吾》を査問、若しくは総括しながら責め立ててゐるのであった。そんな時、私は、やはり、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、内心ほくそ笑んでは、《吾》を責め立てる《異形の吾》を煙に巻くのを常としてゐたのであった。さうしなければ、《吾》の《五蘊場》に棲み付いて神出鬼没に出現しては、《吾》を責め立てるその《異形の吾》は、際限なく《吾》を責め立て続けるに違ひないのであった。

私は、既に幼少期に《吾》に対する違和、若しくは不信を、さうとは知らずに抱へ込みつつも、

ーー《吾》は《吾》だ！

と、呪文の如く唱へる如くに、何時も《吾》に対して感じてしまふ違和、若しくは不信を幼心でも

ーーこれは、唯、ぢっとしてやり過ごすしかない《危険》な《もの》。

といふ無意識裡の危機意識として私は感じてゐたやうで、幼児期に既に私を不意に襲ふその《吾》に対する違和、若しくは不信は、

ーーうわ〜〜ん。

と、突然何の前触れもなく泣き出す事で、その言葉に出来ずに堪らない感情をやり過ごしてゐたのであった。

そんな私は、当然の事、泣き虫で、多分、親にすれば、私が不意に泣き出す事に大いに困惑を感じてゐたのは間違ひなく、何を隠さう、当の本人が《吾》に対して一番当惑してゐたのであった。

多分に、その《吾》に対する違和、若しくは不信が、私が時折夢で見る《闇の夢》の淵源になってゐるのかもしれず、私は、無意識裡に《異形の吾》を闇で塗り潰しては、ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、その《闇の夢》の闇に対して、常日頃、《異形の吾》に《吾》といふ《もの》がどん詰まりへと追ひ込まれてのっぴきならぬ《存在》の恐怖とも言ふべきその思ひの丈を、或る種、侮蔑の念を込めて、腹癒せに《闇の夢》のその闇に浴びせ掛けるのであったが、その言は、

ーー《吾》、《吾》なる事を承服し難き《存在》なりや。

といふものなのであったが、その言は、或る種、《吾》に対して投げやりな言葉を《異形の吾》に宣告してゐると思へなくもないのであった。私は、それ程に《吾》が憎らしくて堪らなかったのが正直な処で、《吾》なる《もの》に底無しの深淵が《存在》してゐる事を、私に教へて呉れたのが、後年に出合ふ事となる、ドストエフスキイやエドガー・アラン・ポーやヰリアム・ブレイクや埴谷雄高や武田泰淳や何冊かの哲学書や物理学の専門書など、先達達が遺した数多の作品群なのであった。

多分に、《存在》は己に対する違和、若しくは不信に苛まれ、

ーー《吾》とは如何なる《吾》の事なりしや。

と、此の世に《存在》を出現させた《神》、若しくは此の宇宙の摂理に対して、絶えず、疑義の叫び声を、何に向かってか、上げて、さうやって、《吾》に潜む《異形の吾》を宥めすかして、現在に至ってゐるとも考へられなくもないのであった。つまり、《吾》が《吾》に対して疑義の念を抱くのは必然であって、能天気に己を全的に自己肯定出来る《存在》程、気色悪い《存在》はなく、さうすると、《吾》は絶えず、《異形の吾》に対して罵詈雑言を浴びせるのが、《吾》が此の世に《存在》する正しき作法に違ひないのであった。

しかし、それは私が《異形の吾》に対する形式的な作法に過ぎず、実際の処、私は、《異形の吾》の棲む処が、もしかすると私が夢で見る《闇の夢》ではないかと思ひ為し、その証左が《闇の夢》を前にして私は夢の中で、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、嗤ふ事で、私は私なる《存在》を自己承認してゐるのかもしれないのである。

先づ、私は絶えず、《吾》なる《もの》を疑ってゐるので、《吾》の自己承認は私においては、自己否定でしかなかったのである。

ところが、《吾》といふ《存在》は、全く私に認められてゐない事には絶えず憤懣を抱いてゐて、その私が《吾》に対して抱いてゐる自己否定と自己肯定の狭間で、私においてそれを何とか摺り合せて、最後は私において、共存させる術が見つかれば、私は何とか此の《世界》の中で、その摂理に対して従順になれるかも知れなかったのであるが、《吾》は否定と肯定に完全に引き裂かれたまま、其処に底無しの深淵を見、多分に、それが、《闇の夢》として、私の夢の中に出現してゐるのかも知れなかったと合点してゐるのであった。

それにしても《吾》はそもそも不運な《もの》であるといふのは確かであったのかも

しれない。つまり、《吾》は《吾》とは異なりながら《吾》であると名乗る《異形の吾》を絶えず抱へ込んでゐる事は、誰も同じ筈なのだが、此の《異形の吾》は、変幻自在で直ぐに《吾》にとって代わる事は、日常茶飯事で、そして、それが、《吾》が《吾》に対して大いなる不信を抱く契機となり、《吾》は絶えず疑心暗鬼の目を《吾》に向けて、最後は我慢が出来ずに《吾》に罵詈雑言を浴びせ掛けるのが、何時も繰り返し行はれる事なのであった。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

また、この私が夢に見る《闇の夢》は、多分に私自身の醜悪で厭らしい部分が凝縮してゐる筈で、それらを私に見せない為に夢は、《闇の夢》として私に現はれるのは間違ひない事であった。つまり、《吾》といふ《もの》を容れる器は、闇以外在り得ないといふのが私の率直な感想で、これはこれまでも何度も触れた事であったが、絶えず、自己肯定する《吾》も気色悪いのであったが、絶えず、自己否定する《吾》もまた同じく気色悪い《もの》で、頭蓋内の闇の脳といふ構造をした《五蘊場》で、Neuron の発火現象が絶えず起こって、私はその《五蘊場》に《吾》なる《もの》をもまた表象し、そして、自問自答といふ陥穽に落っこちて、其処から這ひ出す事もせずに恰も岩窟王の如くその陥穽から出る気配は全くなく、しかし、棲家としても一時も休まる事はなく、然しながら、絶えず、《吾》なる《もの》と対話をする至福の時間を知ってしまってゐる私は、何にでも変容可能な、それは無限といふ観念に何処か繋がっている《闇の夢》に出合ふ事を、多分に望んでゐたのもまた確かなのであった。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

《闇の夢》を前にして、何時も哄笑せずにはをれぬ此の《吾》とは、さて、何《もの》かと自らに問へば、自己が自己正当化するといふこの世で一番悪しき愚行を行ふ《吾》なのかもしれず、然しながら、善なる《吾》もまた《闇の夢》の中に或るひは《存在》してゐなくもないと思はれるのであった。そして、闇こそが《吾》を正確無比に映す鏡である事は先述したと思ふが、確かに闇は、《吾》を正確無比に映す鏡であって、不肖なる《吾》が仮に《闇の夢》に対峙してゐるのであれば、《闇の夢》は、そんな《吾》を映し出し、それ故に《吾》は、

ーー《吾》だと、ふはっはっはっはっ。

と、哄笑せずにはをれなかったのであったのもまた事実であらう。

さて、其処で、《闇の夢》は聾唖な《存在》なのかと言ふと、それは違ってゐて、《闇の夢》は絶えず私に語りかけ、謎を出し、そして、《吾》なる事を私に問ふのであった。そして、その度毎に《闇の夢》は水墨画の墨の如く濃淡が現はれ、そして、ぐるぐると渦を巻いてゐるのであった。

《闇の夢》が薄らとであるが、渦を巻いてゐる事に気付いたのは、しかし、つい最近の事なのであったが、それに対して、私の感慨は、

ーーやはりな。

といふものでしかなかったのである。つまり、《闇の夢》が渦を巻いてゐるといふ事は、

《闇の夢》にも私とは別の自律的な時空間のカルマン渦が《存在》し、それは詰まる所、《吾》とは決定的に違ふ《存在》として《闇の夢》が私の《五蘊場》に《存在》してゐる事を意味してゐるに違ひはないのである。つまり、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、《吾》が《闇の夢》を見た刹那、哄笑するのは至極当然の事で、元来が、別の《もの》である《吾》と《闇の夢》を一括りにして、《吾》として始末してしまふ事には無理があり、私は夢で《闇の夢》に対峙した時に、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と嗤ひ飛ばす事は、自然の成り行き上、至極自然の事で、然しながら、其処には大いなる矛盾が潜んでゐるのであるが、その矛盾を語る前に、《闇の夢》にはもしかすると《吾》を捕らへる罠が仕掛けられてゐて、《吾》は《闇の夢》を一瞥するだけで、その《闇の夢》が発する魅惑に惑はされ、ところが、《吾》はといふと一向にそれとは気付かずに《闇の夢》に《吾》は《吾》として映し出されてゐる、若しくは炙り出されてゐるのであるが、それを《吾》は《吾》の姿形とは露知らずに、《吾》は、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、哄笑し、《闇の夢》に映る《もの》が《吾》の異形の姿である事を端から否定してかかるその心理状態は、もしかすると夢の中だけの事で、そして、それが《闇の夢》を前にしてのお決まりの事なのかもしれなかった。

しかし、《闇の夢》が渦を巻いてゐるとなると、どうもこれまで《闇の夢》に対して抱いて来た印象は全て虚妄に過ぎず、《闇の夢》には《闇の夢》にのみ当て嵌まる摂理が《存在》する事は、最早、否定する事は出来ぬ事なのであった。

それでは、《闇の夢》の摂理はどんな《もの》なのかと問へば、

ーー解からぬ。

といふのが正直なところで、その外に思ひあたる《もの》など全くなかったのであった。

しかし、夢に《闇の夢》を見てしまふ私にとって、《闇の夢》はどう考へても《吾》を生け捕りにするとしか思へず、また、実際の処、《吾》は《闇の夢》にまんまと捕らへられてゐる事は事実であって、さうでなければ、私が、《闇の夢》を前に、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

などと、哄笑する筈はないのであった。しかし、其処には先にも言った通り大いなる矛盾が《存在》し、仮に《闇の夢》に《吾》が映ってゐれば、それは最早《闇の夢》ではなく、《吾》といふ姿形を持った何かを夢の中で見てゐるに違ひないのであるが、実際は、《闇の夢》は闇のままであり続けてゐるのであった。《闇の夢》を夢で見て、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、《闇の夢》に対して侮蔑してゐる《吾》が、大間抜けであるが、確実に《存在》し、そして、《闇の夢》は闇であり続ける事を論理付けて語るには、夢の中で私が己の事を《吾》と意識した刹那に《闇の夢》は闇へと一変し、そして、その《闇の夢》の中に消えたで

あらう《もの》の《存在》を暗示するといふ事で、一応論理的に語った事になるかもしれぬが、しかし、さうして論理付けて《吾》が《闇の夢》と対峙しながら、《闇の夢》には《吾》が映ってゐて、さうして、私は夢で《闇の夢》を見ては、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、哄笑してゐると考へた処で、結局は全てが曖昧模糊とした《もの》でしかなかったのである。

しかし、私が《吾》と看做してゐる《もの》が、果たして何なのかは、実際の処、幾ら煎じ詰めても私本人にすら解かる筈もなく、《吾》といふ《存在》の正体を知ってゐる《もの》は《神》を除けば、全宇宙史以来、《存在》した例がなく、私が《闇の夢》を見て、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、哄笑してゐる処を鑑みれば、《吾》はもしかすると闇かもしれぬといふ事は、《吾》の正体を或るひは言ひ得て妙なのかもしれなかったのである。

ーーそれにしても、私は、何故に《闇の夢》を見る次第に至ったのであらうか。

この問ひは煎じ詰めれば煎じ詰める程に、私が闇を此の世で一番愛してゐるといふ結論をもって納得せずにはをれぬ事に気付き、そんな時は、

ーーふっ。

と《吾》に対して侮蔑の自嘲を送っては、闇に魅惑され、耽溺する事に、最早、虜になってしまった私は、闇から遁れる術などもう残されてないと観念するしかないのであった。

それでは、私は、何故にこれ程までに闇を偏愛してゐるのかと、その淵源を辿ってみると、その淵源はどうやら私が受胎した刹那の世界の闇への郷愁が、私をして闇を愛して已まないのではないかと思へなくもないのであった。

それは、多分に、将来、私に為るべく母親の子宮内で受精した受精卵が、受精の刹那に不意に垣間見てしまふ闇と言へなくもなく、また、私の闇への偏愛は、母親の胎内で発生、若しくは出現してしまった《存在》の根本を問ふに相応しい闇で、私が夢で《闇の夢》をしばしば見るのは、絶えず私が原点回帰を行ってゐて、其処で炙り出される《吾》の無様さが、私をして、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、《闇の夢》、否、《吾》を見て嘲笑せずにはをれぬ私にとって、その嘲笑は此の世に《吾》が《存在》するといふ事の悲哀が多分に含まれてゐるのは間違ひない事のやうに思へなくもないのである。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

また、これはもしかすると、私の悲鳴なのかもしれなかったのである。何故にさう看做せるのかと言へば、自己卑下する《吾》は、《吾》の此の世での《存在》たる《もの》としての作法としては、誠に合理的だと思はずにはゐられなかったのであるが、《存在》は即ち自己卑下するべくして此の世に出現した、つまり、須らく《吾》が《吾》を嗤ふのが、《吾》の《存在》に対する一つのCatharsis(カタルシス)なのであって、自己卑下し

て《吾》を嗤ひ飛ばす事は、多分に《存在》する事の屈辱に塗れた《存在》の有様の穢れを落とす禊に外ならないのである。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

さて、私が、夢で見る《闇の夢》には一体《吾》の如何なる姿形が潜んでゐるのであらうかと、一時期はそればかりに執着してゐたが、今では、そんな阿呆らしい事に関はり合ふ暇などなく、只管、《闇の夢》に直に対峙する事で、私の心象のままに変容して已まないその《闇の夢》は、夢に開いた《パスカルの深淵》といふ陥穽なのかもしれぬと看做して、私は、不意に首をぬっと伸ばして、その《闇の夢》の中に首を突っ込む事ばかりを何時しか渇望するやうになってゐたのであるが、現在の処、夢の中で私が《闇の夢》に首を突っ込んだ記憶はなく、如何にも惜しい事なのであるが、夢の中での《吾》は、また、私の制御の利かぬ《もの》に違ひないので、夢の中の私が、私の渇望する通りに、恰も私の操り人形のやうに私の思ひ通りに動いて呉れる事は、また、ある筈もなく、然しながら、私は、《闇の夢》、つまり、それを夢世界の裂け目たる夢における《パスカルの深淵》と看做して仕舞へるならば、夢の中の《パスカルの深淵》に首をぬっと突っ込む私、それは、《闇の夢》と私における性行為に違ひなく、その時、多分、何か再び私の夢の中で発生、若しくは出現を余儀なくされる《存在》が出現するといふ、それは私にとってはえも言はれぬ悦楽を伴ってあるのではないかと秘かにその時を楽しみにして待ってゐる自分に不意に気付くと、

ーー何と無慈悲な事よ。

と私は私に対して諫めるのであった。

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

《闇の夢》に対峙せざるを得ぬ《吾》とは、さて、男根の如くに為り得るのであらうかと問ひつつも、何事も性行為に関連付ける私の思考回路の貧弱さに、自嘲しながらも、しかし、性行為こそに一つの《存在》に付された問ひに多分に対する答へであるかもしれぬと思ひながらも、今の処、私は、《闇の夢》を前にして、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と嗤ふしかないのであった。

フロイトを持ち出すまでもなく、確かに「現存在」の日常の振舞ひの淵源を辿れば、それは大概が性行為か《死》の衝動に結び付けられるのは、自明の事であったが、《闇の夢》に私の頭を突っ込みたくて仕様がない私の欲望は、多分に、《異形の吾》を《闇の夢》に頭を突っ込む疑似性行為で生み出す衝動の為せる業に違ひなく、その証左が《吾》をして懊悩せざるを得ぬ「自同律の不快」、つまり、《吾》が《吾》である事の不快が全ての端緒になってゐて、

ーー《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と《闇の夢》に対して哄笑する私は、結局の処、《吾》である事に我慢がならず、或るひは出来得る事であれば、その魂をファウスト博士と同様に悪魔に売り渡したいのかもしれなかったのである。

然しながら、私が仮に私の魂を悪魔に売り渡した処で、私はファウスト博士とは違って「若さ」を欲するのではなく、只管、己の《死》を欲するに違ひないとしか思へぬのであった。それ程までに自己嫌悪する《吾》とは、さて、一体何に由来するのかと自問自答してみても、その答へは今の処さっぱり解からず仕舞ひであったが、その淵源に私が未だ胎児として母親の胎内にゐた時点まで遡れるかもしれず、また、「現存在」は、生きるのが当然との考へに思ひ為した事は、幼児期まで遡っても記憶にはなく、私は私ばかりではなく、《他》に蔑まされる《存在》であると勝手に思ひ込んでゐた事も《闇の夢》を見て、

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と嗤ってゐるのかもしれず、また、私といふ《存在》は、傲岸不遜にも《神》と比べて見劣ってゐる故に《吾》を嫌悪してゐる事も事実で、私は、出来得れば、此の世界を掌中で握り潰し、私の思ふがままの新世界を捏ねくり出して創出したい欲望を抱いてゐるのもまた、確かで、つまり、ドストエフスキイの『悪霊』の登場人物、キリーロフならぬ《神人》が私が私である為の最低条件なのかもしれぬと思ふと、私は、そんな私を尚更嫌悪し唾棄するのであった。

然しながら、私が仮に《闇の夢》は闇でしかないと頭の片隅では高を括ってゐる節がなくもないのであったが、その闇をして私は《異形の吾》と敢へて看做す事で、自身の安寧を得てゐるのかもしれず、それ故に私は《闇の夢》を見て、

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と哄笑してゐるのは間違ひなかったのである。つまり、私は私の憤懣やる方なしのその憤懣を単に《異形の吾》と名付けて、それを恰も《吾》の出来事でもあるかのやうに装ひ、その全てを《異形の吾》に負はせる事で、自己保身してゐると看做せなくもなかったのである。それ故に《異形の吾》は徹頭徹尾、その姿形を現はす事なく、私の頭蓋内の闇たる《五蘊場》に等しき闇である事が、何事においても私には好都合の事で、さうでなければ、私が《闇の夢》を見る事はなかった筈なのであった。

例へば、性と《生》と《死》が綯ひ交ぜになった《もの》が、多分、私の《闇の夢》の正体と思はぬ事もなかったが、しかし、それでは私は《闇の夢》を見て、

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と自嘲する《吾》は、その深層の処では、性と《生》と《死》を侮蔑してゐる事になるのだが、私は、

――それもまたありなむ。

と妙に納得してゐる私に対して、これまた奇妙な目を向け、尚更の事、自同律の不快のど壺に嵌るのであった。

それにしても、私が見る《闇の夢》は一体全体何の象徴、若しくは隠喩なのかと絶えず自問自答してゐる私は、それを或る時は、陰毛を、女陰を、将又、《死》を、そして私自身の頭蓋内の闇を、と、挙げれば切がない程に私は不知不識の内に《闇の夢》に対して私の表象の塵箱の如く何でも投げ入れてゐる事を自覚するのであった。

或るひは、私が見る《闇の夢》はBlack holeの単純な表象でしかなく、仮にさうだとすると、私の推察する能力は、余りにも稚拙な《もの》と言はざるを得ず、実際の処、将に私の発想は貧弱そのもので、果たせる哉、私の想像力なんぞは、所詮、その程度の《もの》でしかないのも、また、真実で、然しながら、私は常常Black holeとはその名によって「漆黒の闇」を連想させるが、本当は、Black holeは光に満ち満ちた此の世の裂け目、否、画家のルドンが描く巨大な巨大な巨大な目玉の如き此の宇宙の目玉と看做してゐて、私は、其処に万華鏡の如き美麗なる鏡面界を見てゐるのであった。つまり、私にとってBlack holeと光とは同義語で、《闇の夢》がBlack holeを表象してゐる筈はないと思ひながらも、私は、もしかすると夢見中には、その覚醒時の心象を夢知らず、Black holeとの呼び名から単純な発想で、「漆黒の闇」と看做してゐるのかもしれず、また、さう看做した方が、どう考へても自然だと、私には思へて仕方ないのも確かなのであった。

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

成程、《闇の夢》は私が夢で頭蓋内の脳といふ構造をした《五蘊場》に出現する数多の表象群の全てをその《闇の夢》に投げ棄ててゐるのも、また、確かで、仮にさうでなければ、夢に闇が出現する筈もなく、更に言へば、私の世界認識が、古代人のそれに限りなく近く、それは、此の世の涯には断崖絶壁があり、それを以て此の世が尽きるといふ世界観が私の意識下にはくっきりと《存在》し、私が夢見中に《闇の夢》として見てゐるのは、多分に、此の世の涯のその断崖絶壁に対峙してゐるとも考へられなくもないのであった。仮にさうであるならば、成程、私が夢見中に見る《闇の夢》は此の世の森羅万象を呑み込んだ闇と看做すのが自然の道理に違ひなく、私の世界観に《存在》してゐる世界の涯に此の世のあらゆる《もの》を投げ棄てて、さうする事で、私は、私の世界観、若しくは世界認識を日日更新し続けてゐるとも思へなくもなかったのであった。

さうなると、私は、《闇の夢》を前に、

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と嗤ふのは、もしかすると此の世の森羅万象を、艱難辛苦を全て堪へ忍んだヨブとは全く違って、己が神に為ったかの如くに錯覚して、さうして相手を侮蔑する事でのみ味はへる何とも言へない優越感といふ愉悦を味はひ、己が此の世の主人である事をたんまりと堪能したいのかもしれなかったのである。それ故に、私は、《闇の夢》に対して、

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、或る種の侮蔑の感情が籠った嘲笑を、何の衒ひもなく放てるのかもしれなかったのである。

――私は、《闇の夢》を見て、さて、何を侮蔑してゐるのか？

と、しばしば私は自問自答するのであったが、それは、考へれば考へる程、私は、此の世の禁忌を破って、神に為ったと悦に入ってゐる自身を見出さずにはをれず、また、さう看做す事が自然な道理に思へて仕方ないのも、また、確かなのであった。それは何とも矛盾した私の、その世界に対する屈折した感情の発露として、《闇の夢》が、現はれてゐると言へなくもないのであった。

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

この虚しく私の頭蓋内に響く哄笑は、一方で、無知で空っぽの私自身の《存在》の有様に対する侮蔑であり、一方で、私は単純故に此の世の主人と化して世界を握り潰し、さうして世界を創り直す創造神の如く、《闇の夢》をむんずと掴み世界を捻り出すか、若しくは、性交時の如く、女陰にも表象可能なその《闇の夢》に、男性器を突っ込む事を夢想する思春期の性に目覚めたばかりの若者の如く、女性を性の対象として見始めた《もの》における女陰のQualia(クオリア)、つまり、感覚質の如くに、私は《闇の夢》に頭を突っ込み呑み込まれる夢想を秘かに望んでゐると看做せなくもなく、《闇の夢》はそれ故に、私といふ《もの》の発生、若しくは起動装置として、私にとっては最早必要不可欠な《もの》に為ってゐるのは、間違ひない事であった。

尤も私は《闇の夢》を私にとっては《生》に必要不可欠な《もの》として、夢で出合ふのを秘かな楽しみにしてゐたのかもしれず、それは今もって処判然としないが、然しながら敢へて言へば、闇は光さへも呑み込むその貪婪さが、堪らなく私には心地よかったのかもしれなかった。否、もしかすると、闇を私の《存在》の天敵であると看做して、何とかして《闇の夢》を木端微塵にしたかったのかもしれなかったのである。

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

或るひは、さう哄笑する事で、私は、《闇の夢》から逃げ出したかったのかもしれず、さうならば、私は、私にとって《闇の夢》とはそれ前にすると途轍もない屈辱感に苛まれる《もの》でしかなく、そして、それに付随する含羞によって尚更私は《闇の夢》から逃げ出したくなる事大なのであった。

それでは何故に含羞が伴ふのかと言へば、《闇の夢》に対して女陰を喚起する己の想像力の卑猥で貧弱な様に対する含羞に違ひなく、しかし、生き物ならば、否、此の世に《存在》する森羅万象ならば、間違ひなく子を産み育てるために性欲があるのが自然な道理で、それに対する私の含羞は、私が性に対して何か隠微なものとして思ひ為し、それは私の《存在》に対して何か疚しさを隠し持ってゐる事とに違ひなく、それを知った《闇の夢》が声に為らない哄笑を上げてゐるのではないかとの疑心暗鬼に苛立ってゐるのかもしれなかった。

――否！

私が、そんな軟な《存在》か、と自嘲してみては、己を嗤ひ飛ばすのであったが、私が、しかし、《闇の夢》を前にして恥じらってゐるとすれば、それは《闇の夢》を女陰として眺めてゐる事に外ならず、ところが、女陰を見ても既に何の感慨も起きず、性交も面倒な私は、《闇の夢》を女陰として見てゐるとすれば、私は、その《闇の夢》から赤子が誕生する事を期待してゐて、ただ、ぼんやりと無表情に《闇の夢》を眺めてゐるのが関の山で、私が、《闇の夢》にほのかに期待してゐるの事は、新たな未知の《存在》の誕生その《もの》だったに違ひないのである。

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

私は、《闇の夢》に対して私の誕生を夢見てゐたのだらうか……。

或るひはさうかもしれなかったが、《闇の夢》が女陰を象徴していると看做せるならば、また、《闇の夢》は不意に此の世に開いた陥穽でもあり得、其処には異形の《もの》達が己の正体を求めて犇く《存在》の塵箱、否、《闇の夢》は真っ暗な深海にも似た異形の《存在》の宝庫に違ひなく、その異形の《もの》は悉く、私に違ひないのであった。そして、私は、その異形の《吾》をちらりと垣間見る事を、怖い《もの》見たさで、《闇の夢》を見たかったのかもしれず、さうして《闇の夢》に不意にその異形の姿を垣間見せる異形の《吾》を見つけては、

――《吾》だと、ぶはっはっはっはっ。

と、嗤ひ飛ばしたかったのかもしれなかったのである。それが、私の唯一つ残されたCatharsis に違ひなく、自分で自分を嗤ふ、《吾》の内部にひっそりと隠匿された衝動の発露が《闇の夢》となって、現はれてゐると思へなくもなかったのである。

――隠匿されし衝動？

つまり、それは、自殺願望に似た何かに違ひなく、《闇の夢》は、私が入水（じゅすい）すべき滝壺の象徴といふのか、《闇の夢》の正体に違ひなかった筈である。

それにしても、私の《生》は《死》の周りを堂堂巡りを繰り返す事で、何とか《生》にしがみ付き、将に砂を噛むやうな塗炭の苦しみの中でもがきながら《生》を繋いで来たといったもので、その様は、Grotesque な深海生物も顔負けの Grotesque な異形の《吾》の無様な《生》が《闇の夢》の前で繰り広げられてゐて、また、その《吾》の無様さを《闇の夢》から覗き見してゐた異形の《吾》はその《闇の夢》に棲息してゐたのは間違ひなく、それでも私がこれまで《生》を繋いで来たのは、その《闇の夢》に棲む異形の《吾》が縊死する様を唯見たかったのかもしれなかったのである。

（完）

蘖（ひこばえ）

既に薪を使ふ日常を已めてしまった現代において雑木林は、その落ち葉を田畑の肥料に使ふ以外にその存在意義を失った感があるが、それを映すやうに大概の雑木林は荒れてゐるのが当たり前の風景となって仕舞った時代に生まれ落ちてしまった彼にとって、しかし、雑木林の中を逍遥するのは、日々新たな発見に出くはすので、彼にとっては荒れてゐるとはいへ、雑木林を逍遥するのは止められないものの一つであった。

さうした或る日、彼は大きな虚(うろ)が根元近くにある一本の櫟(くぬぎ)に出くはしたのであった。

――あっ、零だ！

と、彼は思はず胸奥で叫んだのであった。彼は樹の虚を見ると何時も

――零だ！

と感嘆の声を秘かに胸奥で上げては、

――樹もまた《吾》同様《零の穴》をその内部に持ってゐる……。

と、何とも名状し難い感慨を持ってじっと樹の虚を眺めることになるのであったが、つまり、彼にとって樹の虚は或る種の親近感を彼に覚えさせるものの一つであったのである。

虚の出自は零の出自に或るひは似てゐるのかもしれない。その初め一本の細い幹でしかなかった櫟等の広葉樹は、十年から二十年かけてしっかりとした幹に生長を遂げると、薪か炭の材料としてその一本の幹は切り倒される運命にあるのが、雑木林に存在する広葉樹の常であった。

そして、眼前のその虚を持つ櫟の樹もまたしっかりとした樹に生長を遂げると《一》たる幹は薪か炭の材料になるべく切り倒された筈である。しかし、櫟等の広葉樹は主幹を失ったとはいへ死することはなく、かつて存在した《一》たる主幹の切り株から蘖(ひこばえ)の小さな小さな小さな未来の幹たる芽を出すのであった。さうして再び立派な幹に生長を遂げた蘖の幹もまた薪か炭の材料として切り倒された筈である。しかし、当然櫟の樹は再びその切り株から小さな小さな小さな蘖の芽を出した筈である。けれども、時代は Biomass(バイオマス)の時代から石油の時代に移り行き、その櫟の樹は長くそのまま放置されてしまった筈である。さうして《一》たる幹の切り株の跡は虚となって、つまり、「零の穴」となってその櫟は生き続けることになったのであらうといふことは想像に難くない。虚とは、大概、《一》たる幹を人工的に切り倒され、その切り株がその失った《一》たる幹の存在を埋めるべくその切り株から蘖が芽を出したその証左でもある。

また、《零の穴》とはいへ、虚は様々な生命の揺り籠でもある。虚は、或る時は鳥の巣となり、或る時は動物の寝床となり、そして昆虫の棲処となり、と、虚はその様態を変

へ生命の揺り籠になるのである。

さて、其処で此の世に存在する森羅万象は、それが何であれ、《吾》や《他》や《主体》や《客体》等の在り方を暗示して已まない《もの》であると看做してしまふと、蘖もまた《存在》の在り方を、つまり、《吾》や《他》等の在り方を暗示する《もの》に違ひないのである。

《吾》は《吾》の内部に《零の穴》たる《虚》、それを《反＝吾》と名指せば、《吾》の内部には《零の穴》若しくは《虚》たる《反＝吾》がぽっかりと大口を開けて厳然と《存在》する《存在》の在り方も在り得る筈である。それは喩へると、主幹が折れてしまふと必ず枯死する或る種過酷極まりない《世界》に《存在》し、蘖の出現を許さない針葉樹的な《存在》として、一本の主幹のみを頼りにして此の世に屹立し生きる《存在》の在り方がある一方で、一度や二度の《吾》といふ主幹が折れようが、再びその折れた主幹の跡から蘖なる《吾》が芽を出すのを許容する何とも慈悲深い《世界》に屹立し生きる《存在》の在り方もある筈である。そして、《吾》とは、蘖の出現を許さない針葉樹的な《存在》しか存続出来ない過酷な《世界》にありながら、最早、不意に《吾》たる主幹を何かに折られた《存在》でしかなく、それでも《存在》することを必死に而も喜んで欣求する蘖たる《吾》を芽生えさせるといふ、或る種の《インチキ》を成し遂げてしまった《存在》しか此の世は最早受け入れなくなってしまったやうに彼には思へて仕方がなかったのであった。しかし、さうなると、《吾》には《零の穴》若しくは《虚》がぽっかりとその大口を開けて《存在》してゐる筈で、彼には如何してもその《吾》の内部の《零の穴》若しくは《虚》ではまた《吾》ならざる《反＝吾》の《存在》を棲息させ育む《存在》の揺り籠として《吾》には厳然と《存在》してゐるとしか思へないもまた事実なのであった。

――《存在》の《零の穴》若しくは《虚》には何が棲むか……。

と、彼は己に問ひを発するのであったが

――へっ、《吾》ならざる《異形の吾》に決まってらあ――。

と、せせら笑ふ《異形の吾》が不意にその顔を出すのであった。

そもそも《吾》とは厄介な生き物である。耳孔、鼻孔、眼窩、口腔、肛門、生殖器等に代表される《主体》の各々の細胞にすら無数に開いてゐる穴凹と同様、それが《吾》の内部の何処かは解かりかねるが、しかし、《吾》の内部には厳然とその内部の闇にぽっかりと開いた《零の穴》若しくは《吾》の《虚(うろ)の穴》が《存在》してゐるとの確信がなければ

――俺は俺だ！

と、《吾》に対しても《他》に対しても《世界》に対しても申し開きが出来ぬ情けない《存在》として《存在》するのである。一方で、蘖の生長によって主幹を喪失しても生き永らへた広葉樹は、けれども、その内部に《存在》してしまふ《虚の穴》は己の何《もの》によっても埋められずに《他》の生き物の生命の揺り籠として樹以外の《もの》をその《虚の穴》で育むといふ、或る意味《吾》の意思ではどうにもならぬ《存在》の在り方

を、その樹が望むと望まずとに拘はらず強要されるのであり、また、《存在》の有様の本質がさうである故に、《吾》は《他》や《世界》と辛うじて連関するに違ひないのである。

さうすると、彼の頭蓋内の闇、即ち五蘊場に不意に現はれる《異形の吾》共は、《吾》の内部にぽっかりと開いた《零の穴》若しくは《吾》の《虚の穴》をその棲み処としてゐる《他》たる《反＝吾》の一つの有様に違ひない筈であるけれども、人間における主幹たる《吾》といふ自意識はといふと絶えざる連続性を求められつつも、絶えず《吾》の主幹たる《吾》の自意識は、それは「先験的」にかもしれぬが、何かによってぽきりと折られ非連続的な《吾》の《存在》を強ひられながら、しかし、人間における《吾》といふ主幹にも《吾》の蘖が生え出るかの如き《インチキ》をそのぽきりと折れた《吾》に接ぎ木するやうにして《吾》といふ《存在》は架空された《吾》として《存在》することを強ひられるのである。尤も、その《インチキ》を身に付けなくては、神ではなく人間の《他人》が作り上げた都市に代表される人工の《世界》では、一時も《存在》することが不可能なのである。それは或る意味当然の事で、慈悲深くも荒々しき神が創りし《世界》では《吾》もまた広葉樹のやうに《吾》の蘖が生え出る事は神に許されてゐて、しかもそれはむしろ《自然》な事なのであるが、しかし、既に人間が作り変へてしまってゐてその《吾》以外の《他人》が既に《吾》の誕生以前に作り変へてしまった人工の《世界》で生き延びるには、《吾》はその主幹たる《吾》を自ら進んでぽきりと折る勢ひでなければ《存在》は出来ず、挙句の果ては恰も蘖の《吾》が《存在》するかの如く架空の《吾》をでっち上げる、つまり、《吾》といふ《存在》の有様は如何しても《インチキ》だといふ忸怩たる思ひを絶えず噛み締めつつ

——ふっふっふっ。

と、皮肉に満ちた薄笑ひをその蒼白の顔に浮かべなければ、この《他人》が既に《吾》の誕生以前に作り上げた人工の《世界》では《存在》することが許されないのである。さうして、《吾》の内部にぽっかりと開いた《零の穴》若しくは《虚の穴》には数多の《異形の吾》共が棲み付き、そして、絶えずその《吾》を名指して

——馬〜鹿！

と嘲笑してゐるのである。

当然彼にとっても事情は同じで、絶えず彼の内部では《異形の吾》共が皮肉たっぷりに

——馬〜鹿！

と彼を嘲弄するのであった。

——へっ、さうさ、俺は大馬鹿者さ。

と、彼は決まって《異形の吾》共の嘲弄に対してこれまた皮肉たっぷりに返答するのであった。

——土台この浮世、大馬鹿者以外生き残れやしないぜ。

——だからお前は馬〜鹿なのさ、へっ。

——馬鹿で結構。それでも俺は何としても此の世で生き残るぜ。

――ふっふっふっ。

その醜悪極まりない《吾》の鏡像としてしか現はれぬ《異形の吾》の一人はにたりといやらしい薄笑ひをその相貌に浮かべたまま、再び

――馬〜鹿！

と彼を罵るのであった。

――へっ、馬鹿に徹してしかこの異様な浮世では誠実であることは不可能なのさ。

――馬〜鹿！

――どうも有難うごじぇえますだ、俺を馬鹿呼ばわりしてくれて、ふん。

――その大馬鹿者に一つ尋ねるが、お前は、此の異様な《他人》が徹頭徹尾作り上げ神から《世界》を掠奪した人の世に生きることが楽しいかね？

――さあね。楽しくもあり、また、不愉快極まりなくもある。

――それぢゃあ、お前は人間が神の御手から掠奪した此の異様な《世界》を承認するかね？

――いいや、絶対に受け入れられぬ。

――ならば何故に生き残るなどと嘯くのかね？

――逃げられないからさ。

――逃げられない？

――ああ、此の世に《存在》しちまった《もの》はその《世界》から遁れられぬし、また、此の世から遁れる出口なんぞは何処にもありゃしないのさ。それはつまりこの人工の《世界》では自死することすら全く無意味な行為でしかなく、《吾》が自死しようがこの人工の《世界》は「また《吾》が自死したぜ！　全く《吾》とは間抜けな《存在》だぜ」と腹を抱へて哄笑するのが落ちさ。つまり、この人工の《世界》では如何足掻かうが「出口無し！」と相場が決まってしまってゐるのさ。

――では《愛》は何なのか？

――《吾》が《吾》として架空されてゐることを確認する一行為に過ぎぬのさ、この人工の《世界》では！

――すると《吾》とは既に幻影の類に成り果ててしまったのかね？

――ふっふっふっふっ、さう望んだのは人間自身ぢゃないのかね？

――何をしてお前にさう言はしめるのかね？

――へっ、人間は人力以上の《力》を手にした途端、《世界》を神から掠奪する事に一見成功したやうに見えるが、その実、人力以上の《力》で作られ、その挙句、人工物で埋め尽くした此の人工の《世界》は、へっ、既に人間の想像の範疇を超えた何かでしかないからさ。そんな《世界》における世界＝内＝存在を一身で体現出来る《吾》なんて、へっ、幻影でなければ一体何だといふのかね？

――つまり、この世界＝内に《存在》する《吾》は、己の手で此の現実に対さねばならぬのっぴきならぬ立場に自らを追ひ込み、そして、人力の無力さを嫌といふ程味はひ尽くした上に、此の《世界》に対峙する事の辛酸を嘗め尽くさずば、《吾》の本当のところ

は不明といふ事かね？　否、むしろ己の虚無さ加減が解からぬといふ事かね？

　その時、彼はゆっくりと瞑目し、瞼裡に朧にその相貌を浮き上がらせた或る《異形の吾》をきっと睨み付けてかう問ふたのであった。

――人間が人力以上の動力を手にした瞬間に、《吾》は《吾》の化け物と化して、その或る仮構された《吾》らしき《もの》を如何足掻いても《吾》と名指す外なく、そして、さう名指すことでやっとその無力なる己の屈辱感を一瞬でも忘却したかった、ちぇっ、つまり、この世界＝内＝存在を一身で体現しなければならぬこの《吾》といふ生き物のどん詰まりを味はひ尽くさずば、最早《吾》など泡沫の夢に過ぎぬといふことかね？

――さう、人間は人間の欲望の涯に人力以上の動力を手に入れて、その《力》で強引にすら思へる程にこの現実を作り変へた結果、《吾》といふ実体を見失ってしまったのさ……否！　最早、《吾》といふ《もの》を実感を持って《吾》と、この《吾》は断言出来なくなってしまったのだ！

――それは人力以上の動力を手にした《吾》は最早《世界》に対峙する術を、つまり、《生身の吾》によってしか対峙出来ぬ此の《世界》を見失ったといふことかね？　更に言へば、《吾》は《吾》本来の姿から遥かに膨脹してしまった何かに既に成り果ててしまったといふことかね？

――ふっ、《吾》の膨脹ね――。人力以上の《力》で《世界》を人工の《もの》として神から掠奪し果せた人間は、換言すれば、その神から掠奪しようと己の手を汚して《世界》を手にした第一世代は、多分、未だ《吾》が《吾》である実感がしっかりとあったに違ひない筈だが、それ以降の世代、つまり、生まれる以前に既に《世界》が誰とも知らぬ他人(ひと)の手で人力以上の《力》で人工の《もの》へと変はってしまってゐた第二世代以降の人間は、さて、どうやって己の生存を保障したのかお前にも想像はつくだらう。

――つまり、《吾》は、《吾》であることを断念し、その誰とも知れぬ他人の手になる、しかも、人力以上の《力》で作り変へられてしまった人工の世界＝内＝存在に徹する外に、この《吾》が生き延びる術は最早残されてゐなかった……違ふかね？

――詰まるところ、《吾》は《吾》本来備わってゐた筈の《生身の吾》といふ主幹を自らぽきりと折って、この人工の《世界》に適応するべく生える筈がない《吾》の蘖の生長を、へっ、架空する外なかったのさ、ちぇっ。

――へっ、その結果出現したのが、中身ががらんどうの、それでゐて人力以上の《力》を手にした故に膨脹せずにはゐられなかった《吾》の化け物を、ちぇっ、《吾》と名指す愚劣を犯す外になかったこの何とも哀れなる《吾》といふ訳か――。

――しかし、さうすると、この人工の《世界》をぶち壊せば、簡単に、元通りの再び神の《世界》の中の実感ある《吾》を取り戻せるのぢゃないのかね？

――へっ、「創造と破壊」と言っては、ぷふぃっ、洒落る訳ね？

――といふ事は、「創造と破壊」は最早無意味な呪文の一種でしかないと？

――へっ、さうさ。シヴァ神を復活させたところで、最早其処にはTerrorism(テロ)の恐怖しか齎さないのは、忌まわしき日本のオーム真理教による地下鉄Sarin(サリン)事件と

いふ Terrorism や宗教の忌まわしき処を具現化しちまった原理主義者による亜米利加(US)で起きた同時多発 Terrorism が図らずも証明しちまったのぢゃないかね？

――つまり、《吾》の実感を追ひ求めることは、即ち、原理主義の台頭を、就中(なかんづく)、暴力を絶対的に肯定する「聖戦」を掲げた原理主義に直結しちまふ時代が到来しちまったといふことだね？

――さう、哀しい哉、《吾》は、ちぇっ、この主幹なき《吾》の蘖が生長し、その内部に《虚(うろ)の穴》を持つこの《吾》は、人力以上の《力》を手にし膨張に膨張を重ねた揚句に誕生しちまったこの《吾》といふ名の化け物と何とか折り合ひをつけなければ、只管、無意味な《死》、つまり、犬死する《吾》、若しくは現代の人身御供たる《吾》を大量に生み出すのみの何とも惨憺たる状況に《吾》は既に陥っているといふことさ。

――その因が、即ち人類が人力以上の《力》を手にして此の《世界》を神から掠奪したといふことなのか――。

――其処で一つ尋ねるが、《吾》は人力以上の動力で神の世を人の世に作り変へた、つまり、その徹頭徹尾《吾》の与り知らぬ《他》の手による人工の世界で、世界は時空間的には伝達若しくは《存在》の輸送手段の高速化故に見かけ上縮小し、それは即ち此の人工の世界に誕生させられた《吾》が否が応でも生き残る為に、膨張した架空の《吾》を《吾》と名指してみたはいいが、その実、己の内部にぽっかりと空いた《零の穴》若しくは《虚(うろ)の穴》に閉ぢ籠る外なかったのが、《吾》の置かれたのっぴきならぬ現状だとは思はぬか？

――つまり、其処には《反＝吾》が棲まなければならぬ《吾》の《零の穴》若しくは《虚の穴》に、へっ、当の《吾》が己の身を《他》が満ち溢れてゐるとしか認識できない人工の世界から守るべく閉ぢ籠ったと？

――さう。《零の穴》若しくは《虚の穴》は《吾》にとって最後の砦になっちまったのさ。

――それは《吾》にとっては堪へ難き矛盾だらう？

――さうさ。《吾》が《吾》であることに「先験的」に矛盾しちまってゐる。

――それでその一つの帰結が決してその《存在》は許されぬところの《吾》は存在論的な蘖といったらいいのか、それは摩訶不思議な《存在》の仕方を選ばざるを得ぬといふ事だったのか？

――ああ。《吾》に《零の穴》若しくは《虚の穴》があり《吾》の蘖が生えるといふ事は、元来、世界が《吾》にとって慈悲深き《もの》といふ事の証左であったが、世界が神の世から人の世に変はった為に《反＝吾》が其処にゐなければならぬ《吾》の《零の穴》若しくは《虚の穴》に《吾》それ自身が閉ぢ籠り、へっ、《吾》と《反＝吾》はその《零の穴》若しくは《虚の穴》の中で縄張り争ひをしながら、人工の世界ではその存在が存在論的にあり得ぬ、つまり、架空にでっち上げられた存在論的な蘖の《吾》を《吾》と名指して、何とか《吾》と《反＝吾》の棲み分けを試みてゐるが、へっ、土台《吾》と《反＝吾》は一度出会ふと光となって霧散消滅する。

――つまり、絶えず《吾》と《反＝吾》は《吾》の《零の穴》若しくは《虚の穴》で出会

って、そして、光となりて消滅してゐるとするならば、一体《吾》が《吾》と名指し《吾》と呼んでゐる《もの》は何なのかね？

——だから言ったらう、《吾》がでっち上げた架空の膨張に膨張を重ねた醜い《吾》の化け物だと。

——つまり、この人工の世界に生き残るには、《吾》は率先して《吾》を滅却する外に、最早《吾》の、ちぇっ、これは変な言ひ分だが、その《吾》の生き残る《存在》の在り方は残されてゐないといふ事か——。

——それでも《吾》は生き延びなければならぬ。

——へっ、それは如何してかね？

——聞くまでもないだらう？

——つまり、後世に必ず出現する未だ出現せざる未知なる《もの》達の為に、世界を人力以上の動力で人工の世界に変へる狂気の例証として《吾》は、この異常極まりない人工の都市で生き残る外ない……違ふかね？

——更に言へば、《吾》は、《吾》の《零の穴》若しくは《虚の穴》で絶えず《吾》は生成しては即座に其処に棲まふ《反＝吾》と出会っては光となりて霧散消滅することを繰り返してゐるとは言ひ条、其処には新たな《吾》の《存在》の仕方が生まれるのではないかといふ密かな密かな期待が、ちぇっ、《吾》のEgo(エゴ)に満ち満ちた下らぬ、誠に下らぬ淡き期待が隠されてゐるのさ。

——しかし、それは《吾》の化け物とはいへ、少なくとも《吾》はそれが人工の世界では存在論的にはあり得ぬ《吾》の蘖に過ぎぬとしてもだ、《吾》が人工の世界＝内＝存在としての「現存在」たる《吾》が、「《吾》とは何ぞや？」と「現存在」たる《吾》に絶えず問はずにはゐられぬのは、自然の道理ぢゃないかね？

——ああ。《吾》は《吾》を喪失しても、やはり《吾》は《吾》として《存在》することを強要され、そして、「現存在」たらむとしてあり続ける、言ふなれば何処までもみっともない《存在》ぢゃないかね？

——へっ、やっと腹を括ったか——。

——腹を括るも括らないも、現に今俺は《存在》してゐる——筈だ。

——筈だ？　つまり、《存在》してゐると断言は出来ないんだね、へっ。

——へっへっへっ。最早、何《もの》も、ちぇっ、「俺は俺だ！」ときっぱりと断言出来る《存在》としての、換言すれば、此の《生者》のみが「俺は俺だ！」と宣ふ事を許された《存在》としての、へっへっ、この《生者》たる《吾》は、恰もそんな《吾》が此の世に《存在》するが如く《吾》といふ《存在》を無理矢理にも、若しくは自棄(やけ)のやんぱちにでも架空せざるを得ず、また、神から掠奪した人工の《世界》において、《吾》を《吾》と名指す事のその底無しの虚しさは、《吾》の内部にぽっかりと空いた《零の穴》若しくは《虚（うろ）の穴》の底無しを表はしてゐるに違ひないのだが、さて、《死》を徹底的に排除した《生者》のみが棲息するこの人力以上の動力で作り上げられた此の人工の《世界》は、へっ、自然に対して余りにも羸弱(るいじゃく)ではないかね？

――それは全く嗤ひ話にもならぬ事だが……。此の《生者》の為のみに作り上げられた人工の《世界》は全くもって自然に対して羸弱極まりない！

――すると、此の人工の《世界》に生きる事を、若しくは《存在》する事を強要された《吾》といふ架空され、《吾》の妄想ばかりが膨脹した此の《吾》もまた、自然、ちぇっ、単刀直入に言へば《死》を含有する自然に対しては羸弱ではないかね？

――へっ、元来、《吾》が《死》に対して強靭だった事など、此の宇宙全史を通じてあったかね？

――だが、自然にその生存を全的に委ねてゐた時代の《吾》たる《もの》は、傍らに《死》が厳然と《存在》してゐた分、それを敢へて他力本願と名指せば、己の命を《吾》為らざる《もの》に全的に委ねるといふ、何とも潔い《生》を生きてゐた筈だ。つまり、《死》が身近故に、《存在》は《存在》する事に腹を括り、そして、《吾》は蘖の《吾》をも含めて如何様の在り方をする千差万別の《吾》を、《世界》も《吾》も極当然のこととして受け容れてゐた。

――ふむ……。《生》が《死》へと一足飛びに踏み越え、簡単に自ら死んで行く、つまり、それ故、原理主義が彼方此方に蔓延(はびこ)る、へっ、その結果、《死》に対して何とも余りに羸弱極まりない《吾》、そして、その《吾》の《存在》の無理強ひが《死》を徹底的に排除した人工の《世界》へと遂には結実して行くのだが、しかし、嘗ての《吾》が多様に《存在》する、若しくは自在に《存在》出来てゐたに違ひない神と共に《存在》出来た神の世において、果たして、狂信は齎されなかったとでも思ふのかい？

――いいや、何時の時代でも《もの》は何かを狂信してゐたに違ひない筈さ。

――ならば、何故、彼方此方に蔓延る現代の原理主義ばかりを特別視するのかね？

――現代の原理主義は、徹頭徹尾《生者》の論理、ちぇっ、それは裏を返せば冷徹な《死》の原理に地続きなのだが、それ故、現代の原理主義は、二分法を極めて厳格に適応した末に生まれてしまった、その実、背筋がぞっとせずにはいられぬ代物でしかないからさ。

――つまり、蘖の《吾》としてしか《存在》する事が許されぬこの《吾》といふ《インチキ》を平然と為し遂げて、いけしゃあしゃあと恰もその蘖の《吾》を本当の《吾》と仮想、否、狂信し、而も、その蘖の《吾》の出自に目をやる余裕すら失ってしまった此の《生者》の論理ばかりが罷り通る人工の《世界》は、へっ、その人工の《世界》自体が自然に対して極めて羸弱極まりないといふその論理的な破綻を、果たして、此の世に《存在》する《もの》の何(いづれ)かは論理的に破綻せずに語り果(おほ)せられるかね？

――ふっふっふっ。自然に対して極めて極めて羸弱な《世界》って、さて、何なのだらうか……？

――つまり、人工の《世界》と自然とが相容れない状態でしか互ひに《存在》してゐない事それ自体、へっ、つまり、詰まる所、此の人工の《世界》そのものが、元々自然と重なり合ってゐたに違ひない《世界》なる《もの》もまた、その本質をぽっきりと折られ、蘖の《世界》としてしか《存在》してゐないとすると、ちぇっ、人類史とは一体全体何の事なのだらうか？

――無知無能なる《生者》が、全智全能なる《もの》の振りをするべく、神の下の《世界》をぽきりと折って、神を、そして、《死》を徹底的に排除する事で、《生者》天国の人工の《世界》が、恰も此の世に創出可能な如くに《生者》が見栄を張ってゐたに過ぎぬとすると、《存在》とはそもそも何と虚しき《存在》なのであらうか？

――ちぇっ、何を今更？　元来、頭蓋内の闇に明滅する表象群は、恰も絶えずその表象群が無辺際に湧出するが如く看做すこの《吾》は、己の頭蓋内の闇を覗き込んで、その頭蓋内の闇といふ五蘊場に明滅する数多の表象群を眼前に取り出した揚句に、ちぇっ、結局のところ、頭蓋内の闇の表象群を外在化させて作り上げた人工の《世界》から帰結出来る事と言へば、《生者》の頭蓋内の闇といふ五蘊場から《死》を徹底的に排除してゐるに過ぎぬといふ事ぢゃないかね？

――《存在》は唯一つ大事な事を亡失しちまてゐる振りをしてゐる。

――それは……《死》だね。

――さう、《死》さ。頭蓋内の漆黒の闇たる五蘊場に生滅する数多の表象群をコツコツと具現化することだけに感(かま)け、挙句の果てにその頭蓋内の漆黒の闇たる五蘊場で表象した《もの》を外在化し、その事に見事に成功した筈なのだが、しかし、その本質はといふと、へっ、全て《死》と紐帯で繋がってゐなければ、そもそも表象すら出来ない事を、《生者》、つまり、《存在》は見事に亡失し果せた振りをして見せたのだ。

――しかし、その振りも最早限界に来てしまったのだらう？

――さう。最早《自然》に対して余りにも羸弱なこの《人工世界》は、その本質が《死》故に、絶えず《生者》は自殺へと誘はずにはゐられぬ。

――つまり、この《人工世界》は絶えず《存在》を《死》へ誘ふと？

――さう。

――それは、つまり、《存在》の本質が《死》だから、この頭蓋内の闇に明滅する表象を具体化し外在化した《人工世界》は、《死》の具現化へと行き着く外なかったと？

――違ふかね？

――違ふかね？　すると、へっ、《生者》は《存在》の代表者面をして、最も《生者》が忌避したかった《死》を、この《人工世界》つまり、街として具現化してしまったといふ事かね？

――さうさ。更に言えば、街が計画的に造られてゐればゐる程、《死》に近しい。

――つまり、それは敗戦後の闇市的な猥雑な《場》こそ《生》に満ち満ちた人工の《場》たり得た筈さ。

――つまり、焼け野原といふ一つの主幹たる戦前の継続し得たであらう街がぽきりと折れた後に、蘖として猥雑極まりない闇市が自然発生的に生まれた筈だが、その蘖たる闇市的な生活空間を、後知恵に違ひない都市計画なる鉈(なた)でばっさりと切り倒され、其処に現出した人工的な更地たる時空間、つまり、蘖が全て切り倒された様相の街が此の世に出現し、そして、其処に人力以上の動力やら重機で人一人では全くびくともしない《人工世界》が造り上げられた。

――へっ、つまり、それが徹頭徹尾《死》の具現化でしかなかったと？
――違ふかね？
――違ふかね？
――でなければ、この人工の街で《生者》が次次と自殺する筈がないではないか？
――つまり、この《人工世界》は絶えず《存在》を《死》へ引き摺ってゐると？
――違ふかね？
――ぢゃ、人類の叡智とは、結局、《死》の具現化に過ぎなかったといふ事だね？
――否、人類の叡智といふ《もの》は人一人でのみ体現できる、否、人一人で生きて行ける《もの》こそ人類の叡智であって、科学的技術といふ名の《知》は、《存在》の《生》とは全く無関係な代物で、叡智といふ《もの》は、人一人で具現化出来る《もの》であって始めて叡智と呼ばれるのであって、人一人で具現化出来ない《もの》は叡智とは言はないのさ。つまり、《生》に関して言へば、百年前と同じで、人類は何一つ《生》の様相を変へる事が出来なかったのさ。変わったのは全て《死》の様相さ。
――《知》は叡智にはなり得ぬと？
――ふむ。多分だが、科学なり生命科学なり化学なりの高度極まりない《知》が叡智へ相転移を遂げる鍵を《存在》は未だ見出し得ぬのが正直なところさ。
――つまり、此の世に《存在》するといふ事は、《神》の夢の途中といふ事かね？
――此の世の摂理が《神》による《もの》だと看做したければさうすればいいのさ。但し、摂理が摂理たる鍵は未だ何《もの》も見つけられず仕舞ひだ。
――では、その鍵を見つける手立ては？
――《現実》を本来の《現実》に戻せばいいのさ。
――本来の《現実》？
――さう。本来の《現実》さ。《存在》にとって最も不便極まりないのが《現実》だといふ事を思ひ出すがいいのさ。
――ふむ。《現実》は不便な《もの》か……。
――すると《楽》は《死》と直結するといふ事だね？
――さうさ。物質に特有の特性を見つけてはその特性を最大限に利用し、人間の奴隷たる様様な機器を作っては、人間といふ《存在》は《楽》を求めてゐるが、それが《死》の予行練習に過ぎない事に思ひ至らぬ馬鹿者さ、人間といふ生き物は。それ以前に《楽》を求めた人間の《生》は《楽》になったかね？
――いいや。以前にもまして尚更忙しくなっただけだ。
――当然だらう。時間が、否、時空間が Fractal な《もの》だといふ事に今も尚、気付かぬ馬鹿者共が人間なのだからな！
――え？　時空間が Fractal？
――さうだらうが！　《楽》を求めてもちっとも《楽》にならぬではないか！　奴隷たる様様な機器が、その性能を上げれば上げる程に、その主人たる人間は忙しくて仕様がなく、それは詰まる所、時空間に間延びする現象はなく、時空間は Fractal な《もの》と

看做した方が自然だらう。

――つまり、幾ら《楽》を求めても時空間には間隙は生じない――。

――だから、此の時空間はFractalな《もの》と看做した方が自然に適ってゐるのさ。といふのも、《楽》を求めて時空間に間隙を生み出すべく、物質を機器として人間の奴隷にしてみたはいいが、時空間には間隙が生じる代はりに更なる回転速度が高速となったとしか感じられぬ時空間の流れが、更に《楽》で生じた筈の時空間の間隙に厳然と《存在》することを人間は知るといふ笑ひ話にしかならない事を、此の人間は大真面目に今も尚追及してゐるが、それは、所詮、《死》の予行練習でしかない事を肝に銘じるべきなのさ。

――すると、《死》では時は途轍も速く流れてゐるといふ事かね？

――それは、換言すれば、《死》においては時の流れは限りなく止まってゐるのと同じ事さ。

――ちぇっ、此処でも《無》と《無限》の問題か――。

――つまり、例へば人間を例にしてみると、人間は自己といふ主幹を先づ、羊水から此の世へと送り出される時に、バッサリと何かが手にする鉈でぶった切られて、仕方がなく此の世で生き抜くべく新たな主体を芽生えさせる事を強要されるが、しかし、その新たに芽生えた蘖として未来の主幹になるべき主体は、再び有無を言はせずにバッサリと切り倒され、更にそこから芽生えた蘖の中の主幹になり、主体となるべき《もの》は更にバッサリとぶった切られることを蜿蜒と繰り返すことに終始する。

――ちぇっ、それが何度も絶えず続く事でしか主体は主体として此の世に《存在》出来ぬのだらう？

――だから、嘗ては、そのぶった切る時にちゃんと儀礼を執り行って主体の主幹をぶった切ってゐたが、現在では、それが曖昧模糊となり、何時の間にやら主幹たる主体は何かが手にした鉈でバッサリとぶった切られ、ぶった切られた《もの》は、へっ、何が吾の主幹たる主体をぶった切ったのかその顔すら全く不明の、ふっふっふっ、強ひて言えば、洒落を込めて「混迷の時代」になっちまったのさ。更に言へば主幹が何時ぶった切られたかも解からぬこの「混迷の時代」は、而も誰もが《吾》にあるに違ひない主体の主幹が一度も何かにぶった切られた事をも全く知る機会を喪失してゐて、そして《吾》の主体たる主幹が既にぶった切られ、その蘖の蘖の蘖の主幹になるべき筈だった主体すらぶった切られてゐる事すら知らぬ、へっ、如何なる主体も、「《吾》とは何処？」と呻きながら此の世の底辺を彷徨ってゐるのが実情だらう？

――ふむ。主体とは初めに蘖になりき、か。

――さう。蘖でない主体を《吾》と言ふ欺瞞に此の世は満ち満ちてゐるが、これは例外なく、如何なる主体もその主幹を何回となくぶった切られた、へっ、途轍もなく屈折した主体としてしか此の世に《存在》する事が許されぬのだ。

――何に許されるといふのか？

――自然だらうが！　お望みならば《神》と言ひ切ってもいいがね？

――ちょっと穿った見方をしてみると、或る種の人種、つまり、此の世の森羅万象は脳

がさう見させているに過ぎぬ《もの》だと言ふ脳絶対主義者が《存在》するが、そんな理不尽な脳絶対主義者に対しても主体が蘖としてしかあり得ぬ事を納得させられるかね？

——へっへっへっ、そんな奴らは抛っておけばいいのさ。

——つまり、元来、主体とは夢幻空花なる幻に過ぎぬといふ事か——。

——さう。主体が《吾》と名指す《もの》は既に何かにぶった切られてゐて、その正当性を失ってゐる蘖の蘖の蘖の蘖の、と蜿蜒と蘖のといふ言葉が続く、この蘖の主体は、何時まで経ってもその目的たる《吾》に至ることはなく、人は、つまり、「現存在」は、唯、茫然と虚空を仰ぎ見ながら『《吾》は何処ぞ？』と、絶えず問はずにはゐられぬ此の世の居心地の悪さに辟易しながらも、《吾》といふ《もの》は恰も《存在》するかの如く、何回目かの主体の蘖の主体を誕生から死すまで、一貫して、若しくは正当性があるやうに《吾》なる《もの》を《吾》と看做す自己欺瞞を平気でするのさ。

——だって、さうしなければ、《吾》は《吾》たる事に我慢出来やしないのぢゃないかね？

——しかし、《吾》が《吾》である必然性が何処にあるといふのかね？

——《吾》が《吾》である必然性？

——さうさ。《吾》は別に《他》であっても構はない代物ぢゃないかね？

——《吾》が《他》である事に、そもそも《吾》は堪へ得るやうには出来てやしないぜ。その一例が多重人格ではないのかね？

——多重人格者であっても、或る人格にある場合、それは欺瞞でしかないにも拘らず、その人格が《吾》である事は何の不自然な点はなく、多分、何かの人格になっていたとしてもその人格は『《吾》は《吾》だ！』と世界に向かって叫び声をあげる筈さ。

——では、蘖の主体でしかない主体とは、一体全体何なのかね？

——「根」は変はらぬ何かさ。

——つまり、主体の無意識の部分ではその蘖の主体の「根」は変はらぬといふ事かね？

——主体の「根」を無意識と看做していいのかどうか、私には判断のしようがないが、しかし、現代の高度情報化社会に誕生させられる如何なる《存在》も、その姿形を始めとしてその性質まで変へられて、つまり、矯正された主体、へっ、それが所謂主体の蘖なのだが、その《存在》の初めから主体が主体である自由を略奪されて、森羅万象は全て此の世に出現するのさ。

——ふっ、主体が主体である事は自由の問題かね？

——ああ。自由の問題だ。主体が蘖の主体でしかない事実を如何なる《存在》も避けてゐる故に、自分探しなんぞと悠長な、それでゐて夢見心地の下らぬ事が、恰も何か深遠な事の如くに蘖の主体は、位置付けてはみるのだが、結局、如何なる《存在》も自分を探せたと言挙げ出来る《存在》は此の世に《存在》した例がないぢゃないかね？

——ふむ。多分、如何なる《存在》も《吾》を見出しはしないか……。つまり、《吾》は《吾》であるといふ場合、その《吾》は連続性がなく、非連続な《もの》としてしか表象出来ぬ筈だし、仮に、《吾》が《吾》として一貫した《吾》として表象する《もの》は、

それが欺瞞でしかない事実を甘受する、へっ、不快を、ぢっと噛み締める事が《吾》が唯一、此の世で生き延びさせられる蘖の主体でしかない主体の生存する智慧に違ひない。

——どの道、《吾》は誕生した時に既に臍の緒をぶった切るが如くに蘖の主体でしかない此の世の如何ともし難い摂理は、ちぇっ、神の仕業か！　神なんぞ糞喰らへだ！

——くっくっくっ。そもそも自然が主体に絶えず試練を与へ、主体が、へっ、蘖の主体が如何に此の世の自然に適応出来るか、神はその玉座に坐したままぢっとその様を凝視するのみといふ此の世の摂理を、《存在》する《もの》は既に「先験的」に受容してゐる事を如何なる《存在》も認めたくはない。つまり、《吾》が《存在》してゐると何の疑問も抱かずに素直に認める《もの》は、一生夢から覚めることなく、つまり、その《存在》に関して苦悶することなく、夢から彼の世といふ夢へと、此の世といふ現実に出合うことなくその《生》の光芒の残像を残すのが関の山だ。

——主幹なき蘖の主体は、すると、自分探しといふ莫迦な事を始めるといふ事は、つまり、酌めども尽きぬ夢の中に引き籠る事でしかないといふ事か——。

——さう。《吾》とは既に一貫性を喪失してゐるのさ。

——すると、《吾》が《吾》と呼んでゐる《もの》こそ、此の世を夢へ堕す元凶なのか！

——さて、其処で、此の世の夢かもしれぬ現実が、結局、正真正銘、夢でしかない、換言すれば、表象が明滅する虚無の大海でしかないとすると、この《吾》が《吾》と呼んでゐる、既に主幹無き蘖の《吾》もまた、夢でしかないと、此の蘖の《吾》が甘受した処で、詰まる所、何にも変はりはせず《世界》は相変はらず《世界》のままで、「現存在」たる《吾》も相変はらず《吾》、つまり、主幹無き蘖の《吾》であって、其処には Tautology(トートロジー)の罠が渦巻いてゐるだけだぜ。

——渦巻かぬ《吾》とは、はて、何なのかね？

——渦巻かぬ《吾》？　つまり、《吾》はそれが《存在》する限り Tautology の渦巻きの中にあると？

——へっ、当然だらう。今までに此の世に《存在》した森羅万象の中で、『Eureka(ユリイカ)！　《吾》を見つけたぞ！』と、全宇宙に響き渡る叫び声をあげた《存在》が、一度でも《存在》したとでも思ひ看做してゐるのかね？

——釈迦牟尼仏陀はどうかね？

——無を、諸行無常を、生老病死を語っただけぢゃないかね？

——基督は？

——磔刑にされた無惨な姿を今も衆目に曝し続け、《生》の「奇蹟」を《生者》に刷り込み続けてゐるだけさ。

——ムハンマドは？

——日常の、つまり、夢でしかないかもしれぬ日常に戒律といふ名の生きる作法を与へた基督教の分派の一つに過ぎぬのではないかね？

——それでは神は？

——へっ、此の世が神の夢でしかないとしたならば？

——神の夢とは、即ち、現実の事ではないのかね？
——否。神の夢は、此の世の森羅万象には与り知らぬ、唯の虚妄に過ぎぬのさ、へっ。
——さうすると、《世界》もまた、その主幹をぽきりと折られた蘖の《世界》といふ事か！
——当然だらう。
——さうすると、真実とは一体何なのだ！
——お前が現に対峙してゐる《吾》と《世界》の事さ。
——しかし、それはいづれも蘖の《もの》でしかないのだらうが！
——ふっ、ならば、Big Ban へまで再び此の世を引き戻してみるかね？　さうして見ないと、詰まる所、お前は納得行かぬのだらう？
——それでは一つ尋ねるが、そもそも科学は真かね？
——さあね。
——さあね？　すると、科学すら真ではないといふのかね？
——ああ。その通りさ。科学は、此の世のからくりを理論立てて、それを実証してみるだけであって、それ以上でもそれ以下でもない。つまり、科学は、何故に《世界》がこのやうに《存在》するのかといふ《存在》の根本の解答を、つまり、その因を解き明かす時は永劫に訪れないのさ。唯、科学は《世界》をなぞるのみなのさ。
——しかし、「現存在」を初めとする此の世の森羅万象は、全て、「《吾》は《吾》である」とは言ひ切れず、その自同律の不快と言はれるその不快をぢっと噛み締めながら、《吾》が此の世の淵源より発生した《もの》の一つである事を切望してゐる《もの》の筈だが、それは全て《吾》の、ちぇっ、蘖の《吾》の虚妄に過ぎぬといふ事かね？　ざまあないぜ！
——それで《吾》は満足なのかい？
——満足？　何に対する満足かね？
——蘖の《吾》の《存在》自体が虚妄に過ぎぬといふ事さ。
——何処のどいつが、それに満足できるといふのか！
——しかし、殆どの「現存在」はその日が安寧に過ぎれば、それで満足ぢゃないかね？
——否。此の世の《存在》はそれが如何なる《もの》であっても、《存在》に対して或る猜疑心を抱いてゐる。
——つまり、それは、蘖の《吾》が《吾》でしかなく、それで《吾》はいいのかといふ存在論的な猜疑心だらう？
——さて、存在論的猜疑心とは、約めて言へば「不安」の事と違ふのかい？
——確かに其処には一理あるが、「不安」なんぞは《存在》する森羅万象が密かに抱くごくありふれた《もの》に過ぎぬ。
——すると、お前の言ふ存在論的猜疑心とは何の事かね？
——《吾》が喪失する事さ。
——《吾》の喪失？　へっ、《吾》はそもそもが蘖の《吾》でしかなく、《吾》を既に喪失してゐるのぢゃなかったっけ？

――それぢゃ、一つ尋ねるが、お前は、己の事を《吾》と看做さないのかい？
――ふむ。
――蘖の《吾》だらうが、一度《存在》しちまへば、《吾》といふ観念はその《存在》に宿る筈だ。
――はて、《吾》の観念が宿るとは一体全体何の事かね？
――字義通り《吾》といふ観念が《存在》に宿るのさ。
――すると、《存在》といふのは、《吾》といふ観念の乗り物に過ぎぬといふ事かね？　それでは今迄語ってゐた蘖の《吾》と大いなる矛盾を来たすのぢゃないかい？
――では、一つ尋ねるが、《吾》といふ観念は、「先験的」と思ふかい？
――う……む。「先験的」ね。そもそも《吾》が何なのか未だに解からぬこの蘖の《吾》に《吾》といふ観念が「先験的」かどうかなんて解かる筈がない。
――《吾》とは自然発生的に生じる《もの》といふ根拠がない以上、《吾》は「先験的」に《存在》に宿り、そして、例へばそれを「神の斧」と名付ければ、その「神の斧」でぶった切られた《吾》は、それでも此の世に適応するが如くに新たな《吾》を《存在》に見出し、蘖の《吾》は再びその《存在》に何事もなかったやぅに《存在》、つまり、此の世の森羅万象に宿る。
――すると、「神の斧」でぶった切られた《吾》は一体全体何と呼ぶのかね？
――当然、《吾》さ。
――さうすると、《吾》の連続性は失はれる事になるが、それは大いなる矛盾ではないのかね？
――ふっ、《吾》はそもそも非連続的な《もの》さ。
――《吾》が非連続？　だが、大概の、例へば「現存在」は《吾》を非連続なんてこれっぽっちも思ってはゐないぜ。
――それこそ大いなる矛盾だらう。《吾》は既に《吾》が《存在》してゐる時には蘖の《吾》、つまり、《吾》は、そもそも非連続的な《もの》なのに、それを無理矢理に連続するが如く看做す誤謬に《吾》は拘泥する。そんなものしょんべんでもひっかけちまへばいいのさ。そもそも《吾》が《吾》の思ふやうに《存在》する事は《他》には偉い迷惑な話で、そんな傲慢な《吾》は《他》によって最終的には殺戮されるのが落ちさ。
――つまり、蘖の《吾》は、此の《世界》に巧く適応出来た《吾》の総称かね？
――否。此の世の《存在》全てに宿る《もの》の事だ。
――つまり、お前にとって《吾》は《存在》に先立つのだな。
――さう。何を置いても先づ《吾》が《存在》する。
――そして、その《吾》は、例へば「神の斧」でぶった切られ、さうして已む無く蘖の《吾》を芽生えさせ、その蘖の《吾》を後生大事に成長させると、途端に再び「神の斧」が『それは違ふ』と言ってゐるが如くにその蘖の《吾》をぶった切り、それでも《吾》は存続するべく、新たな蘖の《吾》を芽生えさせ、そして、それをまた、「神の斧」にぶった切れを何度も繰り返す事で、《吾》は此の世を生き延びて、《吾》は、そもそも一貫

性がない非連続的な《もの》として、此の世の《世界》に《存在》し、巧く順応してゐる「奇蹟」の事の総称がお前の言ふ《存在》に、森羅万象に宿る《吾》かね？

——《吾》が《存在》してゐる事を「奇蹟」と看做した処で、《吾》は蘖の《吾》を《吾》といふ《存在》に見出すのが関の山だ。

——譬へ《吾》が何度も「神の斧」でぶった切られた蘖の《吾》であらうが、《吾》が此の世に《存在》してゐる事実は「奇蹟」ではないのかね？

——ふっふっ、《存在》する《もの》はそれが何であれ全て「奇蹟」さ。

——ならば、何故に《吾》は「神の斧」でぶった切られる羽目に陥るのかね？

——ふっ、簡単さ。つまり、《吾》が冗長しないやうに《神》は《吾》をぶった切って、剪定してゐるのさ。しかし、《神》の剪定に何の理由もないがね。

——つまり、《吾》、ちぇっ、《存在》はそれが何であれ、《世界》、ちぇっ、《世界》もまた相転移を繰り返しながら《神》にぶった切られた蘖の《世界》だったが、その《世界》の中で生存する為に、そして、《吾》を《世界》に順応させる為に、《吾》は《神》が何の理由もなくぶった切る事を許容せずば、《存在》出来ぬ訳だが、さて、そもそも《吾》はさうしてまで存続するに値する《もの》かね？

——それは禁句だぜ。此の世の森羅万象に値踏みを付ける事程、虚しい作業はないぜ。つまり、此の世の森羅万象は「先験的」に《存在》する事を許されてゐる。

——しかし、自殺する《もの》も少なからず《存在》するぜ。

——それは、《吾》の存続は、只管、《吾》の《自由》に属すると傲慢にも看做しちまふ《存在》に魔が差した《吾》の愚行がさうさせる傲慢な《吾》の為せる業さ。

——つまり、《吾》が、結局の処、《吾》は蘖の《吾》、即ち、「偽り」の《吾》でしかないと、底無しの虚無に《吾》を漂はせてしまった事で、《吾》は《吾》の居場所を此の世で見失ひ、詰まる所、「えい！」とばかりに、《吾》を《死》の領域へと投身する自殺は、《世界》からの、そして《吾》からの永劫の遁走でしかないのさ。

——それでは、此の《世界》や《吾》から遁走する事は罪なのかね？

——ああ、勿論罪さ。何故って、例へば底無しの苦悩が永劫に続くが如く看做す《吾》は、《吾》である矛盾を決して許せず、そして、《世界》への、そして、《吾》への怨嗟の見せしめとして自殺して見せる愚行は、結局、《吾》の中のみで自閉した出来事でしかなく、さうして、自殺した《吾》は、永劫に時間が止まった《死》の一様相の中で、ふっ、自殺した《吾》はそんな事はつゆ知らず、自殺を遂げてしまった不幸な《吾》の甘ちゃんな処が、《世界》からの、そして《吾》からの遁走でしかなかったにも拘らず、その結果待ってゐるのは、未来永劫に《吾》である事を強要される地獄にわざわざ参る事に過ぎないといふ皮肉を行っているだけの事で、そして、苦悩の中で自殺した《吾》は、未来永劫に亙って完璧な《吾》である烙印を押されるに過ぎぬのだ。それは、つまり、《吾》が更なる蘖の《吾》となる事を已めちまったのだからな。当然の報ひだ。

——自殺が未来永劫に亙って完璧？　それは一体全体何の事かね？

——自殺した《もの》には、何《もの》も口に出しては言はぬが、「卑怯者」といふ烙印

が押されるのだ。それが、自ら《死》した《もの》が《死》した事によって、尚更強調されて此の世に残される《存在》の一様相であるが、その「卑怯者」と此の世に《生》を繋ぐ《もの》から蔑まれるその根拠に、自殺した《もの》には永劫と完璧といふ皮肉な事態が必ず起きる定めにあるのだ。つまり、変容する蘖の《吾》から遁走し自殺した《吾》は、生き残る《吾》から一斉に「卑怯者」と看做される故に、つまり、《生》を自らぶった切る愚行の罪として、自殺した「卑怯者」は、未来永劫に亙って完璧な「卑怯者」として、自殺に及んだその《存在》は、それが何であれ最早、遁れられぬ偏見の下、《生者》に蔑まされる宿命を自ら呼び込んだに過ぎぬのさ。

——ふむ。完璧な「卑怯者」か……。ふっ、「卑怯者」の完璧とは、余程の「卑怯者」なのだらうな、ふはっはっはっはっ。

——当然だらう。自殺しちまった《もの》は、或る種、此の世といふ地獄から遁れる事で彼の世といふ更なる凄惨な地獄に未来永劫《吾》である事を已められずにゐなければならぬ定めを自ら進んで選んだのだからな。

——つまり、自殺は地獄行きかね？

——勿論、私は今や地獄が生き生きと復活する事を予言する。

——地獄では《吾》は永劫に亙って、やはり《吾》かね？

——当然だらう。地獄で《吾》が永劫に《吾》でなければ、地獄の責め苦を受ける《もの》は一体何なのかね？

——成程。地獄の責め苦を受けるのは必ず《吾》でなければならぬか……ふむ。それが、お前の言ふ「卑怯者」の完璧なのか、成程ね。ところで、一つ尋ねるが、今、何故に地獄の復活なのかね？

——現世での《吾》がいづれも蘖の《吾》、つまり、「神の斧」で理由なくぶった切られた《吾》から芽生える蘖の《吾》が《存在》する事を保証する為さ。

——蘖の《吾》の《存在》の保証とは、へっ、詰まる所、お前にとってすら蘖の《吾》が《吾》である確信がないといふ事の表明ではないのかね？

——さうさ。何《もの》も《吾》が《吾》として《存在》してゐる確信はない筈だぜ。

——ならば、何故に地獄の復活なのかね？

——地獄では《吾》は徹底的に《吾》でしかないからさ。

——つまり、地獄において《吾》は連続してゐると？

——否、地獄においてもその極悪非道の限りを尽くした責め苦によって《吾》なんぞは簡単にぶち切れるが、地獄の責め苦をじっくりと味はひ尽くす為に一度ぶった切られた《吾》は、残酷にも地獄においては再び《吾》として繋ぎ合はされるのさ。

——つまり、現世において、「神の斧」に理不尽に理由なくぶった切られ蘖の《吾》として《吾》が《存在》するのは、《吾》が《吾》である事で、心底味はひ尽くさねばならぬ苦悶を緩和してゐるといふ事かね？

——それも一理あるが、《吾》は本来《吾》以外の《もの》に変容する事を渇望して已まない《存在》である故に、《吾》は「神の斧」でぶった切られる事で、新たな《吾》の到

来を待ち望んでゐるのが本心なのさ。

——つまり、「神の斧」はMessiah(メシア)、若しくは、希望の別称かね？

——《吾》が理由なく「神の斧」でぶった切られる事が、希望と言ふのは何処かをかしいだらう。むしろ、「神の斧」でぶった切られる事は、《存在》の躓きの石とした方がぴたりとくるがね。

——《存在》の躓きの石かね？　つまり、《存在》の躓きの石に躓いた《存在》は、既に《吾》とは違った何かに変化してゐるといふ事でいいのかね？

——否！　《存在》の躓きの石で躓いた《存在》、つまり、《吾》は、最早、そのままぶっ倒れたままに起き上がれずに、また、起き上がることは土台不可能事で、一度、その躓きの石に躓いてしまった《吾》は、起き上がる為に、躓いた《吾》を蜥蜴の尻尾切りのやうにぶった切って殺してしまひ、新たなる《吾》の出現を渇望するのが《存在》の、《吾》の本心なのさ。

——その《吾》を《吾》として保証する為に地獄の復活ね。ふはっはっはっはっ。ちゃんちゃらをかしい！

——しかし、蘖の《吾》といふ考へ方自体が独りよがりの独断でしかない。つまり、《吾》が《吾》である事は、地獄を復活する迄もなく、また、「神の斧」など理不尽な事を考へる迄もなく、《吾》は「先験的」に《吾》としてあるのさ。

——「先験的」？　《吾》とは「後天的」な《もの》ではないのかね？

——《吾》は何《もの》にも先立つ「先験的」な事柄さ。

——それぢゃ、これ迄、論じてきた蘖の《吾》は単なる吾等の夢想でしかないといふ事だね。

——否！　《吾》は、やはり、「神の斧」で理由なく理不尽にぶった切られた蘖の《吾》として此の世を生き延びるしかないのさ。

——何故にかね？

——《吾》が此の世に順応する為にさ。

——つまり、生存競争を生き延びる為には、使い古された襤褸屑の《吾》は切り捨てて、新たな蘖として芽生える《吾》に宿ってゐるに違ひない生命力を渇望する外に、此の世は生き延びられぬ、疑似地獄が現世なのさ。

——つまり、あるかもしれぬ蘖の《吾》の生命力を期待する外に、最早、《吾》は《存在》出来ぬ程に衰弱しちまったといふ事かね？　へっ、そして、そんな羸弱な《吾》が《存在》してゐる現世が疑似地獄など、ちゃんちゃらをかしいぜ。はっきりと現世は地獄そのものとはっきり言明すればいいぢゃないか？

——此の世が地獄かどうかは、結局の処、主観の問題でしかなく、現世を極楽と看做してゐる輩も少なからずゐるのが、現実だらう。

——だが、お前は現世を来世と地続きの地獄として看做したくて仕方ない。違ふかね？そして、お前は、此の世の開闢したその刹那に地獄としての此の宇宙が誕生したと思ふ事で自己を慰撫したくて仕様がないのだらうが！

——自己を慰撫してはいけないのかい？

——否、そんな事はどうでもいい事さ。唯、お前はお前自身が此の世で一番可愛い《存在》と思ひ為したいだけなのさ。さうして、自己正当化する事で、「神の斧」で、ぶった切られた蘖の《吾》が芽生えるその非連続した《吾》を恰も連続した《吾》と看做したいだけなのさ。

——それで、別に構はぬではないか？

——ああ、さうさ。別にお前の勝手さ。しかし、ならば、今後、一切不変であって諸行無常な此の世の矛盾に対して不満を口にしちゃならないぜ。

——ちぇっ、私は今まで此の世に対して不満をぶちまけた事はこれっぽっちもないぜ。

——ふっ、その言ひ種の底流にお前の此の世に対する憤懣がぷんぷんと悪臭を放ってゐるのさ。

——しかし、此の世に《存在》する森羅万象で《吾》である事に満足してゐる《存在》なんぞ皆無だらう？　それ故に、「神の斧」が《存在》し、《吾》が蘖の《吾》を芽生えさせる事で否応なく《吾》は変容し、さうして最良の《吾》でありたいと《吾》は絶えず渇望する《存在》であるのぢゃないかね？

——その最良の《吾》の出現の手助けが「神の斧」による《吾》の断絶かね？　つまり、お前にとって《吾》が蘖の《吾》としてのみ此の世に《存在》するのは、《神》の御加護の為といふ事かね？　莫迦らしい！

——それでは、何故に《吾》は「神の斧」でぶった切られなくちゃならないのかね？

——それは、先刻言った通り、《吾》の冗長を阻む為さ。

——つまり、《吾》は「先験的」に冗長するやうに仕組まれてゐて、それ故に生存競争が《存在》するのだらうが、しかし、さうして現世で生き残った《存在》は、止めどなく自己増殖し、その結果、《吾》は何《もの》にも代へ難い《存在》へとのし上がる筈だが、しかし、《神》はそんな《存在》の足を掬ひ、「神の斧」で《吾》をぶった切る。それは一体全体何なのかね？

——それは《神》がそもそも此の世の森羅万象が気に食はぬからだらう。

——ちぇっ、《神》が此の世の森羅万象の《存在》が気に食はぬとは——。ならば、何故に《吾》は此の世に《存在》するのか！

——詰まる所、そんな事は自分で考へろ、と、《神》は言ってゐるのさ。

——そして、《神》は「神の斧」で《吾》をぶった切る？

——さう。さうして《神》は己が完璧と考へる《存在》の創出を願って已まないのさ。それは、また、《吾》にとっても願ったり叶ったりの事だらう？

——つまり、《存在》は、絶えず原点回帰、否、母胎回帰を繰り返す事で、何か極上の《存在》として此の世に屹立する完璧な《存在》を望むべく、此の世の開闢時から《吾》は絶えず蘖の《吾》になる事を仕組まれてゐるといふ事か——。ふはっはっはっ。

（完）

睨まれし

闇の中であればある程その鋭い眼光を光らせ、ぎろりと此方にその眼球を向けてゐる《そいつ》と初めて目が合ったのは、私が何気なしに鏡を見たその刹那のことであった。鏡面に映し出された私の顔貌の瞳の中に見知らぬ《そいつ》の顔が映ってゐるのに気付

いてしまったのがそもそもの事の始まりなのであった。
《そいつ》と目が合った刹那、《そいつ》はにやりと笑ったやうな気がしたのである。それは私の思ひ過ごしかもしれぬが、《そいつ》は確かににやりと笑ったのである……。多分、《そいつ》は私が見つけるのを今の今までぢっと黙したまま待ち続けてゐたに違ひないのだ。
——やっと気付いたな。
その時《そいつ》はそんな風に私に対して呟いたのかもしれない。一方、私はといふと、馬鹿なことに《物自体》ならぬ《私自体》なるものを《そいつ》に見出してしまったのであった。
——俺だ！
私の胸奥の奥の奥で大声で叫んでゐる私が其処にはゐたのであった。
と、その刹那の事であった。私は不覚にも卒倒したのであった。その時の薄れゆく意識の中で私は
——Eureka！
と快哉を上げてゐたのかもしれなかったが、本当のところは今もって不明である。
爾来、私は《そいつ》の鋭き眼光に絶えず曝され睨まれ続けることになったのであった。吾ながら
——自意識過剰！
と、思はなくもなかったが、私の意識が《そいつ》の存在を認識してしまった以上、私が《そいつ》から遁れることなど最早不可能なのであった。
とにかく《そいつ》は神出鬼没であった。不意に私が見やった私の影に《そいつ》のにたりと笑った相貌が現はれたかと思ふと直ぐにその面を消し、そして私の胸奥で叫ぶのであった。
——待ってたぜ。お前が俺を見つけるのを！
また或る時は不意に私の背後でその気配を現はし、にょいっと首を伸ばして私の視界にそのいやらしい相貌を現はすのであった。虚を衝かれた形の私はといふと吾ながら不思議なことにそれに全く動ずることもなく唯にたりと笑ふのみで、恰も《そいつ》が私の背後にゐることが当然と言った感じがするのみであった。これは今にして思ふと奇怪なことではあったが、そもそもは私自身が《そいつ》の出現を待ち焦がれてゐたと今になっては合点が行くのであった。
——ふっふっ、到頭俺も気が狂(ふ)れたか？
などと自嘲してみるのであったが、《そいつ》から遁れる術は事此処に至っては全くなかったのである。
それは唯私が私に対して無防備だったに過ぎぬのかもしれぬが、しかし、私は私で《そいつ》と対峙することを嫌っていたかと言へば、実のところその反対であったのである。今にして思へば私は《そいつ》と四六時中対面してゐたかったのが実際のところであっ

たのだ。しかし、暫く《そいつ》は私の不意を衝かない限り現はれることはなかったのである。もしかすると《そいつ》は私を吃驚させて独り面白がりたかったのかもしれぬが、私は不意に《そいつ》が現はれても一向に驚かなかったのであった。つまり、それは私が《そいつ》に恋ひ焦がれてゐた証左でしかないのである。

私がてんで驚かないので《そいつ》が私の周りをうろちょろすることは或る時期を境にぴたりと已んだが、しかし、始末が悪いことに何と《そいつ》は私の瞼裡に棲みついてしまったのであった。つまり、裏を返せば私は瞼を閉ぢさへすれば《そいつ》のにたりと笑ったいやらしい顔と対面出来るやうになったのである。

——また笑ってゐやがる！

——へっ、お前が笑ってゐるからさ。このNarcist(ナルシスト)めが！

——ふっふっふっ。それはお前だろ、俺の瞼裡の闇に棲みつきやがってさ。

——だって「私」を映す鏡は闇以外あり得ないだらう。

——そもそも「私とは何ぞや？」

——それは「私」以外のものに片足を突っ込んだ「私」でない何かさ。

——「私」でない何かが「私」？

——さう。その事を一気に飛躍させて汎用化すれば《存在》は《存在》以外のものに片足を突っ込んだ《存在》でない何かだ。

——ぷふぃ。《存在》でない何かが《存在》？　矛盾してゐるぜ！

——へっへっへっ。論理は矛盾を内包出来ぬ限りその論理は不合理だといふ事は経験上自明のことだがね？

——自明の事？

——さう。矛盾は論理にとって宝の山さ。

——ふっ。矛盾がなければお前が俺の瞼裡に棲み付く必然性はないか……。ふっふっ。

——さて、ところで、人間が矛盾と言ってゐるものが矛盾であることを人間はどうやって証明するのだらう？

——矛盾であることを証明するだと？　矛盾は論理破綻すれば既に矛盾だらう？

——さう……。矛盾は論理破綻だ。しかし、論理はどうあっても矛盾する宿命にある。

——つまり、それは人間が無知であると言ひたいのかね？

——いや、無知とまでは言はないが、それはもしかすると真実かもしれない不確実性を含有した何かさ。

——へっ、にたりと笑ひやがって！

《そいつ》は私の瞼裡でいやらしくにたりと笑ひ、しかし、その眼光は尚更鋭き輝きを放ちながら私を睥睨するのであった。

それにしても《そいつ》の相貌は何と醜いのであらうか。つまり、「私」は何と醜いのであらうか——。

——つまり推定無罪と言ふ事だ——。

——推定無罪？

――さう。矛盾が矛盾であること論理破綻は推定《真実》と言ふ事さ。
――ふむ。それで「矛盾が論理にとって宝の山」と言った訳か……。そして論理は其処に矛盾を内包してゐなければ、その論理は不合理であると？
――さうさ。矛盾を内包してゐない論理は論理にはなり得ぬ論理的《がらくた》に等しい代物さ。
――論理的《がらくた》か……。しかし、論理は矛盾を内包出来る程寛容なのであらうか？
――へっへっへっ、寛容でなければその論理は下らない代物だと即断しちまった方がいい！
――つまり、論理的に正しいことが即ち不合理であると言ふ事か？
――論理が矛盾を孕んでゐると、つまり、それは今のところは論理的には破綻を来した《論理的底無し沼》にしか見えないが、しかしだ、論理に《論理的底無し沼》といふ《深淵》がなければ、人間の知は《平面的》な知に終始する外ないぜ。
――《平面的》知？
――簡単に言へば、矛盾無き論理は《平面》の紙上に書かれた言の葉に過ぎず、その言の葉に《昇華》はない。論理は論理を言霊に《昇華》出来なければそんな論理は論理の端くれにも置けぬ！
――しかしだ、それだと原理主義の台頭を認めることにならないか？
――原理主義が唱へる論理に《矛盾》は内包されてゐるのかい？
――傍から見れば原理主義は矛盾だらけなのに、原理主義者の頭蓋内にはこれっぽっちも《矛盾》は存在しないか――。つまり、《矛盾》は狂信の安全弁になり得ると言ふ事か。……しかし、《矛盾》は《渾沌》を呼ばないのかい？
――《渾沌》！　大いに結構じゃないか！
――ちぇっ、またいやらしい顔でにたりと笑ひやがって！
《そいつ》がにたりと笑ふ顔は何時見てもおぞましいものであった。即ち、「私」自体がおぞましい存在でしかなかったのである。
――「不合理故に吾信ず」といふ箴言は知ってゐるな？
――ああ、勿論。
――論理とは元来不合理な、或るひは理不尽なものさ。否、論理は不合理でなければ、若しくは理不尽でなければ、それは論理として認められはしない。
――その言ひ種はさっきと《矛盾》してゐるぜ。ふっふっふっ。
――ふっ、だから論理は《矛盾》を内包してゐなければそれは論理として認められぬと言ってゐるではないか。
――その論理の正否を判断する基準は何なのだらうか？
――ちぇっ、《自然》に決まっておらうが！
――《自然》？
《そいつ》の鋭き眼光は更に更に更にその鋭さを益して私を睨みつけるのであった。

――《自然》以外に人間、否、《主体》の判断基準が何処にある？
――信仰は？
――ちぇっ、神の問題か……。
――ふっふっふっ、神は神であることに懊悩してゐると思ふかい？
――勿論、神だって神であることに懊悩してゐる。神すらも《存在》からは遁れやしない！
――すると、神もまた底無しの《存在》の《深淵》を覗き込んでゐると？
――へっ、神は神なる故にその《深淵》の底の底の底に棲んでゐるのさ。
――はっはっはっはっ。

それにしても《そいつ》の笑顔は悍(おぞ)ましい限りである。つまり、私といふ《存在》がそもそも悍ましいものであったのだ。

《そいつ》は更にその鋭き眼光を光らせ私の瞼裡で私をぎろりと睨み付けるのであった。

――ならば、神は神なるが故に《永劫の懊悩》を背負ってゐるといふのか？
――勿論さ。神たるもの《永劫の懊悩》を背負へなくて如何する？
――つまり、神ならば《永劫の懊悩》を背負へ切れると？
――へっ、背負ひ切れなくて如何する？　《永劫の懊悩》で滅ぶやうな神ならば《存在》しない方がまだましさ。
――つまり、神はその《存在自体》がそもそも《存在》に呪はれてゐると？
――ああ、神は《存在》しちまったその時点で既に呪はれてゐるのさ、その《存在自体》にな。くっくっくっくっ。

いやらしい嘲笑であった。《そいつ》は何といやらしい嗤ひ方をするのであらうか。

――つまりだ。神は自ら《存在》することで生じる《矛盾》を全て引き受けた上でも泰然として、そして《存在》の《象徴》として《自然》に君臨するのさ。
――自然に君臨するだと？　逆じゃないのか？　《自然》が神共に君臨するんじゃないのかね？
――《自然》もまた神だとすると？
――へっ、八百万の神か――。
――哀しい哉、人間は生(なま)の《自然》を憎悪してゐる。更に言へば、人間は《自然》を一時も目にしたくないのさ、本音のところでは。しかし、《現実》に絶えずその身を曝さざるを得ぬ。くっくっくっくっ。ざまあ見ろだ、ちぇっ。

《そいつ》が舌打ちした時の顔といったら、それ以上に悍ましいものはないのである。虫唾が走ると言ったらよいのか、私は思はずぶるっと身震ひをせずにはゐられなかったのである。

――すると、《存在》とは常に《現実逃避》を望む《もの》だと、つまり、《存在》とは常

に《現実》にその《存在》を脅かされ、へっ、そしてそれが《存在》を《変容》させる根本原因だといふのか？

——さうさ。だから《存在》は全て《夢》を見る。

——神もまた《夢》を見ると？

——ああ、勿論。

——《夢》を見ることが生理的な現象なのは勿論だが、それ以上に物理的な現象の一様相なのか？

——当然だらう。

——つまり、《夢》を見ることでその前後の《夢見るもの》の、例へば質量は変化すると？

——ああ、多分な。しかし、その変化はほんのほんのほんの僅かしか変化しない為に測定は不可能さ。だが、人間が《光》を《物質》に還元する術を手にした時、初めて人間は《夢》の質量を測定出来る筈だ。

——《夢見る神》の《夢》の質量もかね？

——その時点で《無限》を手懐けてゐれば、当然測定可能だ。

——やはり神の問題には《無限》は付いて回ざるを得ないのか——。

——ふん、《無限》に恋焦がれてゐるのに、これまた如何した？

——本当のところ、《無限》を渇仰してゐるのに、いざ《無限》を前にすると、へっ、哀しい哉、《無限》に対して何やら不気味な何かを、多分、それは《不安》と名指されるべき《もの》に違ひないが、その《不安》を感じて足が竦み慄いてしまふのさ。

——それは当然至極のことさ。《無限》を恐れ慄くのは《存在》にとっては《自然》な事だ。

——《自然》な事？

——ああ、《存在》は《自然》に《無限》の面影を見出してしまふ習性があるからな。

——つまり、《存在》は《自然》に絶えず追ひ詰められてゐると？

——ああ、《存在》は《変容》することを《現実》といふ《自然》に強要されてゐる。

——《存在》の逃げ道は？

——無い。

——へっ、これっぽっちも無いのかね？

——逃げ道など探さずに敢然と《存在》が《存在》する《現実》に対峙してみたら如何かね？

——ちぇっ、それが至難の業だと知ってゐるくせに！

——はて、何故《現実》に対峙することが至難の業なのかね？

——絶えず《現実》といふ《自然》に《吾》が試されるからさ。

——ふっふっふっ。《吾》とはそんなにも繊細な《存在》なのかね？

その時《そいつ》は眼球をゆっくりと此方に向け、私の内界全てを一瞥の下に暴き出したかの如く《そいつ》はしたり顔で私を嗤ったのであった。

——それが不可能だと十二分に解かってゐるくせに《吾》は《吾》ならざる《吾》を絶

えず渇望してゐなければ最早一時も《吾》たる事に我慢がならぬ、それでゐて《吾》ならざる《吾》に対しては疑念に満ち満ちた、それは何とも厄介な代物なのさ、《吾》とは。

――《吾》は《吾》に対してそんなに厄介な《もの》かね？

――ああ、《吾》は一筋縄では行かぬ厄介この上ない代物だ。就中（なかんづく）《吾》が《吾》に対して抱く猜疑心、こいつは何とも度し難い――。

《そいつ》はその刹那、にたりと嗤ひ、かう呟いたのであった。

――《吾》とはその《存在》の因子として先験的に猜疑心を授けられてゐる《存在》なのかね？

――《吾》が滅する定めである限りさうに違ひない。

――つまり、その何とも厄介な代物を《吾》と名付けたはいいが、その実《吾》であることに我慢がならず、しかし、さうでありながらも実のところは《吾》は絶えず《吾》の壊滅に怯えてゐるのじゃないかね？

――だからといって《吾》は《吾》であることを止められない。

――くっくっくっくっ。《吾》とは随分身勝手な《存在》なのだね。くっくっくっくっ。《吾》が《吾》であることが我慢ならず、それでゐて《吾》の壊滅には絶えず怯えてゐる。ちぇっ、何とも《愚劣》極まりない！

《そいつ》は吐き捨てるやうに、しかしながらそれでゐて《そいつ》自身に向かって「《愚劣》極まりない！」と言ったかのやうであった。

――《存在》は詰まる所《愚劣》な《もの》じゃないかね？

――くっくっくっくっ。その通りだ。《存在》はそもそも《愚劣》極まりない！　《愚劣》極まりないから論理は尚更矛盾を孕んでゐなければならぬのさ。

――つまり、《存在》そのものが矛盾であると？

――へっ、何処も彼処も矛盾だらけじゃないか！

――だからと言って《吾》であることを一時も止められやしないんだぜ。嗚呼、何たる不合理！

――そもそもお前の言ふ合理とは何なのかね？　つまり、一＝一が成り立てば、それが合理なのかね？

私は其処で、私の頭蓋内の闇にぽつねんと呪文の如く『吾＝吾』といふ等式を思ひ浮かべたが、それは束の間のことで、直ぐ様『吾＝吾』といふ《愚劣》極まりない等式としてのその表象を唾棄したのであった。

――自同律が諸悪の根元だといふことはお前にも自明のことだね？

《そいつ》は私を嘲笑ふやうにさう呟いたのであった。

――しかし、此の世に《存在》する限りにおいては自同律は持ち切らないといけない。それがどんなに不快であってもだ。

――くっくっくっくっ。別に持ち切らなくても構はないのじゃないかね？

――如何して？

——如何足掻いたところで《吾》は《吾》でしかないからさ。
——《吾》が《吾》であることを全肯定せよと？
——ああ。
——へっ。それは《吾》が《吾》であることを全否定せよと言ってゐるのと同じことじゃないかね？
——くっくっくっくっ。その通りさ。土台《吾》が《吾》であることを全肯定するには先づ《吾》が《吾》を全否定し尽くさねばその糸口すら見つからない。くっくっくっくっ。《吾》そのものがこれ程矛盾に満ちてゐるにも拘はらず、《吾》に対して合理を求めるのは最も不合理この上ないことじゃないかね？
——「不合理故に吾信ず」——。
——さう、《吾》は先づ《吾》を信じてみたら如何かね？
——ふっ、《吾》を信ずる？　これは異なことを言ふ。「不合理故に吾信ず」といふ箴言は、《存在》のどん詰まりに追い込まれたその《存在》の断末魔の如き呻き声でしかないのさ。つまり、《吾》とは《吾》に対して信が置けぬ《愚劣》極まりない、つまり、《吾》対しては猜疑心の塊でしかないのさ。
——その自己否定こそ己の《存在》に対する免罪符になるかもしれぬといふ《愚劣》極まりない打算が働いてゐるのじゃないかね？　くっくっくっくっ。
——何に対する免罪符といふのかね！
——《死》に決まってるじゃないか、くっくっくっくっ。
——《死》に対する免罪符？　これまた異なことを言ふ。《死》も此の世に《存在》する以上、自己否定からは遁れられやしないぜ。
——《死》が《死》を自己否定したところで、それは結局《死》でしかないんじゃないのかね？
——否！　《死》が自己否定すれば《生》に行き着かなければならぬのさ。
——それはまた如何して？
——さうでなければ《生》たる《存在》が浮かばれないからさ。
——別に《生》が浮かばれる必要なんぞ全くないんじゃないかね、くっくっくっくっ。《そいつ》の言ふ通り、《生》が此の世で浮かばれる必要など、これっぽっちも無いことなど端から解かり切ってゐることなのに、私は《そいつ》のいやらしい嗤ひ顔を見てると如何しても反論せずにはゐられやしなかったのであった。
——否！　《生》は何としても此の世で浮かばれなければならぬ。それは《死》がさう望んでゐるに違ひないからさ。
——それは《生者》だけの論理だらう？
——《生者》が《生者》の論理を語らなければ何が《生者》の論理を語るといふのか？
——《死》がちゃんと語ってくれるさ、くっくっくっくっ。
——《死》は《生》あっての《死》だらう？
——だから如何したといふのか？

——ああ、成程！　そうか！　《生》が《死》を、《死》が《生》を語る矛盾を抱へ込まなければ、《存在》の罠の思ふ壺といふことかーー。

——はて、《存在》の罠とは何のことかね？

——自同律さ。

——自同律？

——例へば《吾》＝《吾》が即ち《存在》の罠さ。

——くっくっくっくっ。漸く矛盾を孕んでゐない論理は論理の端くれにも置けぬといふことが解かって来たやうだな。

——しかし、《吾》は《吾》＝《吾》でありたい。これは如何ともし難いのさ。

——それは当然さ。《存在》しちまった以上、《吾》は《吾》でありたいのは当然のことさ。しかし、それが大いなる罠であるのもまた事実だ。

——事実？

——ああ、事実だ。

——論より証拠だ。何処が如何事実なのか答へ給へ。

——数学が《存在》する以上、《吾》が《吾》たり得たい衝動は如何ともし難い。

——数学ね。

——数学では条件次第で自同律なんぞは如何解決しようが自由だ。

——しかし、大概の《もの》は《一》＝《一》の世界が現実だと看做してゐるぜ。

——其処さ。《存在》の罠が潜んでゐるのは。

——一つ確かめておくが、お前は数学を承認するかね？

——ふむ。数学の承認か……。実のところは迷はず「承認する」と言ひ切りたいのだが、さて、如何したものだらうかーー。ふむ。一先づかう言っておかう。「世界の一様態として数学を承認する」と。

——世界の一様態？

——ああ。世界認識の方法として数学もあり得るといふことさ。

——しかし、数学が全てではないと？

——当然だらう。数学が支配する世界なんぞ悍ましくて一時もゐられやしないぜ、ふっ。

——しかし、自同律を語るには数学は便利だぜ。

——といふと？

——例へば《一》＝【《一》のx乗(xは0，1，2，3……)】が成り立つ。

——だから？

——《一》の零乗は《一》に帰するといふ、一見すると奇妙に見える自同律が成り立つのさ。

——さて、それが如何したといふのか？

——《一》の零乗だぜ。《死》の匂ひがすると思はないかい？

——といふと？

——つまり、《死》は全《存在》に平等に賦与されてゐるからね。だから、xの零乗が全

て《一》に帰すことに、平等なる《死》といふ《もの》の匂ひが如何してもしてしまふのさ。

——さうか……。これは愚問だが、《死》の様態は《死》以外にあり得るのだらうか？

——《死》の様態？

——さう。《生》が完全に《死》へ移行した時、その《死》の様態は《死》以外にあり得るのだらうか？

——それは俗に言ふ「死に様」ではないよな。x の零乗が全て平等に《一》に帰す如き故の《死》の様態だよな。

——ああ。単なる「死に様」ではない。「死に様」には未だ《生》が潜り込んでゐるが、完全に《死》した《もの》の様態は、不図、平等なのかなと思っただけのことさ。

——くっくっくっ。それは《生者》が、若しくは此の世に《存在》した《もの》全てが死の床に就いた時に自づと解かることだらう。それまで《死》するのを楽しく待ってゐるんだな。

——それでは極楽浄土と地獄があるのは如何してだらう？

——くっくっくっ。それはハミルトンの四元数（しげんすう）とか八元数とか一見晦渋に見える《もの》を無視すると、数に実数と虚数が《存在》するからじゃないのかね？

——実数と虚数？　それじゃ、複素数は何かね？

その刹那、《そいつ》は更に眼光鋭く私を睨み付けたのであった。

——複素数こそ《生》と《死》が入り混じった此の世の様態そのものさ。

——複素数が此の世の正体だとすると、それは実数部が《生》で虚数部が《死》を意味してゐるに過ぎぬのじゃないかね。さうすると極楽浄土と地獄は複素数の何処にあるのかね？

——ちぇっ、下らない。複素数の実数部が《生》で《死》は零若しくは8さ。虚数部は死後の《存在》の有様に過ぎぬ。

——さうすると、《死》の様態は＋8個、即ち8の二乗個あることになるが、それを何と説明する？

——此処で特異点を持ち出してくると如何なるかね？

——特異点？　つまり 1/0＝＋8と定義しちまへといふ乱暴な論理を展開せよと？

——先にも言った筈だが、矛盾を孕んでゐない論理は論理たり得ぬと言ったらう。

——しかし、それは独り善（よ）がりの独断でしかないのじゃないかね？

——独断で構はぬではないか。

——さうすると、8の零乗も《一》かね？

——さう看做したければさう看做せばいいのさ。所詮、此の世に幸か不幸か《存在》しちまった《もの》は、その内部に特異点といふ矛盾を抱へ込んでのた打ち回るしかないのさ。さうして《生》を真っ当に生き切った《もの》のみが零若しくは8といふ《死》

へと移行し、さうしてその時、ぱっと口を開けるだらう《零の穴》若しくは《8の穴》を《死者》は覗き込むのさ。其処で目にする虚数の世界が『死霊(しれい)』の世界に違ひないのさ。

——埴谷雄高かね？

——さう。するとお前も霊の《存在》は認める訳だね。

——ああ、勿論だとも。

その時の《そいつ》のにたり顔ったら、いやらしくて仕様がないのであった。すると《そいつ》は

——しかし、虚数-i若しくは-j若しくはkは自身を二乗するとマイナス一へと変化する。これをお前は何とする？

と、私に謎かけをしたのであった。

——ふむ。マイナス一、つまり、負の数ね。それは、影の世界のことではないのかね。

——ご名答！　闇の中にじっと息を潜めて蹲ってゐる影の如き《もの》こそ負の数の指し示す《存在》の様態だ。

——それは透明な《存在》と言ひ直してもいいのかい？

——へっ、別にどっちだって構ひやしない。土台、全ては闇の中に蹲って《存在》する負の数といふ《陰体》なのだからな。

——《陰体》？

——つまり、光が当たらなければ見出されぬままに未来永劫に亙って闇の中に蹲って息を潜めて《存在》し続ける《もの》を《陰体》と名指しただけのことさ。

——さうすると、極楽浄土と地獄とは一体何なのかね？

——くっくっくっ。《死》した《もの》が《零の穴》若しくは《8の穴》を覗き込んだ時に目にする絶対的に《主観》の世界像の事に決まってをらうが。

——《死》んだ《もの》が《零の穴》若しくは《8の穴》を覗き込んだ時に目にする絶対的に《主観》の世界像？

——つまり、死んだ《もの》が《吾》の死後に《吾》が棲む《世界》を決めるのさ。それも《死》した《もの》は最早過ぎ去ってしまった《吾》の《生》のみを頼りにして其処を極楽浄土か地獄かを絶対的に主観的に判断しなければならぬといふ皮肉！　例へば死んだ《もの》が彼の世を地獄と判断すれは其処は地獄以外の何《もの》でもない。へっ、地獄も住めば都だがね。換言すれば極楽浄土と地獄は同位相にある、へっ、もしかすると同じ《世界》を、或る《もの》は極楽浄土と看做し、或る《もの》は其処を地獄と看做すに過ぎぬのかもしれないといふ事さ。

——すると、極楽浄土と地獄が同じく絶対的に《主観》の世界像ならば、閻魔大王も最後の審判も全て一人芝居に過ぎぬぢゃないかね？

——さうさ。《吾》を最終的に裁けるのは、結局、《吾》のみさ。さうして、《死》した《もの》は全て《零の穴》若しくは《8の穴》を覗き込まなければならぬ。

——如何あっても《死》した《もの》はそれが何であれ《零の穴》若しくは《8の穴》を覗き込まなければならぬ定めなのかね？
——ああ、残念ながらね。
——それは何故かね？
——《死》は徹頭徹尾独りの《もの》だからさ。此の世の様態たる実数若しくは複素数の実数部の世界から出立した死んだ《もの》は、或る意味量子論的に《零の穴》と《8の穴》の二つの様態の両様にあり、死んだ《もの》が《零の穴》を覗き込んでゐるか、または《8の穴》を覗き込んでゐるかは、《死》した《もの》の絶対的な《主観》に属する、つまり、《死》した《もの》の絶対的に主観的な様態次第といふことだ。つまり、虚数を嘗ては実数であった《吾》がその死後如何看做すかが《死》の位相であらゆる《もの》は試される。
——へっ、つまり、《死》とは零と8の状態が《重なり合った》、へっ、零と8が如何《重なり合ふ》のか甚だ疑問だがね、しかし、《死》とは無理矢理にでも零と8が《重なり合ふ》状態のことだね？
——さう看做して結構だ。しかし、その零と8が《重なり合ふ》状態が《吾》の《生》次第で如何様にも変容することは理解出来るね？
——つまり、《生》次第で《死》の様態は如何にでもなるといふ事だね。そして、《死》は絶対的に主観的な世界像としてしか《死》した《吾》にはその像を結ばぬといふことだらう？
——さう。そして、《死》の萌芽は既に《生》に潜んでゐる。
——それは当然だらう。複素数には零も8も含まれるんだからな。
——それに加へて特異点も複素数は内包せねばならぬ定めなのさ。
——それも定めなのかね、此の世の様態たる複素数が特異点を内包せねばならぬといふことは？
——ああ。先にも言ったやうに矛盾を孕んでゐない論理は論理の《死体》でしかないやうに、此の世の様態たる複素数は、零や8は勿論の事、其処には何としても、ちぇっ、つまり、痩せ我慢してでも特異点を内包しなければ、そもそも《存在》は《存在》出来ない定めなのさ。
　その刹那、《そいつ》はぎろりと鋭き光を放つ眼光を蔽ひ隠すやうにゆっくりと瞼を閉ぢたのであった。
——何を考へてゐる？
——へっ、何ね、死ねない癌細胞、即ち全的に《生》に移行しちまった細胞の出現こそその数多の細胞群の統一体たる《吾》の《死》の始まりでしかないこの矛盾に満ちた《生》の有様の不思議を不意に思っただけの事さ。
——死ねない癌細胞の出現は、詰まる所、自死、即ちApoptosis(アポトーシス)によって辛うじてその複雑怪奇な構造を為す臓器等を統一体たらしめてゐたその絆をぶった切ることでしかないといふ何たる皮肉！

――へっ、元来《他》の死肉を喰らふことで辛うじて《吾》の《生》を維持してゐることを考へれば、《生》は《死》無くしては成立しない事は火を見るよりも明らかだ。しかしだ、《死》すべき宿命から遁れられぬ《吾》の一部には未来永劫に亙ってこの《吾》が《吾》として《存在》することを望んで已まない《もの》が《存在》する。その夢想の具体化された《もの》の一例が癌細胞の出現だとすれば、ちぇっ、しかし、《吾》にとっては全く制御不能な癌細胞は、換言すれば、不老不死を望んで已まない《吾》が《吾》の意思とは全く無関係に《存在》してしまふ癌細胞の有様は、さて、何と説明すればいいのかね？

その刹那、《そいつ》は再び鋭き眼光を放つ目を開け、私をぎろりと睨み付けたのであった。

――ちえっ、《吾》の《存在》が未来永劫に亙って続くことを望んで已まない《吾》は、地獄にのみ棲みたいのさ。そんな《吾》なぞ好きにやらせて、放って置けばいいのさ。しかしだ。例へばだが、ちぇっ、唐突且縮めて言っちまへば、ふっ、これは飛躍的な物言ひだがね、《他》と交り合ふ性交と《死》は切っても切れない関係にある不思議が、特異点の不思議を解く鍵に違ひないとは思はないかい？

――何を藪から棒に？　まあよい。へっ、さうすると《死》もまた性交と同じく悦楽の部類に入るのかね？

――ああ。多分ね。生物史を見ると性の出現が《死》の出現と重なってゐることからして性交が悦楽ならば《死》もまた悦楽に違ひない、へっ、それは《生》にとっては忌み嫌ふ外ない「禁じられし」悦楽だがね。つまり、性交の悦楽が《死》の疑似体験の更に疑似体験の触りに過ぎぬとしたならば、性交時に仮初にもそこに架空される《吾》＝《吾》＝《他》といふ等式は、正に自同律が悦楽となり得る事象を暗示してゐるのであり、またその等式は《他》の死肉を喰らひ《他》の死肉を消化しちまふといふ食事といふ行為にも当て嵌まり、更には夢を絶対的に主観的な世界と仮定しちまへば睡眠時もまたその等式が成り立つ筈さ。なあ、その性交の悦楽は此の世に底知れぬ特異点の《存在》を暗示させる《もの》だと思はないかい？

――何故性交時の若しくは食事時の若しくは睡眠時の悦楽が一気に特異点の《存在》の暗示に飛躍してしまふのかね？

――へっ、性交において若しくは食事において若しくは睡眠時の夢において自同律も因果律も破壊、即ち自同律と因果律が自死してゐる故に《吾》は悦楽に浸れる。さうは思はないかね？

――つまり、《吾》＝《吾》＝《他》といふ等式が成り立つには因果律が壊れてゐるに違ひない特異点の世界の《存在》を如何しても暗示して已まないと？

――違ふかね？

――性交時若しくは食事時若しくは睡眠時はいづれも《吾》の行為に夢中で或る種忘我の状態に、つまり、因果律などお構ひなしのそれを特異点といってしまふが、その忘我なる特異点の状態にある事は認めるね？

――だからそれが如何した？
――つまり、忘我故に《吾》は《吾》に夢中といふ矛盾を何とする！
――くっくっくっ。矛盾なことは大いに結構ぢゃないか。つまり、それが特異点の《存在》を暗示する証左だらう？　それよりも自ら生き残り、更に尚も種を保存する事を《存在》は前宇宙に託されてゐると思はぬかね？
――はて、前宇宙とは？
――此の宇宙誕生以前の宇宙の事さ。つまり、約めて言へば「先験的」なる事さ。
――へっ、此の宇宙誕生以前もまた宇宙と呼べる代物なのかね？　それは宇宙とは全く別の《もの》と違ふのぢゃないかね？
――そんな事は如何でもよからうが。ちぇっ、それよりも数学が《存在》してしまふ事が前宇宙の名残りだと思はぬか？
――それはまた何故にさう言へるのかね？
――くっくっくっ。唯、何となくそんな気がするだけさ。ちぇっ、お前は「先験的」なる事に《存在》が全く歯が立たないのは癪に障らぬのかね？
――へっ、土台そんなこったらうと思ったぜ。「先験的」なることは勘の《存在》で巧く説明出来るかもしれぬが、しかし、第六感若しくは直感は信じられる《もの》、ちぇっ、土台、直感が《存在》の最初の砦でありまた同時に最後の砦であるならばだ、《存在》は直感に、つまり、「先験的」なる《もの》に従順たれといふことで、《吾》は《吾》といふ呪縛から遁れられる――のか？
――これは同性でも構はぬが、つまり、異性に惚れる時は如何かね？
――ふむ。惚れちまったものは如何仕様もないのは確かだが、それにしても数多ゐる異性の中からたった一人の異性に惚れちまふ不思議、つまり、存在論的に見て惚れる事は面白い対象なのは間違ひない。
――さて、惚れちまふ事は偶然かね？
――不慮の事故死と共にそれは偶然の出来事さ。
――くっくっくっ。何を嘯く？　本当のところは必然、即ち運命若しくは宿命と言ひたいのだらう？
――ちぇっ、お見通しか――。だが、主体たる《吾》は何事にも自由、つまり、あらゆる時点に偶然と呼べる余地を残しておきたいのもまた《吾》の習性さ。
――くっくっくっ。其処でだ、お前は自由かね？
――ふむ。それが解からぬのだ。
――つまり、自由の余地を残しておきたいと言ひ条、その実は惚れたのを運命等の必然に帰したいのが本音ぢゃないかね？
――さう。惚れてしまふ不思議を引き受けるのに運命的な出会ひ等と称して必然の《もの》として引き受けたいのが本音さ。
――くっくっくっ。しかし、主体たる《吾》は何時でも自由でありたい。くっくっくっ。つくづく《存在》とは矛盾に満ちた《もの》だぜ。

と、其処で《そいつ》は不意に私の瞼裡の薄っぺらな闇の中に姿を消したのであった。
それでも私は尚も閉ぢられた瞼裡の闇をじっと凝視し続けるのであった。
――さて、偶然的な出会ひと運命的な出会ひの違ひは、徹底的に主観の問題に違ひない。否、主体たる《吾》は強欲故に全てを主観の裁量に帰したいのだ。へっ、性交時若しくは食事時若しくは睡眠時の忘我の状態に《吾》が陥らうが、それでも主体たる《吾》は《吾》であること、つまり、《吾》＝《吾》＝《他》といふ恍惚の中でも絶えず《吾》を追ひ求め、「俺は俺だ！」と叫びたいに違ひない。性交に貪るように耽るのも、何《もの》にも目も呉れずに只管貪り喰ふ事に夢中な食事時も、必ず《吾》なる《もの》が全肯定され《存在》する睡眠時の夢の中でも、《吾》は《吾》を夢中で追ひ求めざるを得ぬのだ。さうして、性交後の、食事後の、そして睡眠から覚醒した時の虚脱感の中で、《吾》は《吾》の《存在》を味はひ尽くさねばならぬのだ。そして、それは偶然と必然の両様が宙づりにされた両様の《存在》する未決の状態、ちぇっ、つまり、《吾》は自由度が只管確保される可能性の中に《吾》をぶち込めておきたいに違ひない。それは、しかし、愚劣極まりない打算が働いてゐるだけではないか！　ちぇっ、主体たる《吾》は何時も因果律が壊れた可能性と言ふ耳に心地よく響く《存在》の Moratorium(モラトリアム)に唯留まりたいだけぢゃないのか。可能性と言へば聞こえはいいが、それは単に可能性が全て閉ざされその本性が露になった《現実》からの遁走に過ぎぬのではないか！
と、さう私が吐き捨てると同時に《そいつ》は完全に私の瞼裡の薄っぺらな闇の中にその気配を晦まし、はたと消えたのであった。
――姑息な！
と思ひながら、私はゆっくりと瞼を開けて世界を眺めるのであった。
――ほら、其処だ！
私はぎろりと眼球を動かし、私の視界の縁に《そいつ》がゐるのを確認すると、
――何のつもりかね？
と、私が問ふと《そいつ》がかうぬかしよるのであった。
――いや、何ね、俺も8に重なってみたくなったのさ。
――8？
――それは、つまり、俺の瞼裡には8はないと？
――瞼裡の薄っぺらな闇も闇には違ひなく、へっ、詰まる所、闇といふ闇には零と8の区別はないのさ。
――だから、また、俺の視界の縁をうろちょろし始めたと？
――ふっふっふっ。何せ此の世の裂け目としてお前といふ《存在》は目を開けたのだから、つまり、お前は此の世に誕生してその目玉を開けて世界を見てしまったのだから、零と8は、無限を内包し、既に開かれてしまったのさ。くっくっくっ。
――つまり、目玉を開けることが即ち世界を裂く行為に等しいといふ事かね？
――さうさ。盲た人には誠に誠に申し訳ないが、眼球を此の世で開けるといふ事は、世

界に《穴》を開ける事に違ひないからさ。
——《穴》？　それは《零の穴》でも《8の穴》とも違ふ《穴》かね？
——つまり、その眼球といふ《穴》は、《闇》として重なり合ってゐた零と8を仮初にも分かつ此の世に開いた《零の穴》、否、《一の穴》とでも言ふべきかな。
——へっ、《一の穴》？　そもそも《一》に《穴》はあるのかね？
——仮初にも《一の穴》は仮象は出来る筈だ。
——例へば？
——例へば、此の世が複素数ならば、当然、此の世に《存在》する森羅万象は、己を《一》として自覚しながらも、その《一》は《零》にも《8》にも仮象出来てしまふのさ。
——つまり、それは《存在》が特異点を内包してゐるからだらう？
——さう。距離が《存在》しちまふが故に《主体》の同心円状に拡がる過去世若しくは過去世に《目的》がいったん生じると未来世に変貌する不可思議な世界の中で、唯、《吾》を《吾》と自覚した《存在》のみは未来永劫に亙って現在に独り取り残されてあるのみ——。
——さうすると、現在とはそもそも世界＝内においては特異な現象といふ事になるが、さう看做してしまって良いものか……？
——ふっ。現在が此の世に《存在》する事がそもそも異常なのさ。
——異常？　ふむ。現在は去来現（こらいげん）の中では異常な事象か——ね……。
——お前はすると現在を何だと思ってゐたのかね？
——現在が此の世の度量衡だとばかり考へてゐたが、さて、その現在のみが去来現において特異な事象であるならば、ずばり聞くが、実存とはそもそも何の事かね？
——へっ、《吾》の泡沫の夢に過ぎぬ《もの》さ。
——泡沫の夢？　すると、実存とは《吾》の勘違ひに過ぎぬと？
——《吾》を《一》の《もの》と規定しなければ、《吾》は《吾》といふ《存在》に一時も堪へられなかったのさ。そして、これからも《吾》は《吾》を恰も《一》の《もの》であるかのやうに取り扱ふ以外に、最早、為す術がない！　しかしだ、《吾》が《存在》である以上、《吾》は特異点を何としても内包せずば、これまた一時も《存在》出来ぬのだ。
——それはお前の単なる独断でしかないのではないかね？
——ああ、さうさ。俺の独断に過ぎぬ。しかし、此の世が去来現としてあるならば、現在のみが特異な現象でなければ《存在》は特異点をその内部に内包出来ぬ筈なのだ。つまり、《吾》の頭蓋内の闇たる場を《五蘊場》と名付けるが、その《五蘊場》に明滅する表象群は、元来、因果律が壊れて表象されるだらう？
——これは愚問だが、0.999999999999……の小数点以下の数字、9が、例へば8回続く0.999999999999……は、ひょいっと《一》に跳躍する不思議を、不思議とは思はずに吾等は何の疑念も抱かずに《一》を簡単に《一》と呼んでゐるが、しかし、その実、誰も《零》と《一》との間にも8個の陥穽が彼方此方に口を開けてゐることすら気付かずに、

否、気付かぬ振りをしながら、へっ、《一》＝《一》などといふ嘘っ八を恰も真実かの如くに扱ふ事に慣れてしまった故に、へっ、《吾》たる《存在》は、それが何であれ、《吾》たる《存在》にばっくりと口を開けた風穴の如き穴凹を、己の内部に、ちぇっ、何気無しに不意にばっくりと口を開けた様を見出してしまふと、哀しい哉、《吾》が内心、しくしくと哀しい涙を流しながら《吾》を愛撫しようとするのだが、しかし、《吾》の内部に開いた穴凹は如何ともし難く、そして、《吾》は如何仕様もなく苦悶に身を捩りつつ、《吾》は、唯、茫然と此の世に佇立する外ない《存在》だと嫌といふ程に味はひ尽くさねばならぬ宿命にあるとしたならば、さて、お前はそんな《吾》を何とする？

——くっくっくっくっ。別に何ともしないがね。ちぇっ、下らぬ！　お前は俺に『此の宿命を呪ひ給へ』なんぞとほざかせようとしてゐるやうだが、そんな小細工には乗らないぜ。

——それでもお前は《吾》が《吾》でしかない事に堪へ得るといふのかね？

——さうさ。《存在》は此の世に《存在》しちまった以上、数多ある此の世の矛盾を死ぬ迄、ちぇっ、死んでも尚かな、まあ、どちらにせよだ、その数多の矛盾を死ぬ迄ずっと噛み締めなければならぬのさ。くっくっくっくっ。

と、その時、《そいつ》はぎょろりと私を睨み付け、更にかう続けたのであった。

——お前にはその覚悟があるかね？　くっくっくっくっ。

——覚悟がなくても《吾》が此の世に《存在》した以上、覚悟せねばならぬのだらうが、へっ。

——しかし、《吾》たる《存在》は、それが何であれ、《吾》自体がそもそも夢幻空花（むげんくうげ）な《もの》に等しい事に愕然とし、そして、誰しも《吾》に躓く外ないといふ何たる皮肉！此奴をお前は何とする？

——ちぇっ、何とするもしないも、それは、つまり、色即是空、空即是色、若しくは諸行無常なる《存在》の哀しみとして、《吾》たる《存在》は、それが何であれ甘受せねばならぬのではないのかね？

——くっくっくっくっ。《存在》の哀しみと来たもんだ。《吾》とはつくづく哀れな《存在》なんだな、ふっふっふっ。

と、《そいつ》はさう言ひ放つと、あらぬ方向へ目を向けて、其処にあるに違ひない《そいつ》にしか解からぬであらう虚空を凝視し始めたやうであった。そして、私はといふと、これまた瞼を開けて、此の世といふ名の世界を改めて眺め回してみるのであった。

すると、不意に《そいつ》は、

——はくしょん！

と、くさめを放ったのであった。

——へっへっへっ。風邪でも引いたのかね？

——何奴かが俺を睨みやがったのさ。

——それでくさめを？

——さうさ。お前以外にこの俺を睨み付ける《存在》がゐるとは思ひもよらなかったからな。
——しかし、俺にはお前以外何《もの》も見えやしないぜ。
——当然だらうが！　お前の視覚は此の世を見るべく定められてゐるからね、くっくっくっ。
——するとお前は何処の虚空かは知らぬが、お前にしか見えぬその虚空で誰とも、若しくは何《もの》とも知れぬ《存在》の幽霊、若しくは亡霊、へっ、この言ひ方は可笑しいがね、その《存在》の幽霊、若しくは亡霊でも見ちまったといふ事かね？
——ご名答だ、くっくっくっくっ。彼の世の何《もの》かが俺を睨み付けたのさ。
——つまり、それは、お前にのみ見えてしまふのであらうその虚空に棲む幽霊、若しくは亡霊共が、彼の世といふ処で、つまり、幽霊若しくは亡霊共が、お前の噂で持ち切りといふ事ぢゃないかね？
——へっ、誰かが俺の噂をしてゐるから俺が「はくしょん！」とくさめをしたと、お前は如何あっても看做したいらしいが、さうは問屋が卸さないぜ。お前が考へてゐる事と逆の事が今起きたのさ。つまり、俺の頭蓋内の闇を何《もの》かがすっと通り抜けたのさ。
——それを何《もの》かの《存在》の幽霊、若しくは亡霊と言ふのではないのかね？
——へっ、さう看做したければさう看做せばいいだけのことさ、ちぇっ、下らぬ。
——ふっ、しかしだ、この頭蓋内といふ闇たる《五蘊場》は、脳といふ構造をしてゐるとして、その脳が己の内部をすうっと通り抜けるそのぞっとする皮膚感覚みたいな《もの》が、脳にさへある筈だがね。それに加えへて、この頭蓋内の闇たる《五蘊場》は気配には余りにも敏感すぎるぢゃないか。
——へっ、それはお前だけの事だらう？
——馬鹿が！　お前こそその己の頭蓋内をすうっと通り抜けたぞわぞわっとする感覚をいの一番に感じた筈だぜ。
——ふむ。
——ちぇっ、『ふむ』だと！　己を震撼させたその気配をお前は出来るならばなかった事として揉み消したいだけだ。つまり、お前はお前から、《零》も《8》も奇蹟的に併せ呑む特異点たるお前のその悍ましき《異形の吾》から目を背けたいだけぢゃないのかね？
くっくっくっくっ。
——しかし、それで構はぬのではないかね？
——ちぇっ、それではお前がお前自身の《存在》に、有無も言はずに堪へられる道理がなからうが！
——ふっふっふっふっ。その証拠がお前の《存在》か、ちぇっ。
と、私がさう言ふと再び《そいつ》はぎろりと此方を睨み付けては、
——くっくっくっくっ。
と、何ともいやらしい嗤ひを発するのであった。

――お前に俺が見えてしまふ不思議な事態に対してもお前は慌てふためく己を只管己から隠し果せたいだけなのさ。
――それで？
――そして、お前は己の所在無さにたじろいでゐる。
――それで？
――そして、お前は己が果たして、此の《零》と《8》の間を揺れ動くそのこれ以上ない大揺れする《吾》を認識しちまって、ふっ、お前自身が何を隠さう一番動揺してゐる。
――それで？
――そして、お前は卒倒する寸前さ。
――ふっふっふっふっ。俺はそんなに軟ではないぜ。ちゃんと、己が《零》と《8》を併せ呑む外ない特異点としてしか此の世での《存在》が、へっ、それを譬へれば《神》の摂理に従ってゐるに過ぎぬとすれば、《吾》が特異点以外で此の世に《存在》することは、《神》の摂理によって決して許されぬ事ぐらゐ端から「先験的」に若しくは生きるべき《本能》として既に知っちまってゐる。
――そして、諦念もだらう。
――さうさ。その諦念こそ此の世に《存在》するべく定められた《もの》が必ず獲得せねばならぬ《生》の為の生きる術さ。
――しかし、それでは、《存在》は《存在》自身を《存在》の傍観者として、へっ、つまり、《存在》といふ《もの》を《存在》はしてゐるが、唯の生きる屍として《存在》は傍観する《もの》としてしか此の世に《存在》出来ぬのではないかね？
――何故に？
――諦念とは裏を返せば《吾》を恰も《他》の如く、此処が味噌なのだが、《吾》から仮象の距離を無理矢理にでも設定して、《吾》を《他》として扱ふ事で、《吾》に降りかかる火の粉でも払ふやうにして、この《吾》に否応なく降りかかって来る現実といふ得体の知れぬ《もの》をやり過ごす、つまり、それは、詰まる所、徹底的に受動的な《生》を《生》だと無理強ひする哀しい生き方の事だらうが！
――しかし、殆どの《吾》たる《主体》はさうやって生き延びてゐるのが現実だらう？
――すると、お前はその現実とやらを受け入れ、つまり、受容するのだな。
――ちぇっ、其処が大問題なのさ。《吾》は絶えず《吾》たらむと強要され、現実は時時刻刻と移り変はり行く、この有為とやらが曲者なのさ。
――つまり、《主体》なんぞ抛って、有為は《主体》の《存在》にお構ひなしに転変するからだらう。
――さう。現実といふ有為は転変する事を金輪際已める事はなく、しかし、それでも《吾》は《吾》たらむと《神》の摂理がさう命ずる。
――へっ、それは《神》の摂理かね？　何でも《神》の所為にすれば《主体》が生き延びられるなんぞ考へるのもおこがましいのだがね。簡単に言っちまへば《吾》は《吾》が可愛くって仕方がない。だからその可愛い可愛い《吾》たる《主体》は、《死》すまで

出来得れば無傷のままの《吾》として《生》を終へたいといふ何たる自己陶酔の極み！
——くっくっくっくっ。《存在》はそれが此の世に《存在》しちまった以上、この《吾》といふ《もの》を愛さずにはゐられぬ皮肉、へっ、そこで、その皮肉に抗ふ事が出来得る《存在》が、さて、自殺せずに生き残ったならば、その《存在》は如何なる《もの》となってゐると想像するかね？
——自己嫌悪を噛み締めながら、此の世の『生きよ！』といふ命令にぢっと堪へるその《存在》は、只管、自己変容を願ふ意識体として此の宇宙へ唯唯、反旗を翻す筈さ。
——それで？
——《存在》は只管、《存在》に堪へる。
——それで？
——もしかすると、《生》の全肯定へと《存在》の思ひは反転してゐるかもしれぬ。
——くっくっくっくっ。つまり、《存在》の正否の蓋然性の問題か、ちぇっ、さうすると自己嫌悪する《存在》ですら《生》と《死》の Balance(バランス)の上にしか《存在》しない、つまり、全てが確率の問題に帰すだけぢゃないのかね？
　と、さう《そいつ》は吐き捨てるやうに言ったのであった。成程、《そいつ》が私に見える形で私にとっては確固と《存在》する次第に至ったのは、私が、只管、自己嫌悪する事で、やっと生き延びられた《存在》でしかない事を、私は苦虫を噛み締めるやうにその時、否が応でも自覚せずばをれなかったのであった。
——それでは、お前のいふ《存在》とは何なのかね？
　と、《そいつ》は言ったのであった。
——ふむ。俺の《存在》か……。ふん、格好つけて言へば、自己嫌悪する事でしか生き延びられぬその《生》に縋り付く力、つまり、それを約めて言へば、《生力》が生じる《存在》として腹を括った《存在》とでも言へるかな。
——すると、《存在》は《存在》を徹底的に嫌ふ事が《存在》する条件と、お前は言ひ切れるのかね？
——ああ。さう言ひ切って構はぬぢゃないかな。
——へっ、自己嫌悪が《生力》と来たもんだ！
——それぢゃ、逆に尋ねるが、お前は何故に俺の前に出現したのかね？　多分、お前もお前の《存在》に我慢がならなかったのぢゃないかね？
——さうさ。俺がお前に重なる悍ましさに我慢ならなかったのさ。
——む！　俺に重なるか——。
　と、私がさう言った刹那、《そいつ》は私をぎろりと睨み付けるのであった。
——お前すら俺に重なる事が我慢がならぬこの俺は、一体全体どうすればいいのかね？
ちぇっ。
——ふっふっ。唯、只管、『《吾》《存在》す』と念じればいいのさ。
——随分と優しい言葉を吐いたもんだ。
——なにね。自己の中にぽっかりと空いた漆黒の闇の深淵を一時も目を離さずに覗き込

んでゐる《吾》といふ《もの》の変容する様をこの目で見たいだけなのさ。
――へっ、俺に自己変容する蓋然性が残されてゐるのかね？
――生命は、それが何であれ、環境に合はせて《存在》しちまふ能力を持たされてゐるだらう？
――さう、そして、それが諸悪の根源ぢゃないかね？
――さうだな。さう言ひ切っても構はぬな。《吾》たる《もの》、《吾》以外の《吾》へ変容す。
――へっ、赤子を見ればそれは一目瞭然だらう。
――ふむ。赤子か……。それ以前に、受精卵の段階で既に《生》の秘密が隠されてゐる。
――しかし、受精卵は、それが人類であれば、人類になるべく定められてゐる。人間は人間以外の生命をこれまで産んだ事はなかったか……。
――しかし、受精卵は、否、此の世の森羅万象は突然変異する蓋然性が全てに秘められてある筈だ。
――しかし、突然変異は大概、すぐに死す、つまり、生き延びられぬ《存在》として生まれ出る《もの》だぜ。
――しかし、《存在》は自己嫌悪を《生力》に変じて、如何なる環境でもそれに順応し、また、如何なる環境にも順応できなければ、唯、《死》が待ってゐるだけなのもまた、現実だ。
《そいつ》は其処で再び私をぎろりと睨み付け、
――しかし、現実に巧く適応出来ない《存在》ばかりが、此の世に《存在》してゐるのぢゃないかね？　くっくっくっくっ。
――つまり、それは、《存在》といふ、ちぇっ、此処に大いなる矛盾が潜んでゐるとしか私には思へぬのだが、《存在》は絶えず現在の様態で判断されることを最も嫌ふ《もの》として、ふっ、其処に《吾》に対する仮象の距離を無理矢理にでも生じさせては、《吾》なる《もの》を出来得る限り客観視出来る《もの》として捉へ、それはまた、笑止千万な事でしかないのだが、その《吾》の振舞ひ、ちぇっ、それを私は《異形の吾》と名付けて、《吾》から湧出する思惟で串刺しにする事を、或る種、《吾》の宿命として、この《吾》なる《もの》は目論んでゐると独断的に看做してゐるのだがね、しかし、その本質は自慰行為でしかない事もまた承知してゐるが、詰まる所、そんな《吾》はさうやって生存し続けさせる事にこの《吾》は汲汲として、《吾》の懊悩は、しかし、《存在》が《存在》する限り、その懊悩は無くなりゃしないのだが……。
――それが、cogito,ergo sum.ぢゃないのかね？
――つまり、《吾》は絶えず《吾》からずれ行く《存在》といふ事か――。
――くっくっくっくっ。《吾》は絶えず《吾》から遁れ行く《もの》だとして、それがどうしたといふのかね？　そんな事は《存在》する《もの》が《存在》を問ふ以前に、つまり、《存在》に所与の《もの》ぢゃないのかね？
――しかし、それはAporia(アポリア)な問ひだぜ。

――だから、それがどうしたといふのか。くっくっくっくっ。ほら、悩め、《吾》が《吾》為らざる事を徹底的に悩め。くっくっくっくっ。

《そいつ》は再びいやらしい嗤ひをその相貌に浮かべ、ぎろりし私を睨み付けた刹那、不意とその気配を消したのであった。

さうして独りぽつねんと此の世に残された私は、しかしながら、只管、《吾》から絶えず遁れ行く《吾》の何ともやり切れない、《存在》する事の宿命といふ《もの》を考へながら、しかし、其処にまた、

――何とでも為れ！

と腹を括ってゐる私が、私の内奥にちゃんと《存在》する事を知ってもゐるので、《吾》の《存在》に一時は狼狽へつつも、肝が据わった有様で私はゆっくりと瞼を開けたのであった。

――世界に対峙する《吾》、そして、《吾》の内奥に仮象の距離を持って棲まふ《異形の吾》に対峙する《吾》は、絶えず現在に取り残されてゐる。世界、此の私の眼前に拡がる此の世界は全て、過去か未来であって、現在にあるのは世界広しと雖も、独り《吾》のみといふこの孤独は、《存在》全てが担ふべくあり、それを心底味はひ尽くさねばならぬ悲哀に違ひないのだが、さうであるが故に《吾》は、《吾》の《存在》を心の何処かでは信じ切ってゐて、《吾》はその信頼なくしては一時も存続出来ぬのも、また、真実に違ひない。……ならば、此の《吾》は何とするや――。

そんな事をうつらうつらと考へながらも、私は、眼前に拡がる世界を尚更見透かすやうに凝視しては、《吾》といふ《もの》が背負ふ現在の重さに圧し潰されつつも、その現在の足下で何とか息をして、此の世を生き延びる《吾》のその屈辱をぢっと堪へつつ、私は私の心の深奥では、

――《吾》、此処に在れりし！

と、《吾》の《存在》を快哉するやうに、私は、私の《存在》を愛おしく思はずにはゐられなかったのであった。

――世界、若しくは神は、《吾》を現在に《存在》する事を許せしや。

多分、世界、若しくは神は、《吾》が此の世に《存在》する事に全く無頓着な筈で、それ故に《吾》の懊悩は底無しの深淵となって、吾が胸奥にぽっかりとその口を開けたまま、未来永劫に塞がれる事無く、私が此の世に《存在》する限り、その懊悩の深淵は《吾》に寄り添ふぬやうに必ず《存在》する代物に違ひなく、世界は、即ち、底無しの深淵の別称に違ひないと、私は心底思ひ、暫く眼前の世界を眺めながらこの《吾》が《存在》する事の懊悩と不思議を私はじっくりと味はってゐたのであった。

（完）